富山県上市町

黒川上山古墓群発掘調査概報

1995年3月

上市町教育委員会

報告書抄録

ふりがな	とやまけん なかにいかわぐんかみいちまちくろかわうえやまこぼぐん
書名	富山県中新川郡上市町黒川上山古墓群
編著者名	上市町教育委員会
編集機関	上市町教育委員会
所在地	930－03 富山県中新川郡上市町法音寺1番地
発行年月日	1995年 3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
くろかわ うえやま こぼぐん	なかにいか わぐん かみいちまち くろかわ あざうえやま	016322	322034	36度 42分 50秒	137度 24分 23秒	19940513 ～ 19940727	1,500	農業集落 排水事業 管理道路 新設
黒川上山 古墓群	中新川郡上市 町字上山							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
黒川上山 古墓群	散布地 古墓群	縄文時代 中世	穴・溝 中世墳丘墓19 土壙墓2 集石 1	縄文土器・石器 珠洲焼(蔵骨器) 土師質皿	中世の遺跡により破損 調査区以外も含め遺跡全体で40基以上の墳丘を確認 遺跡は、方線変更の後全面保存

富山県上市町

黒川上山古墓群発掘調査概報

1995年3月

上市町教育委員会

序

上市町黒川は全国名水百選に選ばれた穴の谷霊場の所在する地であり、付近には開谷・護摩堂などの地名もみられる地域です。地区内には昭和63年の詳細遺跡分布調査で古寺の跡や塚跡が存在することが知られていましたが、その内容についてはほとんど手がかりのない状態でした。このような中で平成５年度から黒川地内で下水道工事に伴う管理用道路が計画され、その一部が塚跡にもかかることになり事前の発掘調査を実施することになりました。

調査は約3,000㎡におよぶ範囲のうち1,500㎡を対象に実施しましたが、調査がすすむなかでこの塚跡群が鎌倉時代のはじめから営まれていた中世の古墓群で、非常に良好に遺構が残っており、その数も墳丘の数で39基に達することが明かとなり、富山県内はもとより北陸でも稀に残る中世墳墓群であることが判明しました。

この結果を受けて町教育委員会では富山県文化課・県埋蔵文化財センターの指導のもと、奈良大学学長　水野正好氏、県文化財保護審議委員　湊晨氏など県内外の有識者の方々から意見をいただき町当局と協議、地元黒川地区の了解も得たうえで路線の変更をお願いし、全面的に保存することになりました。

遺跡は平成６年12月に町指定の史跡として保存されていますが、今後は遺跡の保全と一般公開のための整備が必要となります。そのためには、この墓群が営まれた背景や当時の黒川、ひいては中世の富山県の様子を復元するところまできめこまかな調査が必要であると考えます。

調査は、平成６年５月から８月に実施しましたが、この間に掘り出された資料が上市町及び富山県の歴史を物語るものとして活用されれば幸いです。

最後になりましたが調査及び保存にあたり多大な御指導をいただきました富山県文化課・県埋蔵文化財センター、地元黒川地区のみなさま、富山考古学会をはじめ御協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

平成７年３月

上市町教育委員会

例　　言

1．本書は富山県中新川郡上市町黒川地内に所在する上山古墓群の発掘調査報告である。

2．調査は、平成６年５月13日から同年７月27日まで実施した本調査と墓群の東側で平成６年９月９日から22日まで実施した試掘調査に区分されるが、本書はこれらの調査結果を併せて集録した。

3．調査は、本調査1,500㎡、試掘調査対象5,000㎡である。

4．本調査並びに試掘調査は、上市町教育委員会が実施したが、試掘調査は県補助金を受け実施した。

5．調査事務局は、上市町教育委員会にあり、調査期間中、文化庁記念物課、富山県教育委員会（文化課・県埋蔵文化財センター）の指導を受けた。事務及び調査担当は、生涯学習課主任高慶孝が担当し、生涯学習課長神谷育雄が総括した。

6．遺物の整理、本書の編集・執筆は、調査担当が行った。遺物の実測・トレースは、調査担当が中心となり、富山大学大学院人文科学研究科学生新本真之・同長谷川幸志がおこなった。また、縄文土器の記述の文責は長谷川にある。墓群の石組みなどの石材は、二川正雄氏・上市町文化財保護委員井原正則氏から御意見をいただいた。蔵骨器及び墳丘墓主体部などから出土した人骨については富山医科薬科大学医学部解剖学（第１教室）助教授　森沢佐歳氏に分析をお願いし、玉稿をいただいた。

　調査期間中、奈良大学学長　水野正好氏・富山県文化財保護審議委員　湊晨氏の視察を受け貴重な御意見をいただいた。特に、水野氏からは墓道や墳丘の軸方向の事について貴重な御指導をいただいた。

7．平成６年11月23日に遺跡の現地説明会を開催したが、この際、富山考古学会の協力により遺跡の検討会を行った。

　そのほか調査期間中及び本書の作成にあたり、下記の方々から有意義な指導・助言並びにご協力をいただいた。記して深甚なる謝意としたい。

京田良志、西井龍義、県立上市高校教諭 舟崎久夫、富山大学人文学部助教授 前川　要、富山市教育委員会生涯学習課主幹 藤田富士夫、富山県教育委員会文化課副主幹 岸本雅敏、同主任 松島吉信、富山県埋蔵文化財センター所長 桃野真晃、同所長代理 上野　章、同課長 狩野睦・宮田進一、同主任 神保孝造、斉藤　隆、久々忠義、橋本正春、富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所係長 池野正男、同主任 酒井重洋、立山町教育委員会社会教育課主事 三鍋秀典・同学芸員 柴垣智子、婦中町教育委員会生涯学習課主事 片岡英子（順不同・敬称略）

8．調査参加者はつぎのとおりである。

鈴木和子、長谷川幸志、（以上富山大学大学院）大泰司統、野中由希子、佐藤聖子、大平奈央子、近藤美紀、米出敬子、坪田聡子（以上富山大学学生）成川定信、吉田盛太郎、高城富美子、高城登志子、平井淑子、川上富美子、金子みつゑ、高城英子、高城せつ子、荒木智恵子、伊藤萩子、酒井ヨシイ、笹野ミヨシ、井原ミサヲ、伊藤キミ子、井原ミサホ、稲垣百合子、左近ナミヰ、若木啓子、（以上作業員）

新本真之、長谷川幸志、芳賀万里子、平井晶子、（整理作業員富山大学大学院・富山大学学生）

目　　次

序文

例言

Ⅰ　遺跡の環境 ―― 1
　第１図　地形と周辺の遺跡 ―― 2

Ⅱ　調査に至る経過 ―― 3

Ⅲ　調査の経過と層位 ―― 3
　第２図　地形と区割図 ―― 4

Ⅳ　調査結果 ―― 5
　上山古墓群 ―― 5
　１．遺構 ―― 5
　２．遺物 ―― 10
　上山東遺跡 ―― 14
　１．遺構 ―― 14
　２．遺物 ―― 14
Ⅴ　調査の成果の整理 ―― 15
　１．墓の分類 ―― 15
　第１表墳丘墓の形態別比較 ―― 16
　２．土壙墓について ―― 17
　３．集石について ―― 18
　４．群構成について ―― 18
　第３図　上山古墓群配置略図 ―― 19
　５．調査区以外の墓群 ―― 20
　６．墓道について ―― 20
　第２表　墳丘墓・土壙墓・集石一覧表 ―― 21
Ⅵ　出土焼骨の分析 ―― 22

Ⅶ　まとめ ―― 28
　第４図　餓鬼草紙にみるいろいろな墓標(塔) － 30

　引用・参考文献 ―― 31

第５図　墓群全図
第６図　２号墓～３－１号墓実測図
第７図　５号墓～７号墓実測図
第８図　16号墓実測図
第９図　８号墓実測図
第10図　９号墓実測図
第11図　10号墓実測図
第12図　11号墓実測図
第13図　12号墓実測図
第14図　13号墓実測図
第15図　17号墓実測図
第16図　14号墓実測図
第17図　18号墓実測図
第18図　19号墓実測図
第19図　15号墓実測図
第20図　試掘調査地区地形図

図　　版

付　図１　上山古墓群調査区遺構配置図
付　図２　１号墓～７号墓配置図

Ⅰ　遺跡の環境

黒川上山古墓群は、富山県中新川郡上市町黒川字上山に所在する（第１図・第２図・図版１）。上市町は、富山県の東南部に位置し、立山連峰に源を発する早月川、上市川、白岩川に沿って東南から北西に延びる町である。西は、県の中心である富山市に、東は、標高2,998mの剱岳をはじめとする北アルプスの山々が連なる。町域は東西約26㎞、南北約16㎞で、面積は約237㎢測る。

遺跡の所在地である黒川は町の市街地の北東にあり、上市川の支流、郷川上流の標高34mの東岸に位置する。北西部は、滑川市小森に接する。郷川はここで山間地から平野部にぬけ、小規模な扇状地を形成しており、付近一帯は水田地帯である。また郷川は黒川の東端で、交地川・村下川・片地川に分流し、さらに交地川の上流で護摩堂川に分れる。上山はこの分流点を南西に見下ろす舌状の丘陵地で、遺跡はこの丘陵の標高約65m～70mに占地する。郷川との比高差は約30mで遺構のある丘陵は比較的なだらかに北西から南西に傾斜している。この丘陵の北西・南東・北東にはこの丘陵より高い山地が取り囲むようにそびえ、南東と北西にはそれぞれ比高差20m～30mの谷がある。

遺跡は、上市町教育委員会が昭和63年に実施した遺跡詳細分布調査で発見したものであるが、地元では馬の墓場（馬塚）とか七堂伽藍があったといわれてきた地で丘陵の雑木林であったため、現状が荒らされることなく現在まで残ってきたものと考えられる。

遺跡の周辺には、北東に全国名水百選の指定を受けた穴の谷霊場（元は修験道の行者穴といわれる。）、さらにその北東には弘法大師ゆかりの地と言われる「護摩堂（ゴマンドウ）」、南東に円念寺山・宗教集落として成立したといわれる開谷（カイダン）などの地名が散見される。また、地区内には真言宗本覚院、日枝神社などの寺社がある。この内、本覚院は、享保７年に僧、長玄によって開かれた。それ以前は花崗山真興寺があったが富山に移転したためその跡をついだといわれる。真興寺は寛弘５年(1008)に真興上人によって現在の本覚院うら手の山中に開かれたものと言われる。真興上人は、寛和２年(896）に弘法大師止錫の護摩堂村弘法堂を参拝の帰り、麓のこの地を八正道を宣布するにふさわしい地であるとして庵を結んだと伝えられる。これにより最盛期にはここを中心に、円念寺・浄土寺、開谷には源内坊・奥野坊・作内坊・好田坊などができて、信仰の中心になったといわれる。黒川から護摩堂に至る道は、一部町道として現在も残っており、それに続く旧道も確認される。この道は、遺跡の南直下を通過し、護摩堂川の沢ずたいに護摩堂村に伸びている。

町内及び郷川・上市川沿いの古代から中近世の遺跡に目を転ずると、市街地の北東に真言宗の古刹大岩山日石寺(磨崖仏・京ケ峰経塚、平安前期)、東に曹洞宗の眼目山立山寺(眼目山旧開山堂遺跡、鎌倉後期)などの寺院や経塚(日中玉橋経塚・日中東経塚)、南北朝期から戦国時代まで中新川一帯に勢力のあった土肥氏をはじめとする豪族の居館跡(蓑輪城跡・稲村城跡・郷柿沢館跡・柿沢城跡・茗荷谷山城跡・郷田砦・弓庄城跡・有金城跡・堀江城跡・小森館跡・堀の内城跡など)、文献上、古代から中世に登場する堀江保・小森保もしくは堀江荘に関連するとみられる遺跡(江上Ｂ遺跡・東江上遺跡・上梅沢町遺跡・本江馬場田遺跡・横越遺跡)など数多くの遺跡がみられる。これらの遺跡は、古代から中世にかけてこの地域に連綿とした人々の営みがあったことを物語るばかりでなく、時間的なつながりや、政治的・宗教的になんらかの関係があったものと考えられ、今回調査した上山古墓群の成立に深く関わる勢力の存在を示すものかもしれない。

第１図　地形と周辺の遺跡 (1/50,000)

1．黒川上山古墓群，２．蓑輪城跡，３．広野Ｄ遺跡，４．広野Ｃ遺跡，５．眼目山旧開山堂遺跡，６．稲村山城跡，７．日石寺磨崖仏，８．大岩京ヶ峰経塚，９．郷柿沢館跡，10．湯崎野西遺跡，11．湯神子Ｂ遺跡，12．柿沢城跡，13．茗荷谷山城跡，14．郷田砦，15．弓庄城跡，16．日中玉橋経塚，17．日中東経塚，18．横越遺跡，19．若杉神田遺跡，20．中小泉東遺跡，21．石仏遺跡，22．石仏嶋町遺跡，23．石仏南遺跡，24．大永田西遺跡，25．江上Ｂ遺跡，26．上梅沢町跡，27．上梅沢遺跡，28．有金城跡，29．堀江城跡，30．本江馬場田遺跡，31．鋤山砦跡，32．小森館跡，33．堀の内城跡，34．水尾南城跡

Ⅱ　調査に至る経過

上市町黒川地内では、平成４年度から、農業集落排水事業が計画され、全国名水百選の指定を受けた穴の谷霊場を含む黒川地区一帯が事業対象地区として指定された。平成５年度には、集落排水の管理用道路が計画され、一部施工も開始された。しかしながら同地内には、上山古墓群の存在が知られており、上市町上下水道課・上市町教育委員会・富山県教育委員会の三者により、遺跡の保護と工事計画との調整を計るための事前協議が催された。

協議では、新設の道路が遺跡地内に最も影響の及ばない方線をたどるように計画を変更し、やむを得ず遺跡にかかる部分についてのみ記録保存することとし、他の部分については現状保存することで三者が合意した。

Ⅲ　調査の経過と層位

第１次調査（平成６年度本調査）

平成６年５月13日から同年７月27日までの延べ72日間で実施した。調査対象は1,500㎡でこのうち管理用道路が計画されている部分について遺跡の内容を確認した。

調査では、墳丘墓19基などの遺構、縄文土器・石器、珠洲焼の蔵骨器、土師器（かわらけ）、などの遺物が確認された。遺構と共搬する蔵骨器・土師器は、ほぼ13世紀代のもので、この墓群の造営時期もほぼその年代に比定されることが確認された。また、調査地区外の部分にも16基以上の墳墓が確認され、この結果遺跡全体で39基以上の墳墓が存在し、極めて良好に残存していることが明らかとなった。この結果を受けて上市町教育委員会は、県文化課・県埋蔵文化財センターの指導のもと、県文化財保護審議委員湊晨氏・奈良大学学長水野正好氏に現地視察をお願いし、保存に関する意見をいただいた。この意見をもとに、開発主体である町当局と再度協議を重ね、地元黒川地区からの保存要請もあり、全面保存の方向で合意した。その後、９月定例議会、文教厚生委員会で報告、道路方線変更に伴う補正予算案も議会を通過して、保存が確定した。11月23日、遺跡の現地説明会・遺跡検討会を富山考古学会の協力のもと実施、併せて町文化財保護審議委員会を開催し指定の承認を得た。12月８日町教育委員会で町指定文化財として指定された。この間の町当局の誠実な対応に敬意を表したい。

第２次調査（平成６年度試掘調査）

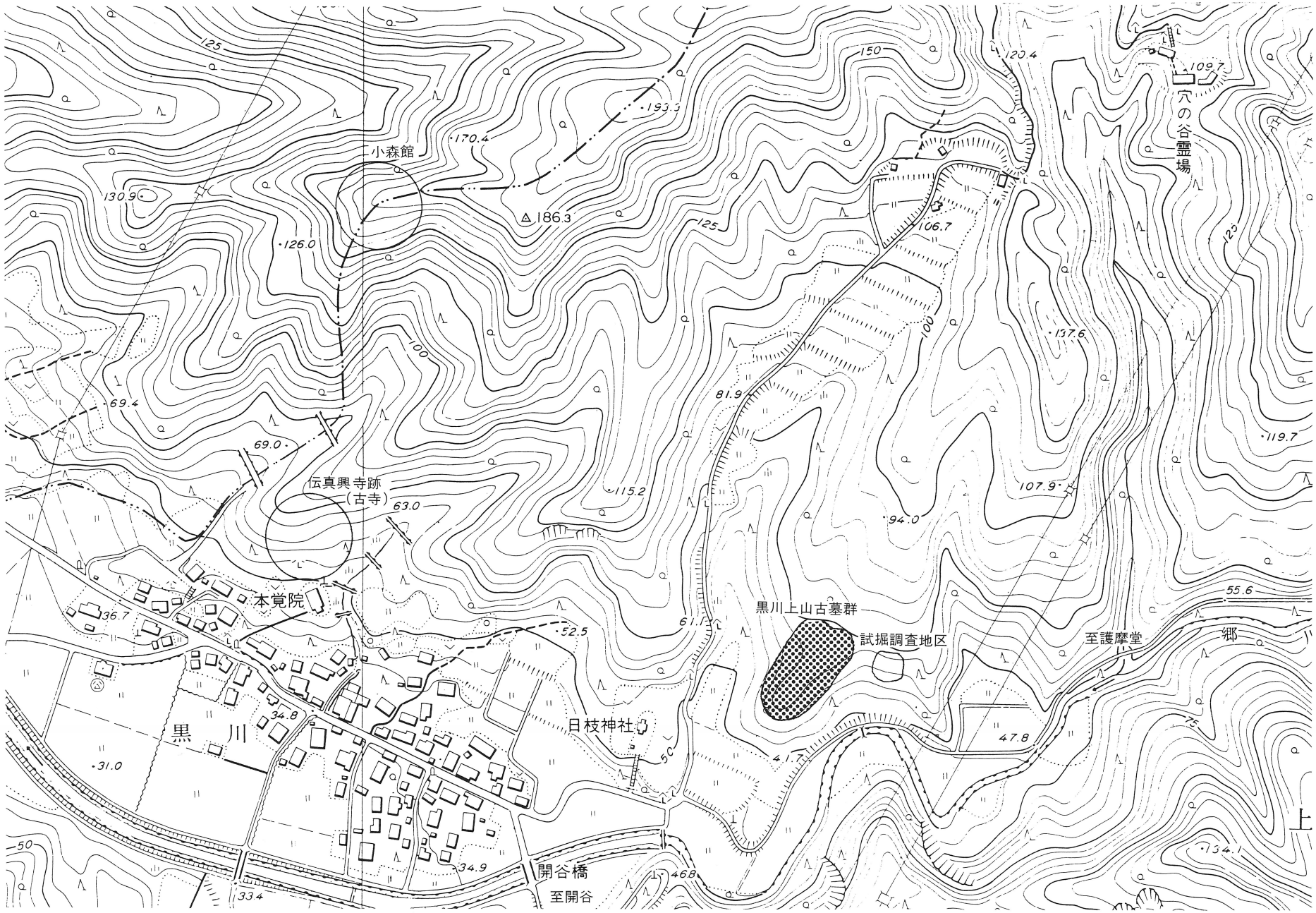
平成６年９月９日から同年９月22日までの延べ11日間で実施した。対象は古墓群の東側の山林で、もとは畑作が行われていた地区であるが、管理用道路の方線変更に伴って、行われたものである。調査対象は、約5,000㎡で遺跡の存在の有無について調査した。

その結果、墳墓４基を新たに発見、須恵器片、縄文時代中期の土器・石器など整理箱１箱分の遺物を採集した。これをもとに、道路方線を検討し、遺跡に支障のないよう大きく迂回させることで、この地区も全面保存されることとなった。

なお、調査は、上市町教育委員会が県補助金を受けて実施した。

層位

遺構は、表面の落葉、雑草、腐食土(5～10cm)を排除することで検出される。石組み墓などは一部露出しており、調査区全体の墳丘は、調査前の測量時点である程度確認できる。遺構面は、黄褐色土であるが、墳丘盛土や、遺構検出面から縄文時代中期前葉の土器が出土しており、墓群築造前に縄文遺跡があったものと考えられる。



第2図　遺跡周辺図 (1/5000)

Ⅳ　調査結果

上山古墓群

1．遺構（付図１・２、第５～20図、図版11～20）

調査により検出した遺構は、縄文時代と13世紀代の鎌倉時代に属するものである。遺構は、調査区全体で検出されるが、縄文時代の遺構は、ごく一部で検出されるのみで、明確なものはほとんど検出されない。

遺構が検出されるのは、標高69mから64mの舌状の丘陵端部の斜面上で、東西約34m、南北約52mの範囲にわたっている。墓群全体は、標高67mの等高線上で約１mの段差が設けられており、今回の調査では、この段差の北側を調査した。遺構全体は、動物などにより、若干削られたものがあるものの、ほとんど手付かずのまま残っており、非常によい残存状況を示している。

検出した遺構は、墳丘墓（石組みのあるものとないものがあるが墳丘をもつものをこの名称で呼ぶ。）19基、石組み遺構１基、土壙墓と思われるもの２基と、縄文中期前葉と考えられる溝１条、穴12ヵ所である。

墳墓（付図1・2、第5～20図、図版11～20）　墳墓には平面形が方形のもの(13基)、長方形のもの(１基)楕円形のもの(３基)、不正円(２基)のものの三種類がある。しかし、楕円や不正円のものであっても、石組みを施されたものは基本的に方形の石組みがなされており、18基が方形を基本として造営されている。この他、土壙墓(２基)などがある。

１号墓（付図１・２、図版12の3）

X79218～79226，Y21406～21418に位置する。この墓群の北東端にあり位置からみて最も早い段階で造営されたものと考える。周囲にコの字状の周溝をもち、規模はこの周溝を含めて長軸10.50m短軸7.12mを測る。周溝底部から墳頂までの高さは、1.05mである。南東がわに２・３・４号墓があり、周溝はこの部分でとぎれている。築造当初は周溝がめぐっていた可能性があるが、今回の調査では確認していない。周溝の幅は、約１mで、断面形はU字状を呈する。墳頂部は3.08×2.36mの隅丸方形で、平坦面を作りだしている。この平坦面に主体部とみられる直径約30cmの穴が２個みられ、周辺に焼骨片が散布している。墳頂に人頭大の石がみられたが、基本的にこの墓には石組み集石は施されていない。墓の正面は南西方向で、主軸は、墳頂でN28°－Eを測る。

２号墓から４号墓　１号墓の後に造営されたもので、ブロックとしてとらえられる墓群である。

２号墓（付図１・２、第６図、図版13の1～3）X79212～79218，Y21410～21416に位置する。１号墓に接して北西に造営されている。造営は切り合いから１号墓の後と考えられる。平面形は方形で、規模は東西5.11m、南北4.63m、高さ0.89mを測る。南側基底部に幅50cm、長さ４mにわたって偏平な石が並べられた張り出しが作られており、祭壇状の遺構と考えられる。墳墓全体に、拳大から人頭大の石が施されている。上部から２段の平坦面がありその平坦面が、埋葬の場となっている。平坦面は上の一段目が3.0m×2.26m、二段目が4.20m×3.47mの規模がある。一段目には主体部と思われる50cm四方の方形の区画があり焼骨片が散布している。二段目には全体に拳大の偏平な石が敷き詰められその中に蔵骨器による焼骨の埋葬が３ヵ所で確認された。これらの蔵骨器は、ほぼ完形で出土しており、珠洲焼の壺に同じく珠洲焼の擂鉢・鉢が蓋としてかぶせられたものである。珠洲焼の編年(吉岡．1994)でⅡ～Ⅲ期(13世紀代)に比定されるが擂鉢のすり目や底部の状態から使用された痕跡があり、墓の造営時期とは若干のずれがあるものと考える。蔵骨器の、埋納は、墳丘に直接穴を開け埋めただけのものであるが、１ヵ所底面に偏平な石をおきその上に収めているものがあった。西南隅には五輪塔も検出された。石質は砂岩である。地輪・水輪・火輪で水輪に「ア」

を意味する凡字が刻まれている。水輪に丸いほぞが、火輪にほぞ穴が付いており対応している。蔵骨器の傍らに立てられていたものと考えられる。なお五輪塔は、[1] 13世紀前半に比定される。以上から、２号墓ははじめに１段目に骨をそのまま埋葬した時期と、蔵骨器を埋納した時期の２時期があるものと考える。見方を変えると、当初あった墳墓に後から平坦面と祭壇を付け足した可能性もある。後述する２－１・２－２号墓などが作り付けられており、後に手がはいった可能性が高い。なお、主軸にたいする方位は墳頂部でN41°－Eである。

２－１号墓（付図１・２、第６図、図版13の1）X79212～79215，Y21415～21418に位置する。２号墓に増設される形で盛土が為され、縁石を方形に組んで形作られている。しかしながら、２号墓との境界を石列などにより分けることはされておらず、一見したところ、一対の施設と見れないこともない。縁石は人頭大の石と、50cm程度の横長の石を組合わせて並べられている。上部は石が施されておらず主体部も明確なものが確認されない。しかし、骨片が散布しているのが確認できるため、焼骨を直葬したものと考える。規模は、2.80×1.89m、高さ0.56m、主軸に対する方位はN38°－Eである。

２－２号墓（付図１・２、第６図、図版13の4･5）X79212～79215，Y21415～21418に位置する。１号墓の東の土塁状の高まりの上に方形の配石を施して作られたもので規模は、2.00×1.64m、高さ0.4mである。この土塁状の高まりは、１号墓周溝の排土を積み上げたものとみられ、これを利用していくつかの墓が作られたものと考えられ、珠洲焼の破片や焼骨が散布している。しかしながら、明確に確認できるものは、この１ヵ所のみである。埋葬は方形に組まれた石組み内に、骨蔵器を埋納するもので、珠洲焼の壺が使用されている。蓋は、失われているが、２号墓と同様なものと考える。珠洲焼は２号墓と同様珠洲焼の編年でⅡ～Ⅲ期(13世紀代)に比定される。なお、この土塁状の高まりの規模は、7.00×3.06m、高さ約0.4mである。

３号墓（付図１・２、図版14の1～3）X79214～79220，Y21406～21411に位置する。１号墓と２号墓に接続して築かれている。２号墓とは一部窪みが設けてあり区画されるが、１号墓とは区画の縁石により区画される。この縁石は、１号墓墳丘裾の上に築かれ１号墓の後に３号墓が築かれているのが確認できる。規模は4.28×3.46m、高さ0.65mである。縁石は、基底部・裾・上面に施されており、さらに主体部に約60cm四方の縁石がある。平面形は隅丸方形で前面は南側となる。上面は中央部に集石が2.54×2.42mの規模であり、東と西は集石が為されていない。主体部は一部動物などにより荒らされているようで、蔵骨器が散乱している。珠洲焼の擂鉢が元位置を保っているようであるが、一個体分のみ確認されるだけである。珠洲Ⅱ期のものと考えられる。

３－１号墓（付図１・２、第６図、図版14の4）X79216～79218，Y21411～21413に位置する。１号墓東南裾と２・３号墓に挟まれた部分に方形の区画縁石を施しただけのものである。２・３号墓が築かれた後に据えられたものと考えられる。規模は、1.60×1.43mでほぼ方形である。主体部は蔵骨器によるもので、珠洲焼の小型の甕に偏平な石を蓋としてかぶせたものである。蔵骨器内には少量の骨が納められている。主軸に対する方位はN34°－Eである。

４号墓（付図１・２、第６図、図版14の5）X79218～79222，Y21410～21408に位置する。３号墓の西に接続する形でつくられているが、境界はやや窪んでいる。平面形は方形で、規模は、2.89×2.73m、高さ0.51mである。周囲に人頭大の縁石がめぐり、墳頂部は石がみられない。主体部は、径約30cm、深さ48cmの穴があけられているが、遺物などは確認できなかった。主軸の方向は、N47°－Eであった。

以上であるが、２号から４号墓までの造営の順序は２号墓・３号墓→４号墓→２－１号墓→２－２号墓→３－１号墓であると考えるが、２－１・２－２号墓造営の際、２号墓にも手が加わったものと考えられる。

５・６・７号墓　２から４号墓の南西に造営され、ブロックとしてとらえられる墓群である。

５号墓（付図１・２、第７図、図版15の1）X79208～79212，Y21410～21413に位置する。２号墓の南側にあり、平面形は不整円である。墳頂部に1.7×1.59mのほぼ方形の集石がなされ、その部分が主体部となっている。主軸の方

向はこの主体部での計測で、N－68°Wである。規模は、4.56×3.88mで、高さは、0.35mである。この墳墓の東側には幅約２m、長さ4mの溝状の遺構がある。これはその東にある墓道と考えられる平坦面との区画をするため意識的に設けられたものとみられる。深さは、墳頂部との比高差で約１m、墓道との比高差で約30cmである。主体部には、焼骨、土師質の小皿(かわらけ)が出土した。出土した骨は、荼毘にふされたときの灰とともに埋葬されている。出土量は、少量で、人体１体分はない。かわらけは３個体分の破片が出土している。時期は、13世紀前半のものと考えられる。

６号墓（付図１・２、第７図、図版15の2･3）X79211～79217，Y21403～21408に位置する。５号墓の西側にあり、北側は３号墓に接する。盛土の上に石積みを施すもので、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は5.49×3.08mで、高さは、0.56mである。南側に幅0.6m、長さ2.2mの溝が設けられており、墓域の区画を意識しているものとみられる。５・６号墓との区画は、人頭大の石を用いた縁石で行われ、窪んでいる。縁石は基底部、墳頂の平坦面、主体部の３列があり、間に詰め石が施されており、築造当時は全体が石で覆われていたものと考えられる。主体部のある上部平坦面は、3.58×1.90mで、基底部の平面形にほぼ対応する。主体部は、２ヵ所確認され、北側のものから第１主体、第２主体となずけた。第１主体部は0.8×0.67mの方形の縁石で区画されている。深さは約、0.6mで円形に掘られている。中に焼骨と若干の炭化物が出土した。第２主体部は、1.12×1.10mのほぼ方形の縁石で区画されている。第１主体と同様に内部は、円形に掘られている。深さは0.69mでほぼ同じ深さである。内部からは、灰とともに埋葬された、焼骨とかわらけが８点出土した。かわらけは１３世紀前半に位置づけられるものと考えられる。第１主体と第２主体部は、切り合いがなく埋葬の順は判然としないが、上部の盛土からみて時期差はないものと考える。明確な長方形を呈する墓は、この例だけで、主体部の有り方を考える時、当初から２つの主体部を設けることを考慮に入れて築造されたものと考える。なお、主軸に体する方位はN49°－Eである。

７号墓（付図１・２、第７図、図版15の4）X79214～79218，Y21401～21405に位置する。６号墓の西側にあるもので、墳丘裾が６号墓に削られている。墓の形態は楕円形の盛土で積み石などは行われていない。規模は3.97×3.45mである。墳丘上に大きな切り株があるため主体部は確認できなかったが、一部断ち割ったところ、かわらけ片２点と、須恵器の甕片が出土した。須恵器は、11世紀から12世紀代、かわらけは、13世紀前半のものと考えられる。主軸に体する方位は、N45°－Wで、６号墓とは直交することになり造営時期がこれらとは違うものと考える。

以上であるが、５号から７号墓までの造営の順序は切り合いから、７号墓→５号墓→６号墓であると考える。

８号墓（付図１、第９図、図版16の1～3）

X79205～79208，Y21405～21409に位置する。５号墓と10号墓の間にあり、５号墓横の墓道の続きが南側を通る位置に築かれている。平面形は、楕円で、基本的に盛土による構築だが、墳頂部だけに方形の石組みが施されている。規模は4.58×3.63m、高さ0.61mで、上部の方形の石組は1.33×1.28mである。墳頂部では主体部が確認できなかったが、一部断ち割ったところ、ほぼ基底面と考えられる部分から、灰層が検出され、その中に８枚の土師質の皿が、ほぼ埋葬されたままの形で出土した。また付近から炭化物も少量出土した。このことから、この墓は、造営する基底面で葬送儀礼が行われ、その後、墳丘が築かれたものとみられ、墳丘に主体部を穿つものとの相違がみられる。かわらけの年代は、13世紀前半のものと考えるが、13世紀の初頭までさかのぼるものかもしれない。方形の集石でみる主軸の方向は、N30°－Eで、１号墓に酷似しており、墓の造営方法などからみて、本墓群の中でもかなり早い時期の造営と考える。

９号墓（付図１、第10図、図版16の4）

X79205～79208，Y21405～21409に位置する。８号墓の東側にあって全体の平面形は楕円である。規模は、11.40×6.35mで、墓群全体の中で最も大きな墳丘をもつものである。北と東側に周溝がめぐる。周溝は、U字形を呈し、幅

約1.5～1.0m、深さ15～20cmのものである。南と西側は、大きな段差があり、低くなっており、周溝はめぐっていない。この段差は、墓群全体を大きく分けるもので、11号墓まで続く人為的なものである。この段の比高差は最も大きい場所で約１mある。墓の構造は、墳丘墓で、盛土による構築であるが、墳頂部に方形を意識した石組みがみられる。石組みの規模は4.33×2.85mである。石組みに使用されている石は、拳大から、径50cm前後の大きなものまであるが方形を意識した区画を作りだしているのは、大きな凝灰岩である。主体部はこの方形の区画の中に径約1.2mの円形の掘り込みがある。深さは、約１mで、他の墳墓の主体部よりかなり大きい。出土遺物はないが、土葬の可能性の高い墳墓と考える。

10号墓（付図１、第11図、図版16の5）

X79205～79209，Y21395～21398に位置する。９号墓の西にある墳丘墓で、盛土により構築されている。平面形は、ほぼ方形である。規模は1.56×1.41mで、高さは0.28mと小さいものである。しかしながら、周囲に若干の高まりがめぐり、人頭大の石がめぐる痕跡を残しており、その部分も墓域と考えるなら、規模は 3.42×2.77mとなる。主体部は、確認していないが、８号墓と同様の埋葬と考える。主軸に体する方位は、墳丘でN38°－Eである。

11号墓（付図１、第12図、図版17の1～3）

X79210～79215，Y21390～21394に位置する。９・10号墓の北西にあって、墓群を区画する段差の斜面に構築されている。平面形は隅丸方形で、葺き石状に方形の石組みが施されている。縁石は２段みられるが、基底部に縁石の名残と思われる石が僅かにあり、３段築成の可能性もある。北側が基底面との比高差が少ないが、この部分の縁石は石の平坦な小口を外側に揃える配慮がなされている。この墳墓の正面ではないかと考える。規模は、4.05×3.77m、高さは、比高差の最も高い南東側で0.94m、最も低い北西側で0.25mである。上部は2.78×2.14mの平坦面が方形の縁石により作りだされており、その中央部に主体部縁石を配している。主体部は0.60m四方のもので、深さ約0.5mのものである。中に、焼骨が比較的よい状態で検出された。内部には、炭化物と灰が混入しているが、別の場所で荼毘にふされたものを、埋葬したものと考える。なお、主軸に対する方位はN30°－Wである。

12号墓（付図１、第13図、図版17の4･5）

X79216～79220，Y21389～21401に位置する。11号墓の北側にあって、平面形は、楕円に近いが、方形を意識したものとなっている。ほぼ全面に葺き石状の石組みが方形に組まれている。規模は全体で、3.38×2.89m、石組み部分で1.86×1.52mである。主体部は、この石組み部分の中央にある。主体部は方形の堀肩で径約１m、深さ約0.4mのものである。この主体部床に円形の掘り込みがあった。内部から縄文土器が出土しており、12号墓の遺構ではない。出土遺物は、検出されなかったが、規模からみて土葬であったものと考える。なお、主軸に対する方向は、墳頂部でN27°－Wである。

13号墓（付図１、第14図、図版18の1･2）

X79214～79218，Y21394～21398に位置する。12号墓南東側、14号墓の南西側にあり、規模は2.67×2.67mでほぼ方形で、高さは、0.31mである。墳丘はなだらかで、その中央部に1.64×1.60mの方形を意識した集石があり主体部となっている。主体部には２つの穴が確認されるが、黒褐色土の入ったものは、縄文時代の土壙であると考えられ、茶灰色土の入ったものがこの墓に伴うものと考える。出土遺物はなく埋葬形態は土葬と考えられる。なお、主軸に対する方向は、N27°－Eである。

14号墓（付図１、第16図、図版18の3）

X79216～79201，Y21396～21401に位置する。13号墓の北東側に隣接しており、４号墓から18号墓の南側を通って伸びる集石列に北端で接している。平面形は、ほぼ正方形に近い隅丸のものである。規模は、3.58×3.09m、高さは、0.49mである。墳墓の周囲は方形に並べられた縁石により形作くられている。この縁石は、２段にわたって整然と並

べられており、墳頂部にも一部縁石の名残が確認される。主体部は、２段目の縁石の内側で、2.21×2.26mの規模をもつ。深さは、墳頂から約40cmで基底部にほぼ等しい高さで平坦面が作りだされている。この平坦面を掘り込んで、径約0.7mの土壙が穿たれている。出土遺物はないが、土葬の跡ではないかと考えている。主軸に対する方位は、N30°－Wで、11号墓と同一である。墳形からみても、非常に近い時期に造営されたものと考える。

15号墓（付図１、第19図、図版15の3･4）

X79228～79231，Y21398～21401に位置する。調査区北西隅にあるもので、墳丘はなく、方形の集石のみであり、今回調査したものの内、唯一の例である。集石は、2.20×2.11mの規模で作られており、平坦面を作りだしている。主体部は、特に見当たらない。墓として分類しているが、上部に構造物の建つ可能性もある。主軸に対する方位は、Ｎ２°－Wで、磁北にほぼ一致する。上部に構造物が建つと考える場合、墓群全体の位置からみて、墳墓堂などの施設とも考えられ、今後十分に検討する必要がある。

16号墓（付図１、第19図、図版15の1･2）

X79225～79229，Y21404～21408に位置する。１号墓の北西に隣接して造営されている。平面形は楕円で規模は、3.55×2.84m 、高さ0.56mである。墳丘は墳頂部をほぼ全体に覆うように葺き石状の石組みが施されており、石組みの墳丘墓と言える。石組みは、方形を意識しているが、明確ではない。墳丘全体の概ねの主軸方向は、N23°－Ｅで、１号墓に近似している。主体部は、明確ではなく、基底部分からかわらけが、出土している。おそらく、８号墓でみられるものと似た、埋葬方法が用いられているものとみられる。なお、主軸の方向は、８号墓とも近似値である。

17号墓（付図１、第15図、図版18の4）

X79221～79224，Y21390～21394に位置する。12号墓の北に位置し、調査区の最西端に造営されている。残りは、あまりよくないが、墳頂部分を方形に覆う形の、墳丘墓と考える。規模は、復元で2.36×2.16m、高さ0.27mである。墳頂部分の石組みは、概ね1.14×1.08mの規模で、主体部は、確認できなかったが、墳丘表面で、かわらけが出土している。主軸に対する方向は、N23°－Ｅである。

18号墓（付図１、第17図、図版18の5）

X79219～79223，Y21401～21404に位置する。４号墓の西、14号墓の北東にあり、４号墓西から約10mにわたって伸びる石組みの段上に築かれている。平面形は、不整形のものであるが石組みの段を利用した方形に近い台形で、基本的には、土壙墓であると思われる。規模は、2.67×2.35mで僅かな高まりがある。中央部に楕円形の1.03×0.72m、深さ0.32mの土壙が穿たれている。出土遺物は、土師器、かわらけが出土している。時期は、遺物から13世紀代から14世紀代のものと考える。主軸に対する方向はN40°－Wである。

19号墓（付図１、第18図、図版19の5）

X79212～79216，Y213198～21402に位置する。９号墓の北側、７号墓の南西側部分に造営されている。平面形は、隅丸の長方形で、墳丘・石組みなどの施設のない土壙墓である。規模は、3.57×2.78mで僅かな高まりがある。ほぼ中央に径約1.2m、深さ、約0.3mで土壙が穿たれている。出土遺物は確認されなかったがおそらく土葬墓と考えられる。主軸に対する方向はN37°－Wである。

その他の遺構（付図１、第18図、図版12の2）

その他の遺構には、縄文時代のものと考えられる穴12と、溝１条がある。穴は、径30cmから１m程度まで様々であるが、墓群を構築する際にかなり削られているようで堀肩のしっかりしたものは少ない。溝001は、縄文時代の遺構の中で最も残りがよい。長さ約13m、幅約１mで、発掘区の北西にあって東から西にほぼ等高線上に走っている。しかしながら、他の遺構が明確でなく、出土遺物も少ないためどういう意味があるのかは、判然としない。

(1)京田良志氏の御教示による。

2.遺物（図版2～10,21～27）

出土遺物は、縄文土器・石器、珠洲焼の壺・擂鉢・鉢（蔵骨器）、土師質の皿（かわらけ）、五輪塔などが出土した。縄文時代の土器・石器は、造墓のため遺構の大部分が失われており、元位置は、明確ではないが、珠洲焼、土師質土器はいずれも、墳墓に伴う出土品であり、残存状況も比較的よいものばかりである。以下図版ごとにその特徴を述べる。

珠洲焼（図版2～4,21・22・24）　図版2の遺物はいずれも2号墓から出土した珠洲焼の蔵骨器である。1は、上胴部が膨らんだ形の壺で、いわゆる壺R種C類に分類されるものである。一部破損した部分もあったが、ほぼ完形で出土した。口径10.4cm、器高10.4cm、胴径19.4cm、底部径8.6cmのものである。上胴から中胴部にかけて波長のみだれた、やや振幅の大きい櫛目波状文を三帯施文する。頚部に、径約1cmの竹管文が2個一対みられる。一つはしっかりと押圧してあるが、一方の押圧痕は、かなりあまい。頚部は、丸みをもちながら外反するが、この口縁端部でやや内湾し、丸みをもった口縁を印象ずけている。黄灰色の肌をなし、焼は、ややあまい。内外面に轆轤整形された痕跡が残り、また外底面に静止糸切り痕をとどめている。珠洲焼の編年のⅡ期ないしⅢ期のものと考えた。2は、片口の鉢である。口径23.5cm、器高6.3cm、底部径10.0cmのものである。全体の80％程が残っており、1の壺の傍らで出土しており、1の蓋であると考える。灰白色の器面をもち、胎土も緻密ではあるが、焼ひずみの大きい粗製のものである。器体がいくぶん膨らみをもち立ち上がり、口縁端部は、先端を肉薄に挽き出し外端でしっかり面を取った形のものである。底部には、静止糸切り痕がみられる。また、外底部がいくぶんすり減っており、転用したものと考える。注口部は、嘴状にちょこんと突出しているだけの簡単な作りである。珠洲焼の編年のⅢ期にあたるものと考える。3は、2の北側横で出土した。埋められていた穴には、偏平な石が敷いてあり、底部が破損しており、納められていたであろう人骨は、失われている。しかし、ほぼ全体が残っており、良好な資料である。全体は、灰白色ないしは、灰色を呈し、口径14.6cm、器高32.4cm、胴径25.7cm、底部径9.6cmで、頚部径13.4cmのものである。器形は、撫で肩ぎみの長卵形の体部を、条線状原体を用いた、やや乱れぎみの綾杉状叩打で飾る。端部を嘴状に仕上げた口縁に櫛目波状文がめぐり、頚部にやや幅の広い櫛目波状文がめぐっている。内面に、当具痕が整然と残る。胎土は緻密であるが、焼のせいか、器面全体の印象は堅緻とは言い難い。珠洲焼の編年のⅡ期あるいはⅢ期のもので、鎌倉中・後期のものと考える。4は、3の壺に蓋として被っていた片口の鉢である。口径20.4cm、器高8.4cm、底部径8.8cmのこぶりのもので内面にオロシ目はない。全体に灰白色を呈するが、底部は、淡橙色で、やや焼があまい。底部から口縁端部にかけてやや内湾しつつ立ち上がり、口縁端部は丸みを帯びているものの、面を取る意図が感じられる。静止糸切り痕が外底面に残るが、撫でにより消されている。底面は、やや擦り切れており、使用痕と考えられ、これもまた、転用品である。珠洲焼の編年のⅡ期あるいはⅢ期のもので、鎌倉中・後期のものと考える。5は、今回出土した蔵骨器の中で最も大型のものである。6の擂鉢が蓋として被さる。内部に、焼骨が全体の1/3の量が納められている。口径19.7cm、器高33.8cm、胴径33.2cm、底部径10.9cmのものである。やや肩のはった倒卵形の器体に広口の口縁を付けた壺である。完全な形で出土した良品で、胎土は、緻密で、焼成も良好なものである。器面底部を除いてほぼ全面に右さがりの叩き目が施されている。叩き目は、溝の深い条線状の原体を強く叩き占めて付けられている。内面には、全体の1/3まで当て具痕がみられ、内底面は、轆轤ナデ痕が残っている。

器面全体は、灰色または、灰褐色を呈している。外底面に、静止糸切痕を残すが、すり消された痕跡も残る。頚部は、外反して立ち上がり、口縁部は、面をもって、やや丸くひらく。珠洲焼の編年のⅢ期のものと考える。

6は、口径34.0cm、器高15.0cm、底部径12.4cmの片口の鉢である。こんもり膨らみをもって立ち上がる珠洲Ⅰ期の雰囲気を残しつつ、直線的に立ち上がる器体をもち、口縁外端でしっかり面を取っている。注口は、口縁の外周線よ

りややさがりぎみであるがコの字状に丁寧に作られている。内面には、櫛歯具を使用して、直線の卸し目を６条かけ合わせて施文する。肌は、緻密で灰褐色を呈する。珠洲焼の編年のⅡ期までさかのぼるものかもしれない。

図版３の１・２、５は、それぞれ２－２、２－１号墓から出土した遺物である。１は、片口の鉢である。体部が直線的に立ち上がり、口縁外端部に、面を作りだすものである。内面に卸し目のないもので、外底面に静止糸切り痕を残すものである。全体の半分が失われているが、断面に漆が残っており、破損したものを修理して使用したものと考えられる。口径20.8cm、器高7.9cm、底部径10.0cmを測る。２は、２－２号墓主体部から出土した。ぜんたいの約80％を残している。内部に少量の焼骨が納められていた。口径9.7cm、器高18.7cm、胴径17.3cm、底部径8.6cmの小型の壺である。器形は、口縁が外反し、怒り肩のまま底部にすぼまる器体上胴、中胴、底部にやや浅い櫛歯状具による、櫛目波状文が３列ゆるやかに流れている。口縁は、轆轤により引き上げられ、端部をまるく納めている。内面上胴部に段がついており、口縁部との接合痕と考える。内面は底部に明瞭なミズビキ線がみられる。１・２とも珠洲焼の編年のⅢ期のものと考える。５は、２－１号墓上面で検出された。壺Ｔ種の上胴部の破片で、頚部付近にやや細かな振幅の櫛目波状文が走り、胴部に並行な２列の櫛目の条線が走っている。３は、３－１号墓主体部から出土した蔵骨器で、内部に焼骨が僅かに納められていた。他の蔵骨器と異なり、蓋は偏平な石であった。口径10.0cm、器高20.1cm、胴径16.3cm、底部径7.6cmの小型の壺である。器体は、口頚が力強く外反し、口縁外端が、嘴状にとがる。こんもりと膨らんだ上胴に、やや線の浅い櫛目波状文が薄く不規則に二帯めぐる。また、上胴には、降灰による釉が見られる。やや歪みがある粗製のものだが、焼成は、堅緻である。珠洲焼の編年のⅢ期に比定されるものと考える。４は、６号墓の石組み内から検出された。こんもりと膨らみをもって開く器体が内湾ぎみにおさまり、外端でしっかり面を取っている。内面に卸し目はなく、珠洲の編年のⅡ期の特徴を備えるものである。注口はＵ字状のもので丁寧な作りとは言い難い。口径約19.5cmの小品である。６・８は、１号墓周溝内から検出された。いずれも壺の胴部の破片である。６は、器面全体に叩き目がみられ降灰による釉がみられる。灰褐色を呈するやや大きめの物である。８は、底部近くの破片で、体土はやや粗く、焼成はよくない。７は、壺の口縁で２－２号墓の墳丘上で検出された。口径約11cmのものである。図版３の１～５は、３号墓２号墓などに散乱しているが同一の個体と考える。破片断面で見る胎土は、黄灰色を呈し、焼成があまいせいか、気泡が入っている。１は、壺の口縁の破片である。外端面が外反し、口縁全体を水平に作りだしている。２～５は、胴部の破片である。浅い条線状原体を用いた、綾杉状叩打で飾る。６・14は、９号墓墳丘上で検出した。２～５に比べやや深い条線状原体を用いた、綾杉状叩打で加飾されている。７は、鉢である。底面から直線的に立ち上がるものと見られる。外底面に静止糸切り痕が見られる。８は、15号墓墳丘上で出土した。まるく膨らむ体部をもち幅の狭い卸し目が見られる。９・10は、３号墓主体部付近で出土した。９は、口径35.4cm、器高14.0cm、底部径10.6cmの片口の鉢である。灰色ないしは、灰褐色を呈し、焼はややあまい印象を与える。器形は、内湾しつつ立ち上がる器体の口縁を爪状にシャープに仕上げ、注口をしっかり作りだしている。内面に見られる卸し目は８条あるが、幅が狭く、浅い印象がある。一部擦り切れており、使用痕と考える。また、内面には、武田菱に似た刻印が３個付けられており、特徴的である。外底面には、静止糸切り痕が見られる。珠洲の編年のⅡ期に比定されるものと考える。10は、珠洲の甕ないし壺の破片である。12は、６号墓墳丘裾から出土した。壺の口縁でやや外反しており、端部外面が外へ張り出している。Ⅲ期のものかもしれない。11・13・15は、今回の調査区内で発見された遺物の内やや早い段階の物でおそらく墓群が形成される以前の物と見られ、本遺跡の成立上注目されるものである。13は、７号墓墳丘裾で採集された。須恵器の壺で断面に見る胎土は、橙色を呈する。内面に、ミズビキ線がみられる。11・15は、土師器の甕の破片である。黄橙色を呈し、外面に叩きによる調整、内面に同心円状の当て具痕が見られる。15は、丸い底部の甕ある。

土師質土器（図版５・23・24）　図版５は、土師質のⅢ（かわらけ）を中心に図示した。これらの遺物は、いずれ

も遺構に伴うもので、本墓群の造営時期を、考える上で手がかりとなる資料である。1～3は、1号墓の周溝から出土した。口径は、いずれも約10cmのもので、器高は、2cm程度の薄いものである。ナデによる整形で、2・3に明確ではないが器体に段が見られる。端部は、丸く納めるものであるが、2は、やや外反する。4は、2－2号墓で出土している。底面が平坦で口縁部への立ち上がりが小さく、浅手である。口径は、約9cmである。5は、3号墓から出土した。小片で復元はできないが、口縁が大きく外反するものである。6・7は、4号墓裾で出土している。墓に伴うものとは考えられない。6は、甕の口縁で、やや肥厚するものである。内外面が赤彩されている。7は、碗もしくは、鉢の底部である。外底面にリング状の静止糸切り痕が残る。8～10は、5号墓主体部から出土した。8は、低い柱状高台をもつ皿である。底面からの立ち上がりは、浅く、径6cm程度の小さいものである。9は、口径約8cmで器高2cm程度の物である。非ロクロ調整で、口縁部にかけて面取りが行われている。口縁端部は、丸くつまみあげて整形されている。10は、 口径約10cmで器高約2cmの皿である。器壁がやや厚く口縁は、丸い。11～18は、6号墓より出土した。16は、墳丘上で出土しているが、他の物は、第2主体部内から出土しており、埋葬の際の副送品と考えられる。いずれも皿で、出土枚数は、7枚である。口径は、11～14がほぼ8cm前後、15が10cm、17が13.5cmである。調整は、ロクロ調整は見られず、いずれも手ずくねである。11などには、器面に段がついており、二段なで風の意識はあるが、全体としては、口縁端部に面取りを施す。口径の最も大きい17は、口縁端部をつまみあげて、やや内湾させている。12～13世紀の物と考える。19・20は、7号墓裾から出土している。口径10cm程度で口縁端部に面取りを施している。21～28は、8号墓から一括して出土した。墳丘基底面にうつ伏せに折り重なるように出土したものである。埋葬の際に行われた祭祠を示すもなのか、ほとんどの個体に、ススが付着している。口径は、約8cmのものが、7枚に、約15cmが1枚で構成されている。ロクロによる調整のものはなく、口縁端部に面取りを施したものである。どの個体にも、外底面に窪みが施されている。13世紀前半の特徴のものと考える。29～34は、15号墓から17号墓の墳丘上あるいは、裾から出土したものである。器面に段を残す31・33なども含めて、口縁端部に面取りが施されるもので、13世紀前半に主体のある遺物が多い。35・36は、18号墓の土壙内から出土した。ロクロ成型による小型の鉢で10世紀代のものと考える。遺跡全体に言えることであるが、これらのやや古い時期の遺物は、墳墓が形成される以前になんらかの施設があったことを示すものと考えられ、今後周辺の調査でそれも明らかにしていきたいと考える。(高慶)

その他の遺物（図版6～図版8、図版25･26）　その他の遺物としては、縄文時代の土器と石器が出土している。本遺跡は、舌状の丘陵上に立地していた縄文時代の遺跡を削平して造営されている。そのため、縄文時代の遺物は、墳丘内部など、遺構外からの出土がほとんどである。遺構に伴うものとしては、調査区の北西部分で検出された溝・ピットからの出土があるが、良好な状態で検出した遺物は、少ない。年代的には中期初頭のものがほとんどである。

縄文土器　ＳＤ01（図版6の1、図版25･26）図版6の1は、やや外反する平縁の口縁に半円形の突起を付け、頚部外面の屈曲部分を指でなでる。口縁部は、無文であるが、胴部には、縄文が施される。焼成は、良好であり、胎土に砂粒を多く含む。中期初頭、新保・新崎式期に比定されると考える。

Ｐ5（図版6の6、図版25）図版6の5は口縁がキャリパー状を呈し、口縁端部外面に、篦状工具によるものと思われる横位沈線を施す。口縁部内面は丁寧になでられ、口唇部に面をとる。外面に粒の大きいＬＲ縄文を施し、煤が付着する。焼成は、良好であり、胎土に砂粒を含む。中期初頭に比定した。

Ｐ8（図版6の4・5、図版25）図版6の4は、粗製の深鉢である。外面全体にＬＲ縄文を施し、煤が付着する。焼成は、良好であり、胎土は、緻密である。5は、外面に斜格子目文を施し横位並行の半隆起線で区切る文様構成をとる。色調が赤褐色を呈し、胎土に雲母・石英を含む。焼成は良好である。中期初頭、新保式に比定できる。

Ｐ12（図版6の2・3、図版25）図版6の2は、キャリパー状になる口縁部付近の破片である。外面を細かいＲＬ

縄文で施文し、その上から赤彩する。焼成は良好であり、胎土に石英・長石を含む。３は、底部の破片である。縦位半隆起線文を施し、その間にＬＲ縄文を施文する。色調は赤褐色を呈し、焼成はやや悪い。新保式から新崎式期に比定される。

遺構外出土遺物（図版６の７～20、図版７の１から22、図版25･26）以下は、遺構に伴わない土器である。図版６・７は、斜格子目文を施し、横位半隆起線で区切る文様構成をとる。焼成は良好である。胎土は密であり、長石・雲母を含む。８は、キャリパー状になる口縁部をもち、横位並行の半隆起線で格子目文を区切る文様構成をとる。胎土に炭を含み黒色を呈する。９は、方向の違う斜行並行の沈線を組合わせて器面を埋め、横位の半隆起線で区切る文様構成をとる。10は、撚糸文を地文とし細かい並行の半隆起線を縦横に組合わせる。撚糸文の一部は、指で磨り消され、縦位の半隆起線間に無文となる部分がある。焼成は良好で、胎土に長石などの砂粒を含む。11～20は、やや崩れた木目状撚糸文を施文するものである。ほとんどの個体の胎土は緻密であり、焼成は良好である。以上７～20は、中期初頭の新保式に比定される。図版７　１・２は、羽状縄文を地文とし、１は横位に、２は縦位に施文される。１はやや内湾する口縁部であり。赤褐色を呈する。１・２とも焼成は良好であり、胎土は密である。３・５はいずれも口縁部であり、横位並行の半隆起線で器面を埋める。３は、肥厚した口縁部に半截竹管により爪形文を施文し、以下この半隆起線一つおきに繰り返される。また、内面を横方向に丁寧に磨いている。５は、三段目が爪形文になり、その上の半隆起線に連続して刺突を施す。３・５とも焼成は良好で、胎土は密であるが、大粒の砂粒を含む。新保式～新崎式期と考える。４は、Ｂ字状区画を施文する胴部の破片である。半隆起線での区画を横位沈線で埋める。焼成は良好で、長石などの砂粒を含む。新崎式に比定されよう。６は、底部近くの破片である。縦位の半隆起線を密に配置しその空間に連続して刺突を施す。焼成は、良好であり、胎土は密で赤褐色を呈する。７は、肥厚した口縁部上端に円形の張り付けを施し、外面に半隆起線で二重の区画を施文する。外側の区画には、半截竹管による爪形文を施す。やや短めのキャリパー状口縁になると思われる。焼成は良好であり、胎土は密で黄橙色を呈する。中期初頭、新崎式期の新しい段階のものと考える。８・９は撚糸文をもつ粗製の深鉢の口縁である。８は、口縁部をやや肥厚させ、上端に面をとる。９は、やや外傾する口縁部上端外面に２条の並行沈線を施す。８・９ともに焼成は良好であり、胎土はやや疎で大量の砂粒を含む。14は、キャリパー状になる口縁の頚部破片で、地文が無文である。下端部に１条の沈線を施文する。焼成は良好であり、胎土は密でやや淡い赤褐色を呈する。10～13、15～22は、斜縄文を地文とするものである。10は、やや肥厚する口縁部の破片であり、屈曲部内面を指でなでる。11は上端外面に２条の並行沈線をもつ。おそらく口縁部付近の破片であろう。その他はほとんどが胴部の破片で、ＲＬ・ＬＲ両方の撚りの縄文がある。胎土はやや疎のものがおおく、長石・石英・雲母などを含む。焼成は概して良好なものが多い。

以上の様に、本遺跡の縄文土器は、中期初頭のものによって占められており、この地に短期間営まれた縄文集落があったものと考えられる。

石器（図版８の１～４、図版26）

打製石斧（図版８の１・２、図版26）１は、平面形が短冊型を呈し、偏平な粘板岩を石材とする。基部側面を敲打して、抉り部を作りだす。２は、棒状に近い形状である。基部側面を敲打するが、抉り部はない。

擦石（図版８の３、図版26）３は、断面形が楕円を呈する細長いものである。両側面に節理面をもつ。ほぼ全面に擦痕を残す。石材は、凝灰岩である。

磨製石斧（図版８の４、図版26）４は、平面形が短冊型を呈するが刃部に向ってすぼまる。未製品で、全面に研磨痕が残っている。石材は、蛇紋岩である。（長谷川）

上山東遺跡

上山古墓群の北東約50mに谷をはさんで、東西約80m、南北約70mの平坦面が広がっている。標高68mから75mのこの地域は、当初道路の工事計画のなかった部分ではあったが、上山古墓群が全面保存されるにあたって、道路の方線変更が必要であったため、急遽、試掘調査を行った。現況は、杉の植林が行われているが、それ以前は、畑地として利用されており、その痕跡がこの平坦面全体に残っている。調査によって発見された遺構は、墳丘墓が4基で、畑地として利用されていた時代から、塚として削平されることなく残ったものである。平坦面では、遺構は今回の調査では、確認されないが、全体に須恵器などの破片が採集され、ここに遺跡のあることを暗示している。道路方線は、この平坦面を残す形で迂回して計画されることになり、この地区についてもほぼ全面的に保存されることとなった。

1．遺構（第20図、図版20）検出した遺構は、墳丘墓が4基である（1～4号墓）。標高70m～72mのやや傾斜した地域にあり、1号墓がやや離れて築かれているが、2～4号墓は、西から東に隣り合って築かれている。

1号墓（第20図、図版20の1）　この平坦面を南西から北東に伸びる山道の傍ら、標高70mの等高線に沿って築かれている。平面形は、隅丸の長方形で規模は、約5m×3m、高さ約0.5mのものである。上部は約4m×3m、の平坦面があり、西側に人頭大から約0.5mの石を5個集めた集石がみられる。付近から須恵器片が採取された。

2号墓（第20図、図版20の2）1号墓の北東約15mに位置する。平面形は楕円で規模は、約6m×3m、高さ約0.6mのものである。盛土されたマウンド上に、約0.5mの石が2個のっており、集石の跡と考えられる。また、朽ちた柿の木の切り株があり、墳頂部はやや荒れた感がある。周辺から須恵器の破片を採集した。

3号墓（第20図、図版20の3）2号墓の東に隣接して構築されている。平面形は円形で直径約2m、高さ約0.3mの墳丘墓である。集石の痕跡はなく、平坦面も観察されない。

4号墓（第20図）2号墓の北西に隣接して構築されている。平面形は円形で直径約2m、高さ約0.3mの墳丘墓で3号墓とほぼ同様の作りである。周辺に須恵器片を採集しているが、墳墓に伴うかどうかは判然としない。

2．遺物（図版9・10図版）遺物は、この平坦面全体で、採集されるが、南側の崖際の部分では、ほとんど採集されない。また、出土遺物の多くは、須恵器で、検出した墳丘墓に伴うものかどうかも、判然としない。しかしながらこの平坦面に、上山古墓群が築かれる以前になんらかの施設があったことが考えられ、この地域全体の古代から中世に至る変遷を知る上で重要なものと考える。図版9の1～18は、須恵器である。1は、碗の高台、2は、壺の頸部である。いずれも小片であるが、1の高台などから11世紀代のものと考える。3～14・17・18は、甕・壺類の胴部の破片である。内外面に叩き目と当て具痕をのこしている。叩目原体は叩目と直行ないし斜行して刻み目を入れる平行叩目が目立ち、内面の押圧痕はやや小さめの同心円型のものがみられる。10～11世紀代の遺物と考える。15・16は、底部の破片である。16は、外底面に静止糸切り痕を残している。19～21は、縄文土器・石器である。19は、深鉢の破片である。半隆起線で区画された中に縦位沈線を配して紋様を構成している。20は、バチ型の打製石斧である。刃部に使用痕をとどめる安山岩を石材としている。21は、無茎の石族である。細かな剝離が行われた良品である。石材は、安山岩を使用している。図版10は、墳丘上ないしは、その周辺で出土した遺物である。1～4は、1号墓墳丘上集石周辺の遺物である。同一の個体と考えられ、内外面に叩目・当て具痕がみられる。叩目原体は叩目と斜行して刻み目を入れる平行叩目が、内面の押圧痕はやや小さめの同心円型のものがみられる。5・6は、2号墓墳丘上で採集した。外体部の叩きは、平行叩きである。7は、4号墓墳丘上で採集した。1～4と同様の特徴をもつ。9は、壺の口縁部である。口縁が外反し，灰褐色を呈するものである。口縁端部が水平で沈線状のくびれがみられる。これらもやはり、10世紀から11世紀のものと考える。

V　調査の成果の整理

今回の調査で確認された墓は、22基であるが、墓群全体では、まだ未調査のものが19基以上存在し、都合40基以上の墓が群をなして存在することになる。全体像については今後順次調査して行く中で明らかにして行きたいが、現段階で調査の成果を整理し、まとめておきたいと思う。

1．墓の分類

墓域を構成する墓の形態は、全体の調査が終了していない段階では、その実態を測りかねる部分もあるが、おおむね墳丘をもつものと、いわゆる土壙墓といわれるもの、単に集石だけのものに大きく大別できる。その内圧倒的に多数を占めるものは、墳丘をもつもので、19基がこれにあたり、土壙墓が２基、集石が１基であった。未調査部分についても墳丘をもつものが地形的にみても圧倒的に多く、僅かに残された平坦部に土壙墓が存在すると仮定してもこの傾向が大きく変ることはない。この種の墓群の報告例は、近年の発掘調査件数の増加とともに分析が行われている。特に、昭和59年から63年に行われた、静岡県磐田市の「一ノ谷中世墳墓群」の調査では、12世紀から13世紀に至る、161基の墳丘をもつ墓の報告がなされており、群集するものの代表的な例と言える。ここでは、「塚墓」と呼んでいるが本遺跡で言う墳丘墓にあたる。北陸でも、石川県鹿島郡の上町マンダラ遺跡、松任市の剱崎遺跡、能美郡辰口町の湯屋チョウヅカ遺跡、新潟県北蒲原郡笹神村の華報寺中世墳墓郡などが知られている他、富山県内においても福光町医王山山岳信仰遺跡郡の若宮遺跡・香城寺惣堂遺跡、井口村寺山中世墳墓群のほか未調査ではあるが、富山市の杉谷群集塚などが知られている。これらの調査成果を踏まえ、本遺跡の墳丘墓を分類することとしたい。

墳丘墓の分類について

本遺跡で云う墳丘墓は、土をもりあげて作ったいわゆる土饅頭タイプの墓である。これらは、墳頂部に集石するもの、全体に葺き石状に石で覆うもの、周囲を縁石で囲むものなどがあるが、基本的に、土を盛り上げて造くっていること。周囲に溝、または削りだし等によって区画するものの二つの要素がある。墳丘墓の分類については、「剱崎遺跡」・「一ノ谷中世墳墓群」での成果があるが、その分類基準は、いずれも火葬か否かを前提にして４類あるいは、７類に分類している。本遺跡の場合もほぼこれが当てはまるものと考えるが、この類例がないものもあり次の様に分類した。

Ａ　類　遺体を土坑に単数埋葬したもの。

Ｂ　類　火葬骨を、小型の土坑や、円形の小穴をほり、その中に埋葬している。中には、木箱などに入れて埋葬した可能性もある。

Ｂ’類　火葬骨を複数の土坑に埋葬したもの。埋葬方法は、Ｂ類と同じである。

Ｃ　類　火葬骨を、珠洲焼の蔵骨器に入れ、埋葬するもの。

Ｄ　類　火葬骨を、その灰とともに墳丘の基底面におき、盛土をして埋葬したもの。火葬跡は、検出されない。

Ｅ　類　埋葬や火葬の跡がまったくみられない。

また、これらは、墳丘の形状の違いから、ａ.方形（不整方形を含む）ｂ.長方形（不整長方形を含む）ｃ.円形（楕円形を含む）ｄ.その他、不整形でどれにも属し難いもの、あるいは不明のものの４種類に分けることができる。

方形と、長方形の違いは、見た目で方形のものととらえられる許容範囲であり、タテとヨコの比率が１：1.5以下のものと規定する。

「一ノ谷中世墳墓群」で行った分類に準じて、ＡからＥ類と、ａからｄを組合わせ、方形の墳丘で、土坑を主体部とするものをＡａ類とし、以下それぞれを組合わせて分類すると第１表のようになる。

	A 類	B 類	B' 類	C 類	D 類	E 類	計
a 類	4	5	1	2	1		13
b 類			1				1
c 類	1				2		3
d 類		1				1	2
計	5	6	2	2	3	1	19
葬法	土葬	火葬				不明	

第1表　墳丘墓の形態別比較

以上から、本遺跡では方形の火葬墓が多く、なかでも火葬骨をそのまま土坑に埋葬するものが多い傾向にあることが分る。これは、「一ノ谷中世墳墓群」で一般的にみられる土葬の形態とは明らかに異なる傾向である。

墳丘墓を構成する諸要素

前述の分類は、葬法と墳丘墓の形状のみを組合わせた分類であるが、墓を構成する要素は、このほかに、盛土、周溝、石組み（葺き石を含む）などがあり、さらに墓の拡張や、追葬、副送品などの要素が組みあわさって、現在の墓群の景観を作りだしている。しかしながらこれらの要素を分類の中に組入れると、複雑になり、収拾がつかなくなるので、今回は、これらの要素を列記するに止めたい。

(1)　盛土

全ての墳丘墓に共通する要素の一つである。高いのは、1号墓の1.05m、9号墓の1.69mの高さを確認できる。中には、動物などの攪乱により、0.1m程度の高まりしか残さないものもあるが、大部分は、0.3から0.6m程度の高さを確認できる。埋葬は、盛土が行われた後に土坑などを穿ち行われるもの（B・B'類）と、火葬骨を、その灰とともに墳丘の基底面におき、盛土をして埋葬したもの（D類）がある。2号墓の蔵骨器埋葬部分や、2－2号墓、3－1号墓は、もともとあった墳丘や盛土を利用して築造されており他の墳丘墓とは異なった感があるが、盛土の高まりを意識していたことは間違いのないところと考える。

(2)　周溝

周溝が巡るものは、1号墓と9号墓のみで、必ずしも墳丘墓全体の特徴とは言い難い。5号墓の東側と、6号墓の南側に溝がみられるが、墓全体に巡るものではない。1号墓の周溝は、全体を巡るものではないが、2から4号墓築造の際に、埋められた可能性が高く、全体に方形を呈するものと思われる。9号墓は北側に周溝が巡り、北側の墓群と境界を画するように配されている。完全に周囲を巡るものではなく、全体の半分を巡るにすぎないが、南側半分は、約1mの段があり、その部分で溝が途絶えている。この2つの墓は、今回調査した中で最も大きな墳丘をもつもので、墓群全体の中でも中核的なものと考えられ、被葬者の階層ないし地位などが、高い可能性を示し、墓群を一定程度ブロック別のまとまりととらえる際のキーポイントになるものと考える。

(3)　集石・石組み

墳丘墓の内、1・7号墓を除く16基になんらかの石組み、集石が行われている。石組みには、3つのタイプがある。これを列記すると、

ア　類　墳頂部に方形ないし方形を意識した集石、縁石を設けるもの（2・2－2・5・8・9・12・13・17）

イ　類　基底部に墳形に対応する方形の縁石を施したもの（2－1・3－1・4・10）

ウ　類　墳丘全体に縁石・葺き石などを施したもの（2・3・6・11・14・16）

などがある。この内2号墓は、2段の平坦部があり、墳頂の平坦部がア類、2段目の平坦部がウ類、に分類すること

ができ、後述する拡張によるものとみられ、両タイプが併存している。これらの集石や石組みの変化は、これらの墳丘墓からの出土遺物、墳丘の切り合いなどからみて、ア類が13世紀前半、イ・ウ類が13世紀後半におおむね比定されるものと考えており、さらに１・７号墓など明確な石組みをもたないものはさらに古い傾向のものではないかと推定したい。

集石・石組みには、墓群を区画するための段状遺構に伴うものもある。４号墓南西隅から14号墓西まで続くものでこれより北では15号墓（石組み遺構）、16号墓、18号墓（土壙墓）がみられるだけで墓の数は極端に少ない。墓群全体の中でどういう意味をもつものかは不明である。

(4) 副葬品

出土した副葬品は、いずれも土師質の皿（かわらけ）で、その他のものは出土していない。10基の墳丘墓から出土したが形態別に出土した墳墓をみると、Ｂ・Ｂ'・Ｃ類でいずれも火葬墓である。埋葬の際の葬送儀礼に伴う遺物と考えられ、火葬との関係があるようである。特に、８号墓にみられる８枚の土師質の皿がうつ伏せに重なって出土した例は、特徴的である。

(5) 墓の拡張

墓の拡張と云ったが、正確には、作り替え、ないし、作り付けたと云った方が適切かもしれない。そうした例は、２号墓とその周辺でみられる。その概略は、

２号墓　方形の墳丘を築き、方形の石組み内に主体部を作る（第一段階）。方形の墳丘を大きく拡大させ、２段に築造し平坦面に敷石し蔵骨器による埋葬を行う。この埋葬は、３ヵ所設けられ五輪塔が１基据えられている。また、南側に祭壇状の敷石を施す（第二段階）。東側に墳丘を張り出して２－１号墓を作り付け基底部に縁石を施す（第三段階）。

３－１号墓　２号墓の第二段階もしくは、第三段階で３号墓が造営されその後、２号墓との間の平坦部に縁石を方形に組み、蔵骨器による埋葬を行う。

こうした拡張の例は、蔵骨器による埋葬が伴っており、確認はできていないが、３号墓も同様の経過をへて作られた可能性がある。拡張の例は、一ノ谷中世墳墓群のほか、鳥取県東伯郡の妻波古墓で確認されており、13～14世紀代と16世紀から17・18世紀までと時代にかなりの差こそあれ、墳丘墓の拡張が個人墓から集団墓へと変化して行く過程の中で行われたと考えられている。本遺跡の場合、最終段階で行われる埋葬は珠洲焼を蔵骨器として行われたもので、２号墓の場合、13世紀後半に比定される。蔵骨器が転用されたことを加味しても13世紀末から14世紀にかけてと推定されるが、ほぼ同様の結論が導きだされるものと考える。

２．土壙墓について

土壙墓と考えられるものは、18・19号墓の２基のみである。前述したように、墓群全体をみた場合でもこの数が飛躍的に増加する可能性は極めて低い。もし土壙墓があるとすれば他の地区で営まれているものと考えるが、本墓群の周辺には、それに適した平坦面・テラスなどは、今の所確認できない。

18・19号墓の平面形は、それぞれ不整方形、方形で盛土とは言い難い僅かな高まりがあり、そのほぼ中央に円形の穴が穿たれている。主軸に体する方位は、N40°－W、N37°－Wと近似値を示しており同一性を感じる。ただ19号墓は配石がまったく行われていないのに対して、18号墓は、一部に方形の縁石が施された痕跡を残している。出土遺物は、18号墓で11世紀代の土師器片を出土したが、埋土内のもので、造営時に意識的に埋められたものかどうか判断し難い。土壙墓が作られている部分は、18号墓が４号墓の西側で、段状の石列に接するように築かれている。19号墓は、７・９・13・14号墓に囲まれた平坦面を利用して築かれており、墳丘墓の造営の跡に残った部分を利用している感が

強く、やや後出的なものかもしれない。

3．集石について

今回調査した中で唯一、盛土がなく方形の集石だけが残っていた例に、15号墓がある。造営されている部分は、調査区の北西隅で他の墓とは隔絶してポツンと立地している。墓として取り扱っているが、緻密に敷石されているだけで、主体部などは確認できなかった。規模は、2.20×2.11mでほぼ正方形に近く、主軸に対する方位は、N 2°－Wでほとんど磁北に向いている。上部に小規模の建物が建つ可能性も十分あり、墳墓堂などになるものかもしれない。出土遺物は、集石内から土師質の皿の破片を１点出土するのみである。

4．群構成について

墓が群集して墓群を形成する場合、その墓の分布、主軸の方向性などからいくつかの群に区分できることがある。これらは、墓の造営年代の時期差としてとらえられたり被葬者の属する集団のまとまりを示すものとしてとらえられたりする。本遺跡の場合もこうした群が読み取れるようである。ただ、墓群全体の調査が終了していない段階で、群構成を論ずるのはやや早計の感もあるが、主軸の方向などからみて群として区分できるものがみられるので、墓の築造順を含めて予見を含めて若干まとめておきたい。

墓の主軸は、基本的には、墳丘の裾（下端）をとらえて同一の方向を向くものを群とした。ただし、墳頂に方形の石組みがみられるものについては、その石組みの方向をとらえて考えたものがある。（５・８・９・16号墓）これらは、墓の拡張など、追葬に関わるような遺構が見出せないもので、墳墓の方向に対する意識が主体部に有るととらえたものである。この方法で群を分けると次の通りとなる。

Ⅰ群　１・８・16・17号墓

Ⅱ群　２・２－１・２－２・３・４号墓・（３－１号墓）

Ⅲ群　５・６・７号墓

Ⅳ群　11・14号墓

Ⅴ群　12・13号墓

Ⅵ群　９・10号墓

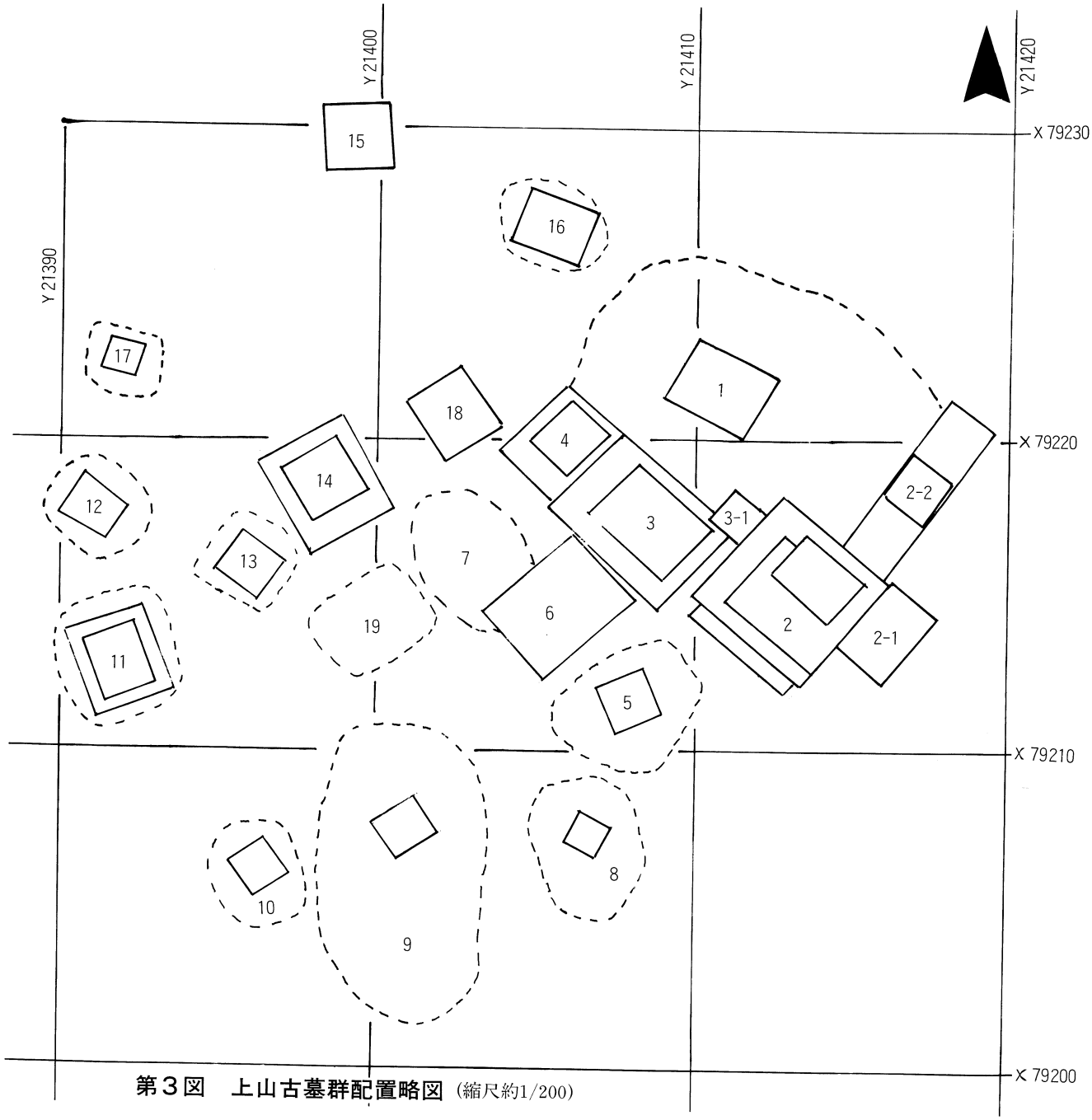
Ⅶ群　18・19号墓（土壙墓）

この内、３－１号墓は、Ⅱ群に作り付けられたものとして同一の群にまとめた。また、Ⅲ群は、必ずしも軸が一定ではないが、６・７号墓がほぼ直交し、５号墓も列としてのまとまりが有るものととらえ同一の群とした。

Ⅰ群は、一見地域的に相関関係をもたないようであるが、軸方向と、埋葬の方法などで類似性を見出した。いずれも火葬墓である。１号墓が本墓群の中で最も早い段階での築造と考えられることから、この群が本墓群の始りを示すものと考えられ、その時期は、８・16・17などで出土した土師質の皿から12世紀から13世紀前半と考えられる。

Ⅱ群は、１号墓との切り合いからⅠ群の後に続く時期である。ただ、２号墓周辺でみられる拡張などから当初あった墓の形態が変質しており、他の群からみるとやや後出的な印象を与える。珠洲焼の壺、片口の鉢などを使用した蔵骨器による埋葬が目立ち、13世紀後半から14世紀代の構築が最終的に認められる。１号墓の周溝を一部埋め戻して構築されている点なども考慮すると、今回の調査区の中では一番最後に造営されたものとみたい。また、同一の墓群にいくつかの主体部を設ける点から同族ないしは、家族墓的なものと考える。

Ⅲ群は、７・５号墓の後に６号墓が築かれている。６号墓は、３号墓との切り合いからⅡ群のやや後に構築されている。しかし、６号墓第２主体部の遺物が12世紀から13世紀代に位置ずけられるところから、年代的な矛盾が生じる。



第３図　上山古墓群配置略図（縮尺約1/200）

６号墓における追葬の関係から生じたものとみるが、Ⅲ群は、Ⅱ群より先行するものと考えられ、築造の順は、１号墓が築かれた後に、Ⅲ群の７・５号墓が築かれその後に、１号墓の周溝を埋め戻す形でⅡ群が築かれたと考える。その後、Ⅱ群に追葬などが行われる際に、６号墓が築かれたものと考える。Ⅲ群は、その配置と造営に時間差があることなどから同族の墓群ととらえたい。

Ⅳ群は、火葬墓と土葬墓の違いはあるが、墳丘に施された石組みの形態が酷似している。葬法の違いが時期差を示さないものであることを示しているものと考える。

Ⅴ群は、ほぼ一辺が３ｍの方形の墓で墳頂に方形の集石を持つ特徴がある。葬法も土葬で、ほぼ13世紀前半の土師器を伴っている。

Ⅵ群は、規模の大きい中核的な９号墓に10号墓が寄り添うように作られている。さらに今回の調査区外の墳丘もすぐそばに２基ほど見受けられ、最終的には、４基前後で群をなす同族墓的なものを推定した。

Ⅶ群は、土壙墓で墳丘を持たない。周辺の墳丘墓が作られた後、空いたスペースを利用して作られたものと考えら

れ、他の群との成立した後のやや後出的なものと考えた。

5．調査区以外の墓群

以上であるが、本墓群は、今回調査したもののほか、17基程の墳丘の高まりが確認される。その間をぬって墓道と考えられる空閑地が見受けられこれによっても墓群構成が一部読み取れる。今後の調査の指針となるものと考えられるので若干の説明を加えておきたい（第５図参照）。

測量にみる墳墓と思われる高まりはア～チまでである。群として考えられるのは大きくみて、ア～オまでと、カ～ソで、タ・チの墳丘は、Ⅵ群に組入れられると考える。ア～オまでは、墓群の南東側に列をなすように北東から南西に続いている。その北西側にほぼ平行に空閑地が細長く伸びており、８号墓から２号墓まで続く。本墓群の主要な墓道と考えられる。カ～ソは、ソを中心として群をなすものと考える。ソは、土塁状の高まりが方形に巡りその内側に低い平坦面が有り、そこに円形の集石がみられる遺構で墓群全体の中に有って特殊な形態をもつ遺構である。その背後に墓群が続くがこの方形の土塁状遺構を意識して各墳丘が築かれており、群を形成するものと考えた。この群の中でもおそらくいくつかに区分できると考えるが、それについては、今後の調査により明らかにしたい。

6．墓道について

墓道は、最も明確にみられるものが、丘陵南から、墳丘カとオの間をぬけチ・ウ間から９・８・５号墓とア・イ・ウの墳丘の間から２号墓の南側まで続くものである。幅は、２m前後で本墓群の中でも幹線的なものと考える。この墓道は、おそらく８号墓と５号墓の間から枝線的に別れ、11～15号墓に至るものと考える。幅１m程度であるが、平坦にならされている。このほかに、墳丘カ～ケの南西側に幅約２mのテラスがあり、ここを通ってキ・ク間あるいは、ク・ケ間をぬけ墓群の中に入るものもある。このほかア～オの南東側を通り、８号墓南側で幹線道に連結するものも想定できる。これらの墓道は、墓群への進入路という目的のほか、道そのものが墓前での祭儀空間であったり、他の墓とのあるいは、墓群との区画を意識して計画的に配置されているものと考えられる。「一ノ谷中世墳墓群」の場合後代になって、墓道も墓域として利用されているようであるが、本墓群の場合19号墓が若干その傾向を見せるのみで、墓道が墓域として利用された痕跡は、ほとんどみられない。これは、この地域がそれほど長期間にわたって利用されていないためで、せいぜい百数十年程度の期間で造墓が終了していることに起因するものと考えられる。その意味で本墓群は、中世初期の群集墳の形態を非常に分りやすく残しているものと考えられる。しかしながら造墓が短期間で終了したとすると、それ以降の造墓がどこに移ったかが問題となる。単に地形的制約で造墓を終了するにしては、この墓群の北側に広がる緩斜面や、谷を隔てた試掘調査区の平坦面にこの墓群に続く墓域が設定されてもよさそうであるが、そうした痕跡は止めておらず、気にかかるところである。周辺の調査が必要であると考える。

第２表　墳丘墓・土壙墓・集石一覧表

NO	遺構名	位　置	墳丘 (m)			墳頂部 (m)			主体部 (m)			備　考
			主軸方位	平面形	長軸＊短軸＊高さ	主軸方位	施設及び平面形	長軸×短軸	形　状	長軸＊短軸＊深さ	葬　法	
1	１号墓	x＝79218 79226 y＝21406 21418	N31°－E	方形	10.50＊7.12＊1.05	N28°－E	方形	3.08＊2.36	円形２ヶ所	0.28＊0.20＊？ 0.32＊0.29＊？	火葬	周溝を伴う、焼骨分布 土師皿　等
2	２号墓	x＝79212 79218 y＝21410 21416	N37°－E	方形	5.11＊4.63＊0.89	N41°－E	２段石組　方形	4.20＊3.47	不明	3.00＊2.26＊？	火葬 (蔵骨器３カ所)	五輪塔　珠洲(蔵骨器) 方形３段築成？　焼骨分布
3	２－１号墓	x＝79212 79215 y＝21415 21418	N38°－E	方形	2.80＊1.89＊0.56	N39°－E	方形	1.43＊1.24	不明	不明	火葬	焼骨分布
4	２－２号墓	x＝79217 79220 y＝21416 21419	N35°－E	長方形	？＊2.75＊0.70	N37°－E	石組　方形	2.00＊1.64	円形	不明	火葬 (蔵骨器)	上面より珠洲　土師器皿 焼骨分布
5	３号墓	x＝79214 79220 y＝21406 21411	N40°－E	方形	4.28＊3.46＊0.65	N34°－E	石組　方形	2.54＊2.42	円形？	不明	火葬 (蔵骨器)	珠洲（蔵骨器） 焼骨分布
6	３－１号墓	x＝79216 79218 y＝21411 21413	－	－	－	N34°－E	石組　方形	1.60＊1.43	円形	0.25＊0.25＊0.27	火葬 (蔵骨器)	珠洲（蔵骨器）
7	４号墓	x＝79218 79222 y＝21404 21408	N47°－E	方形	2.89＊2.73＊0.51	N42°－E	方形	1.94＊1.77	円形	0.34＊0.30＊0.48	火葬	
8	５号墓	x＝79208 79212 y＝21410 21413	N53°－E	不整円	4.56＊3.88＊0.35	N68°－E	石組　方形	1.70＊1.59	方形	1.51＊1.43＊0.42	火葬	土師器　焼骨
9	６号墓	x＝79211 79217 y＝21403 21408	N49°－E	長方形	5.49＊3.08＊0.56	N48°－E	石組　方形	3.58＊1.90	円形２ヶ所	(第一)1.25＊0.80＊0.67 (第二)1.12＊1.10＊0.69	火葬	土師皿 主体部２カ所　焼骨
10	７号墓	x＝79214 79218 y＝21401 21405	N45°－W	楕円形	3.97＊3.43＊0.51	N43°－W		2.20＊1.44	不明	不明	火葬	土師器・須恵器
11	８号墓	x＝79205 79208 y＝21405 21409	N８°－E	楕円形	4.58＊3.63＊0.61	N30°－E	石組　方形	1.33＊1.28	不明	不明	火葬	土師器８枚一括 基底部に埋葬
12	９号墓	x＝79201 79212 y＝21398 21404	N６°－E	楕円形	11.40＊6.35＊1.69	N56°－E	石組　方形	4.33＊2.85	円形	1.42＊1.30＊1.10	土葬	周溝を伴う
13	10号墓	x＝79205 79209 y＝21395 21398	N８°－E	楕円形	3.42＊2.77＊0.28	N53°－E	方形	1.56＊1.41	不明	不明	不明	
14	11号墓	x＝79210 79215 y＝21390 21394	N30°－W	方形	4.05＊3.77＊0.94	N29°－W	石組　方形	2.78＊2.14	方形	0.59＊0.60＊0.52	火葬	方形３段？　焼骨
15	12号墓	x＝79216 79220 y＝21389 21393	N38°－W	方形	3.38＊2.89＊0.38	N27°－W	石組　方形	1.86＊1.52	円形	1.12＊0.95＊0.38	土葬？	
16	13号墓	x＝79214 79218 y＝21394 21398	N46°－W	方形	2.67＊2.67＊0.31	N27°－E	石組　方形	1.64＊1.60	円形	0.65＊0.59＊0.62	土葬？	
17	14号墓	x＝79216 79201 y＝21396 21401	N30°－W	方形	3.58＊3.09＊0.49	N32°－W	石組　方形	2.21＊2.26	円形	1.52＊1.50＊0.42	土葬？	方形３段？
18	15号墓	x＝79228 79231 y＝21398 21401	－	－	－	N２°－W	石組　方形	2.20＊2.11	－	－	不明	石組より土師皿 集石遺構？
19	16号墓	x＝79225 79229 y＝21404 21408	N23°－E	楕円形	3.55＊2.84＊0.56	N27°－E	石組　方形	2.76＊2.04	不明	不明	火葬？	墳丘上より土師皿 基底部に埋葬
20	17号墓	x＝79221 79224 y＝21390 21394	N23°－E	方形	2.36＊2.16＊0.24	N19°－E	石組　方形	1.14＊1.08	不明	不明	土葬？	墳丘上より土師器皿
21	18号墓	x＝79219 79223 y＝21401 21404	－	－	－	N40°－W	方形	2.67＊2.35	円形	1.02＊0.72＊0.32	土葬	土師器 土壙墓
22	19号墓	x＝79212 79216 y＝21398 21402	－	－	－	N37°－W	方形	3.57＊2.78	円形	1.26＊1.10＊0.26	土葬	土壙墓

Ⅵ　黒川上山古墓群出土の焼骨について

富山医科薬科大学医学部第１解剖学教室　　森沢　佐歳

はじめに

黒川上山古墓群（所在地：富山県中新川郡上市町黒川字上山）の調査は、平成６年５月13日～７月27日にわたり、上市町教育委員会が主体となり行われた。今回調査の墓群22基のうち、NO.１、NO.２、NO.２－１、NO.５、NO.11の墳丘主体部およびNO.６の第１主体部［NO.６・１］、第２主体部［NO.６・２］の合計７主体部、ならびにNO.２関連の蔵骨器２個［NO.２・②、NO.２・④］、NO.３－１の蔵骨器［NO.３－１］およびNO.２－２の蔵骨器［NO.２－２］の合計４蔵骨器（製作年代：13～14世紀）から骨片群が出土した。以下に述べるようにこれらの出土骨はいずれも火熱を受けた人焼骨である。

この遺跡の出土骨の個体数を検討するにあたり、各出土骨は骨種と部位を同定しうる大骨片と、骨種は概ね同定しうるが部位の不明な小骨片とおよび、骨種、部位とも不明な粒状骨とに分類した。さらに、人骨の個体数は、性や年齢に伴う人骨の特徴について、重複する部分骨の比較、左右側の個体識別などにより推定した。

１　主体部出土骨

主体部出土骨の重量は、NO.１：25g、NO.２：34g、NO.２－１：138g、NO.５：36g、NO.６・１：140g、NO.６・２：136g、NO.11：140gで、合計７主体部の総重量は649gである。NO.６・２には炭化物が認められるが、いずれの出土骨にも獣骨などはみられない（表１）。

ａ．出土骨の骨種

NO.１　　：体肢骨の小骨片群である。

NO.２　　：頭蓋骨の小骨片１個と体肢骨の小骨片群である。

NO.２－１：頭蓋骨（上顎骨）の大骨片１個および頭蓋・体幹・体肢骨の小骨片群（137g）である。

NO.５　　：体肢骨の小骨片群である。

NO.６・１：頭蓋骨（後頭骨、側頭骨）の大骨片３個および頭蓋・体幹・体肢骨の小骨片群（138g）である。

NO.６・２：頭蓋骨（後頭骨）の大骨片１個および頭蓋・体幹・体肢骨の小骨片群（131g）である。

NO.11　　：頭蓋骨(側頭骨、頬骨)、体肢骨(腓骨)の大骨片３個(３g)および頭蓋・体肢骨の小骨片群(137g)である。

大骨片の骨種

頭蓋骨（10g）として、後頭骨、側頭骨、頬骨、上顎骨の４種の大骨片が出土する。体肢骨（１g）として、腓骨の大骨片が出土する。体幹骨の大骨片はない。

小骨片の骨種

頭蓋骨60g、体幹骨７g、体肢骨571gであるが、部位は同定できない。

ｂ．観察個数

大骨片はNO.２－１、NO.６・１、NO.６・２、NO.11の合計４主体部の出土骨にみられる。以下、部位の観察個数と出土地点を記す。

後頭骨

１）外側部で後頭顆を含む部位：右１個［NO.６・１］、２）後頭鱗中央部で内後頭隆起を含む部位：１個［NO.６・２］。

側頭骨

１）錐体乳突部で頚動脈管を含む部位：右１個［NO.６・１］、２）側頭鱗部で頬骨突起を含む部位：右１個［NO.

6・1]、左1個 [NO.11]。

頬　骨

1）前頭突起：右1個 [NO.11]。

上顎骨

1）前頭突起：左1個 [NO.2-1]。

腓骨

1）骨体：左1個 [NO.11]。

大骨片の部位の重複は観察されない。

c．所　見

性や年齢に伴う人骨の特徴について、頭蓋骨および体肢骨の大骨片（4主体部出土）の形状は成人骨と思われ、頭蓋骨、体幹骨、体肢骨の小骨片（7主体部出土）の緻密質の厚径からはいずれも成人骨と推定される。一方、これらの骨片は焼骨で、その色調は白色であり、骨質は硬く、その破縁は鋭利である。しかし、火熱による変形のため各骨片とも連結しえなかった。また、どの出土骨の骨片とも重複部位を認めない。

以上、この遺跡の主体部出土骨 [NO.1、NO.2、NO.2-1、NO.5、NO.6・1、NO.6・2、NO.11] は各主体部とも成人骨1個体分、合計7個体分と推定される。

2　蔵骨器内出土骨

蔵骨器内出土骨の重量は、NO.2・②：123g、NO.2・④：1219g、NO.3-1：50g、NO.2-2：36gで、蔵骨器4個内の総重量は1428gである（表2）。各出土骨は原則として蔵骨器内の上位（U）、中間位（I）、下位（L）に分け出土する。NO.2・②の下位出土骨には炭化物2片含まれるが、いずれも土器片、獣骨など見られない（表2）。以下、各出土骨の骨種、観察個数、所見の順に記す。

1．出土骨 [NO.2・②]

蔵骨器内の上位（U：5g）、中間位（I：46g）、下位（L：72g）より出土する。

a．骨種：頭蓋骨（上顎骨：I）、体肢骨（指節骨：I）の大骨片2個（2g）および頭蓋骨の小骨片群（8g：U，I，L）、体肢骨の小骨片群（113g：U，I，L）である。

b．観察個数：上顎骨前頭突起：右1個および手の指節骨：母指未節骨1個である。大骨片の部位の重複は観察されない。

c．所見：大骨片の形状、小骨片群の緻密質の厚径から、この出土骨は成人骨であり、頭蓋（冠状）縫合内板が部分的に癒着完了していることから、壮年期～熟年期の性別不明な人骨と推定される。

2．出土骨 [NO.2・④]

蔵骨器内の上位（U：3g）、中間位（I：444g）、下位（L：722g）より出土する。

a．骨　種

上位　(U)：頭蓋骨（蝶形骨、側頭骨）の大骨片2個（2g）および体肢骨の小骨片4個（1g）である。

中間位(I)：大骨片として、頭蓋骨（29g）、体幹骨（32g）、上肢骨（12g）、下肢骨（44g）の合計117gであり、小骨片として、頭蓋骨（26g）、体幹骨（19g）、体肢骨（282g）の合計327gである。

下位　(L)：大骨片として、頭蓋骨（79g）、体幹骨（36g）、上肢骨（43g）、下肢骨（125g）の合計283gであり、小骨片として、頭蓋骨（47g）、体幹骨（34g）、体肢骨（358g）の合計439gである。

大骨片の骨種

頭蓋骨（110g）として、後頭骨（I，L）、蝶形骨（U，L）、側頭骨（U，I，L）、頭頂骨（I，L）、前頭骨・鼻骨・

鋤骨（L）、上顎骨（I，L）、口蓋骨・頬骨（L）、下顎骨（I，L）の11種の大骨片と脱落歯13個（I，L）が出土し、篩骨、下鼻甲介、涙骨、舌骨はみあたらない。（図１～図４）。

体幹骨（68g）として、頚椎・胸椎・腰椎・仙骨・肋骨・胸骨（I，L）の６種が出土し、尾椎はみあたらない。

上肢骨（55g）として、肩甲骨（I，L）、鎖骨・上腕骨（L）、橈骨・尺骨・手根骨・中手骨・指節骨（I，L）の８種がすべて出土する。

下肢骨（169g）として、寛骨・大腿骨（L）、：脛骨・腓骨（I，L）、膝蓋骨（L）、足根骨（I，L）、中足骨（L）、指節骨（I，L）の８種がすべて出土する。

小骨片の骨種

頭蓋骨73g、体幹骨53g、体肢骨641gであるが、部位は同定できない。

粉状骨（50g）は粒状小塊で、骨種、部位とも同定できない。

b．観察個数

大骨片は骨種と部位が同定できるので、各骨に分類し、さらに同定部位を包含する。以下、頭蓋の部位の観察個数を記す。

頭蓋骨

(a) 後頭骨　1）側頭部で後頭頼・舌下神経管を含む部位：右１個（L）、左１個（I）、2）後頭鱗中央部で内外後頭隆起を含む部位（L）、3）後頭鱗ラムダ縁を含む部位（I）。

(b) 蝶形骨　1）大翼基部で、卵円孔を含む部位：右１個（L）、左１個（U）、2）大翼の頭頂縁を含む部位：左右各１個（L）。

(c) 側頭骨　1）錐体乳突部で頚動脈管・内耳孔を含む部位：右１個（L）、左１個（I）、2）側頭鱗部で頬骨突起を含む部位：左右各１個（L）、3）蝶形骨縁：左右各１個（U、L）。

(d) 頭頂骨　1）蝶形骨角：右１個（L）、左１個（I）、2）乳突角：右１個（I）、3）矢状縁：左右各１個（I）、4）後頭縁：左１個（I）。

(e) 前頭骨　1）前頭鱗頬骨突起部：左右各１個（L）、2）鼻部：１個（L）。

(f) 鼻骨　1）上縁：左右各１個（L）。

(g) 鋤骨　1）鋤骨翼：１個（L）。

(h) 上顎骨　1）上顎体で梨状口縁を含む部位：左右各１個（L）、2）前頭突起：左右各１個（L）、3）口蓋突起：右２個（L×２）、左１個（I）。

(i) 口蓋骨　1）水平板：左右各１個（L）。

(j) 頬骨　1）前頭突起：左右各１個（L）、上顎突起：左１個（L）。

(k) 下顎骨　1）下顎枝下顎頚部：左右各１個（L）、2）下顎枝筋突起：左１個（L）、3）下顎体正中歯槽部：１個（I）。

(l) 脱落歯　1）永久歯歯冠：犬歯１個（I）、小臼歯１個（L）、2）歯根で１根のもの：10個（I：４個、L：６個）、3）歯根で３根のもの：１個（L）。

頭蓋骨のうち、右上顎骨の口蓋突起（h-2）は２個体分観察される。

体幹骨、上肢骨では部位の重複が観察されない。

下肢骨では左寛骨の大坐骨切痕を含む部位（L×２）、左寛骨の寛骨臼・坐骨結節を含む部位（L×２）、左踵骨の載距突起（I，U）が各々２個体分観察される（図５）。

頭蓋骨、下肢骨の観察個数より、個体数は最小限２個体ある。

c．所　見

脳頭蓋骨の内板・外板は厚い。ラムダ縫合の内・外板は癒着を認めないが、矢状縫合の内板では完了している。側頭骨左右には乳突鱗状縫合が癒着消失している。乳様突起左は小さい。後頭骨の外後頭隆起は弱い。前頭骨の眉間、眉弓の膨隆は強い。鼻骨上顎縫合は一部癒着消失する。頬骨右は中等度（最大幅：40㎜、最大高：40㎜）。下顎枝は広く、筋突起左右は烏帽子型である。翼突筋粗面の凹凸は強い。下顎切痕は深い。犬歯、小臼歯各１個の咬耗度はマルチンの１～２度である。頚椎体、腰椎体の辺縁には骨増殖が認められる。手足の指節骨の骨端は癒着完了している。寛骨左右の腸骨翼は厚く、頑丈である。

この出土骨は壮年期～熟年期の男性骨１個体分と性別不明骨少なくとも１個体分の合計２個体分と思われる。

３．出土骨［NO.３－１］

蔵骨器内の上位（U：16g）、下位（L：34g）より出土する。

a．骨種：頭蓋骨（側頭骨、前頭骨：L）の大骨片（４g）および頭蓋骨の小骨片群（46g：U，L）である。

b．観察個数：側頭骨錐体乳突部で内耳孔を含む部位：左１個、前頭骨前頭鱗頬骨突起部：右１個である。

NO.２・④以外の少量出土骨の大骨片には出土骨間の接合・重複ともみられないが、多量出土骨のNO.２・④の大骨片中に同一部位がみられる。

c．所見：頭蓋骨の大骨片の形状、小骨片群の緻密質の厚径から成人骨と思われるが、性別および年齢など詳細不明である。

４．出土骨［NO.２－２］

蔵骨器内より一括出土する。(36g)。

a．骨種：頭蓋骨の小骨片群（４g）、体肢骨の小骨片群（32g）である。

b．所見：頭蓋骨・体肢骨の小骨片群は成人骨と思われるが、性別および年齢など詳細不明である。

３　まとめ

上市町黒川上山古墓群の平成６年度調査（22基の墓を調査）の際、主体部７ヵ所および蔵骨器４個の内部から焼骨群が発見された。おもに個体数を検討したので、以下に述べる。なお、出土骨は大骨片、小骨片、粉状骨とに分類し、主に大骨片の形態を観察した。

１）主体部出土骨の総量はNO.１：25g、NO.２：34g、NO.２－１：138g、NO.５：36g、NO.６・１：140g、NO.６・２：136g、NO.11：140gで、いずれも少量である。

２）主体部出土骨の大骨片として、後頭骨［NO.６・１、NO.６・２］、側頭骨左右［NO.６・１、NO.11］、頬骨右［NO.11］、上顎骨左［NO.２－１］、腓骨左［NO.11］の大骨片の部位が観察される。部位の重複、大骨片間の接合はみられない。

３）主体部出土骨の個体数は、性別不明な成人骨各１個体分、合計７個体分と推定される。

４）蔵骨器内出土骨の総重量はNO.２・②：123g、NO.２・④：1219g、NO.３－１：50g、NO.２－２：36gであり、NO.２・④の他の出土量は少ない。

５）蔵骨器内少量出土骨の大骨片として、側頭骨左［NO.３－１］、前頭骨［NO.３－１］、上顎骨右［NO.２・②］手の母指未節骨［NO.２・②］の大骨片が観察され、部位の重複、大骨片間の接合はみられない。

６）蔵骨器内少量出土骨の個体数は、いずれも性別不明な壮年期～熟年期骨１個体［NO.２・②］および成人骨各１個体［NO.３－１、NO.２－２］の合計３個体分と推定される。

７）蔵骨器内多量出土骨［NO.２・④］の大骨片として、全身骨格の大骨片（頭蓋骨：110g、体幹骨：68g、上肢骨：55g、下肢骨：169g）の部位が、蔵骨器の上位、中間位、下位のいずれにも混在している。

8）蔵骨器多量出土骨［NO.2・④］のうち、上顎骨右、寛骨左、踵骨左は2個体分観察される。

9）蔵骨器多量出土骨［NO.2・④］の所見より、この出土骨の性・年齢構成は壮年期～熟年期の男性骨1個体および同年齢の性別不明骨少なくとも1個体分の合計2個体分と推定される。

10）骨の異常増殖として、頚椎体、腰椎体の辺縁に認められる［NO.2・④］。

最後に貴重な資料の検査をお許しくださいました関係各位に深く感謝いたします。

関連文献

1）森沢佐歳、篠原治道、大谷修「香城寺惣堂遺跡第10号墓蔵骨器内出土骨について」『医王は語る　第二章』医王山文化調査委員会編、169-173ページ・富山県福光町、1993

2）森沢佐歳「薮田薬師横穴墓群の出土人骨について」『薮田薬師中世墓発掘調査報告書』氷見市教育委員会編、16-25ページ、氷見市教育委員会、1985

3）森沢佐歳「栗田楮原遺跡出土骨概要」『栗田楮原遺跡・南中田A遺跡・任海鎌倉遺跡・南中田C遺跡』富山県埋蔵文化財センター編、117ページ、富山県埋蔵文化財センター、1990

4）森沢佐歳、松田健史「武者野火葬骨［第48次調査出土骨］について」『朝倉氏遺跡資料館紀要一九八六』朝倉氏遺跡資料館編、27ページ、福井県立朝倉氏遺跡資料館、1987

表1　出土骨の重量（I）　（単位：g）

分類＼出土骨	NO.1	NO.2	NO.2-1	NO.5	NO.6-1	NO.6-2	NO.11
大骨片							
頭蓋骨	0	0	1	0	2	5	2
体幹骨	0	0	0	0	0	0	0
上肢骨	0	0	0	0	0	0	0
下肢骨	0	0	0	0	0	0	1
計	0	0	1	0	2	5	3
小骨片							
頭蓋骨	0	1	22	0	25	2	10
体幹骨	0	0	1	0	2	4	0
体肢骨	25	33	114	36	111	125	127
計	25	34	137	36	138	131	137
粒状骨	0	0	0	0	0	0	0
合計	25	34	138	36	140	136	140

表2　出土骨の重量（II）　（単位：g）

分類＼出土骨	NO.2・②				NO.2・④				NO.3-1			NO.2-2
位置	U	I	L	計	U	I	L	計	U	L	計	
大骨片												
頭蓋骨	0	1	0	1	2	29	79	110	0	4	4	0
体幹骨	0	0	0	0	0	32	36	68	0	0	0	0
上肢骨	0	1	0	1	0	12	43	55	0	0	0	0
下肢骨	0	0	0	0	0	44	125	169	0	0	0	0
計	0	2	0	2	2	117	283	402	0	4	4	0
小骨片												
頭蓋骨	1	2	5	8	0	26	47	73	16	30	46	4
体幹骨	0	0	0	0	0	19	34	53	0	0	0	0
体肢骨	4	42	67	113	1	282	358	641	0	0	0	32
計	5	44	72	121	1	327	439	767	16	34	50	36
粒状骨	0	0	0	0	0	0	50	50	0	0	0	0
合計	5	46	72	123	3	444	772	1219	16	34	50	36

＊：U上位、I中間位、L下位

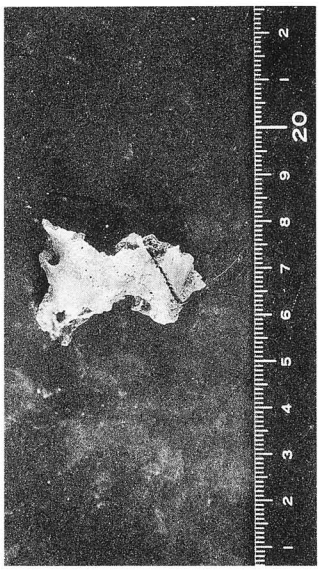


図 1　No.2-1・④
上位出土頭蓋骨

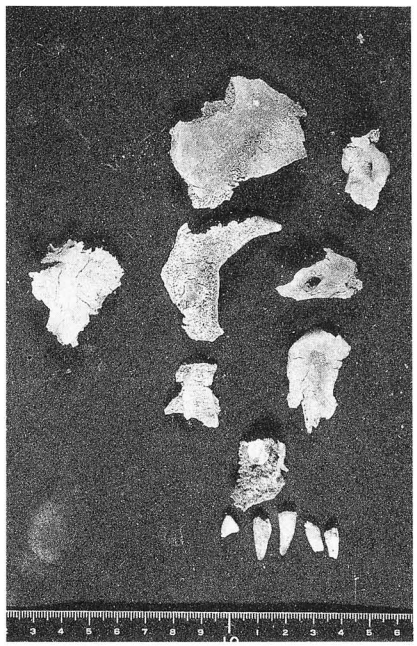


図 2　No.2-1・④ 中間位出土頭蓋骨
上にから後頭骨、頭頂骨左右＋側頭骨左右、上顎骨左、脱落歯の順

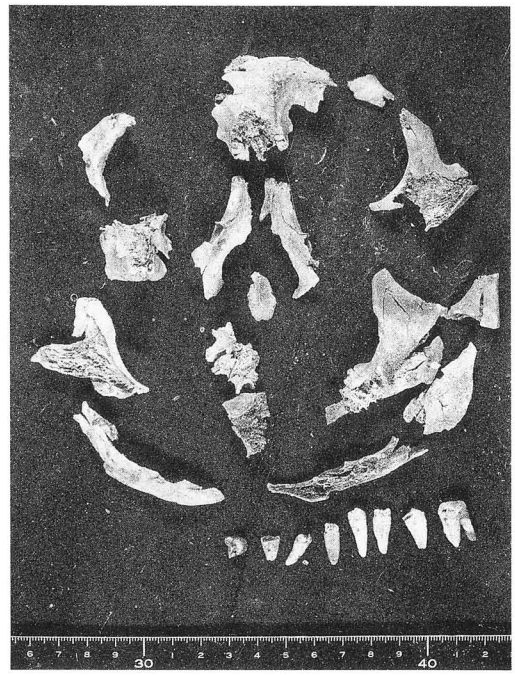


図 3　No.2-1・④ 下位出土頭蓋骨（Ⅰ）
上から前頭骨、頬骨左右、上顎骨左右、金助骨、下顎骨、脱落歯の順

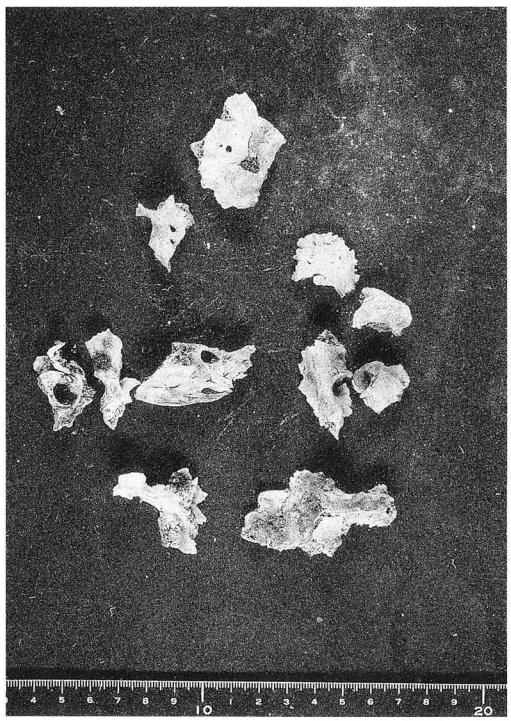


図 4　No.2-1・④ 下位出土頭蓋骨（Ⅱ）
上から後頭骨、側頭骨左右、蝶形骨の順

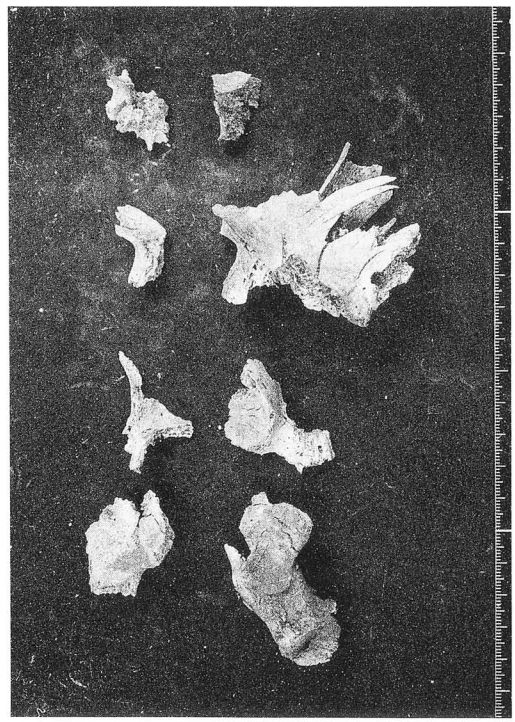


図 5　No.2-1・④ 出土骨（2個体分）
上から上顎骨右、寛骨左、寛骨左、踵骨左の順

Ⅶ　まとめ

本墓群についていくつかの検討を試みたが、その中で得られた見解を整理してみると、

1．本墓群で主体をなす墓の形態は、墳丘墓が圧倒的に多く、墳丘をもたない土壙墓や集石墓は、非常に少なく、未調査部分の地形をみる限りこの傾向は、本墓群全体の傾向であると考えられる。

2．墳丘墓を内部構造で分類すると、今のところ６類に分けられる。不明なものを除いては土葬５に対し火葬１３で、比較的に火葬がおおいことが判った。また、平面形は純粋な意味での円形はなく。楕円形、方形、長方形、不整形のものがみられ、方形が10と最も多く、長方形、楕円形がそれぞれ２基と５基であった。

3．墳丘墓は、そのほとんどに、方形の石組み、方形の縁石が施されており、その意味では墳丘墓のほとんどが方形を意識したものということができる。

4．周溝をもつものは、１号墓と９号墓であるが、他のものにはほとんど周溝がみられない。１号墓、９号墓でも完全に巡るものではなく、全体の2/3ないし1/2しか巡らない。これらの周溝は、墳丘を個別的に区画するものではなく、墓群を区画するかのような配置がみられる。

5．墓の拡張が顕著にみられるのは、２号墓周辺でもともとあった墳丘に、平坦面を作りつけたり、傍らに新たな墳丘を作りつけたりして構築されている。これらの拡張部には、珠洲焼の壺を蔵骨器として焼骨が埋葬されている。その時期は、おおむね13世紀後半から14世紀に比定され、今回調査した墓の中では、最も新しい段階で拡張が行われたものと考えられる。こうした拡張は、本来、個人墓であった墳丘墓が家族墓や同族墓に変質していった過程を示すものと考えられる。拡張されたものの内２号墓には、13世紀前半のものと考えられる五輪塔が伴っており、祭壇状の石組みも作り付けられている。(1) 追善などの施設と考えられ、注目される。

6．墓群全体の構造を考えるために、群分けを行った。その結果、現在のところ７群に分けられ、未調査部分でも最低２群に分けられる。調査した墓群について考えると、13世紀代に、ほとんどの墳丘墓が作られたものと考えるが、１号墓をはじめとするⅠ群は、これらのものより一時期古い段階での構築と考えられ、本墓群での初期の造墓は、12世紀末ないし、13世紀前半と想定した。

7．土壙墓は、２基のみ今回確認できた。墳丘墓が作られた後にその空間をぬって作られた印象が強く、やや新しい段階での構築と考えた。

8．集石には、15号墓がある。方形の緻密な石組みがなされているが、埋葬の跡は、確認できず、墓でない可能性がある。その場合、周辺に造墓があまりなく、ぽつんと作られている点なども考え合わせると、上部に構造物を想起させ、墳墓堂などの施設と想定した。このほか、４号墓から14号墓に続く段状の石積みが確認された。墓群を区画するためのものと考えたが、この石積みの北に15号墓が有ることからここを区画しているものかもしれない。

9．墓道については、墓群全体の調査が終了しない段階でもある程度観察できるくらい顕著に認められた。これは、この墓群が墳丘墓が中心に造営され、その墓域が後世にあまり手が入っていないことによるものと考えられる。周辺にも造墓の痕跡がみられないことから、本墓群の造墓が終了した後、墓域がどこにいったのかが気に掛かるところである。

(1) 伊藤唯真「師守記にみる中世葬祭仏教ー墓・寺・僧の相互の関係を中心としてー」(『鷹陵史学』３・４号、1977年)では鎌倉末期に至るまで墓前供養は、原則として一周忌までであり、その後の追善は菩提寺院に移っていくことを指摘している。これ以前の古墓にあってもたとえ貴族の墓でも放置され、いずれの墓とも知れない姿をさらしていたことが当時の日記に記録されている。つまり、14世紀ごろに至るまで、墓参の風習はなく、多くの墓は、打ち捨てられていたと考えられる。しかし、本遺跡の祭壇状の遺構は、長期にわたる供養を意識したものと考えられ、地域的な意味を含めて、墓参に対する意識の変化が読み取れると考えられ、興味深い

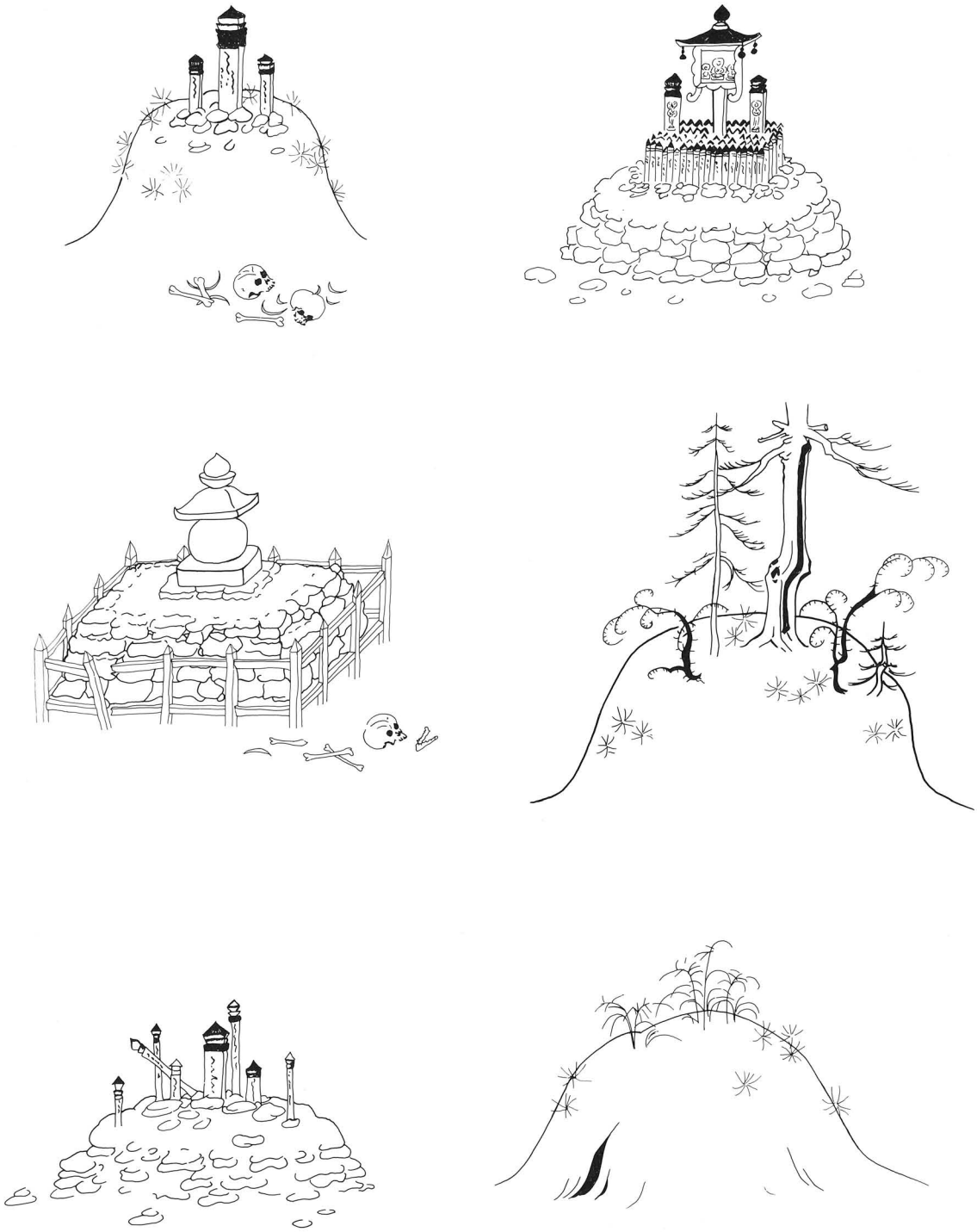
以上のような分析の結果が得られたが、ここで、本墓群がどの様な背景で成立したかを考えてみたい。この事は、とにもなおさず、被葬者が誰か、どの様な人々なのかを考えることでもある。

本墓群は、おおむね12世紀末から14世紀前半の百数十年のあいだ墓所として認識されていたものと考えているが、圧倒的に墳丘墓が多く、土壙墓、集石墓などは、極端に少ない。12世期末の作と考えられている『餓鬼草紙』の疾行餓鬼や食糞餓鬼の図に見える墓地の有様、『一遍上人絵伝』の河野通信の墳墓などにみられるものとよく似ており、原型は、こうした形に類似しているものと考える（第４図参照)。これら絵巻物に見られる墳墓は、貴族の墓と考えられており、京都周辺の集落から離れたうらさびしい場所に作られており、都の外側に展開された平安時代の一番終りごろの墓地の姿であったと考えられている。本墓群の場合、古代から中世の集落跡が周辺で確認されているわけではないが、最も近い現在の黒川集落の付近になんらかの人々の営みがあったとすると、その北端の山間部に営まれており、集落から離れた場所を墓所としていた事がうかがわれる。地形と周辺の遺跡の項でもすでに述べたが、黒川の東側には、郷川あるいは、白岩川が、形成した扇状地が広がっており、古代から中世にかけて、堀江保、小森保と呼ばれるおそらくは、国衙領であったと考えられる「保」が営まれていたことが文献より伺われる。これらの保は、12世紀末ないし13世紀前半には、堀江荘と呼ばれる祇園社に本所をもつ荘園へと変質したものと見られており、本墓群の初現期に対応する。これらの保あるいは、荘園の指導者層が本墓群を築いた可能性がある。しかしながら、宗教の面から黒川周辺の地域を見ると、今一つの可能性が見出される。それは、遺跡の周辺で見出される宗教遺跡の存在で、これに関わった僧侶などの墓所としての可能性である。本墓群の北東の穴の谷の霊場（元は修験道の行者穴)、さらにその北東には弘法大師ゆかりの地と言われる「護摩堂（ゴマンドウ)」、さらに、黒川地内に所在した真言宗本覚院の寺伝に寛弘５年(1008)に真興上人によって現在の本覚院うら手の山中に開かれたものとされる真興寺（現在もその比定地には段状に平坦面が残っている。）などがそれで、周辺一帯の山地が真言宗の修業場であった可能性がある。現在のところこの２つの可能性があるがこの二者がからみあい本墓群を形成したとも考えられ、今後、周辺全体にわたる調査が必要である。上市町は、市街地の北東に真言宗の古刹、国指定史跡の大岩山日石寺(磨崖仏・京ケ峰経塚、平安前期)、東に曹洞宗の眼目山立山寺(眼目山旧開山堂遺跡、鎌倉後期)などの寺院や、南北朝期から戦国時代まで中新川一帯に勢力のあった土肥氏をはじめとする豪族の居館跡が存在しており、本墓群を形成する前後の古代から中世の遺跡が数多く見られる。これらがどの様な変遷をたどっているのかを考える上でも本墓群及び周辺の調査が今後重要になるものと考える。

以上であるが、調査は、まだその緒についたばかりで、全容を明らかにするにはさらなる調査が必要である。墓群だけをとっても調査したのは、まだ全体の半分にみたない地域しか調査しておらず、この段階で試みた検討から結論を見出すのは、やや無理のあるところがある。しかしながら、幸にも本墓群が完全に保存されることが決定し、今後も調査を継続することとなった今、現時点で認識される事、あるいは、推定できることをまとめておくことは、今後、調査を進める上での方向性を模索する作業であると考えている。予見に満ちた部分も多くあるが、本遺跡の将来を考えた真摯な検討と、批判を乞いたい。

むすび

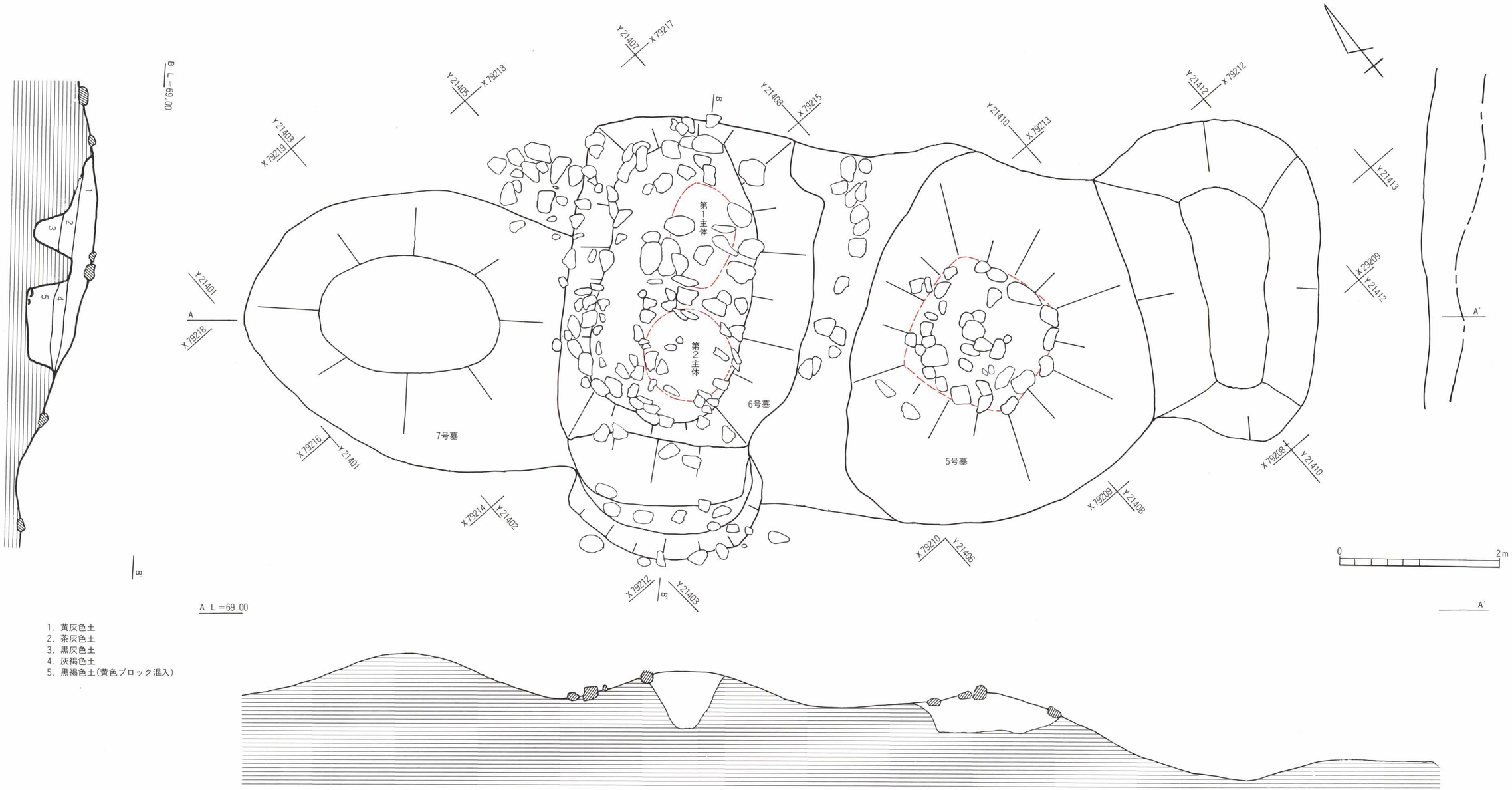
本墓群の調査は、平成６年５月から７月までの期間行った。調査がすすむ中で本墓群の重要性が次第に明かとなる中で、遺跡を保存しようという気運がもりあがった。はじめは、表立った声ではなかったが、地元を中心に人から人へ今回の調査が話題となり、最終的には、この声が大きな力となり、全面的な保存にまでつながったものである。こうした意見に真摯に耳を傾け、保存を決定した町当局に対し敬意を表するとともに、地元黒川地区住民の皆様の理解と協力に感謝するものである。今後は、本遺跡や周辺の調査を深め、地域全体の中世の姿を明らかにすること、それを踏まえて、一般に公開できる環境整備が必要である。今後のさらなるご支援を御願いする次第である。



第４図　『餓鬼草紙』（河本家本）に見るさまざまな墓標（塔）

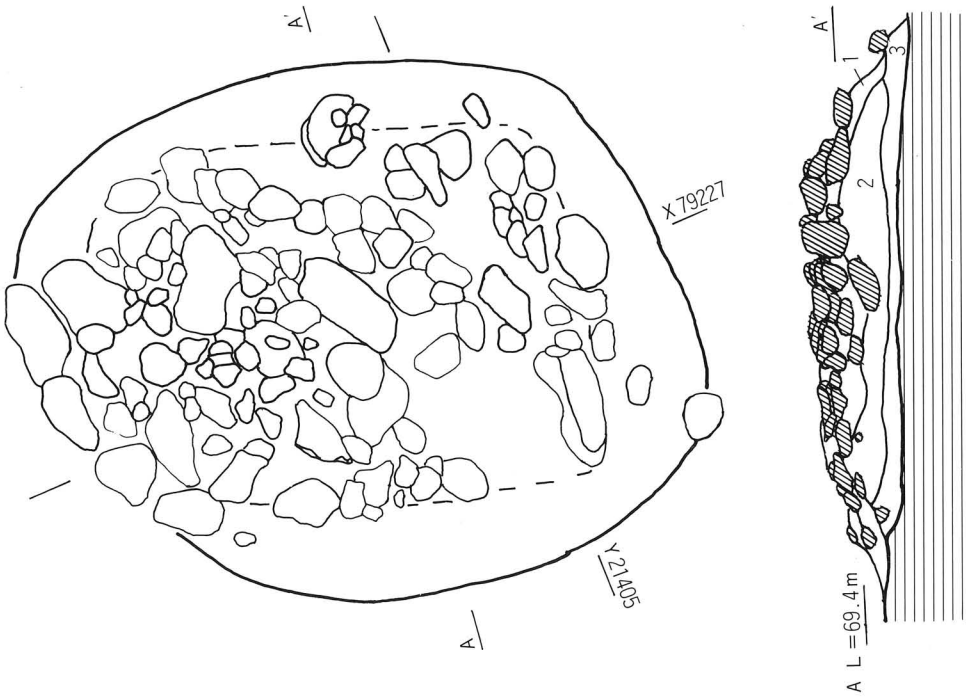
第５図　墓群全図 (1/200)　１～19は調査対象の墳墓（※XYは国土座標）

第6図　2号墓～3-1号墓実測図 (1/40)



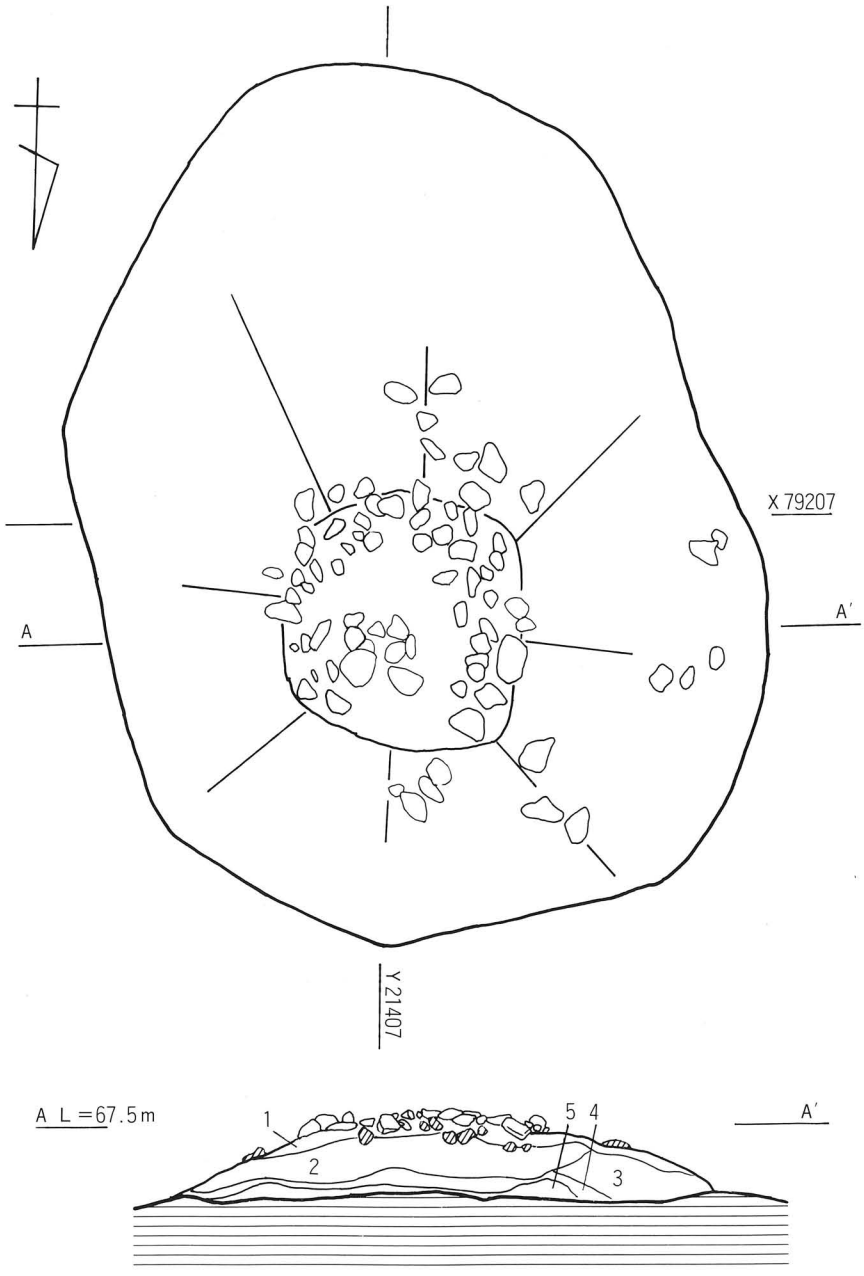
1. 黄灰色土
2. 茶灰色土
3. 黒灰色土
4. 灰褐色土
5. 黒褐色土(黄色ブロック混入)

第7図　5号墓～7号墓実測図 (1/40)



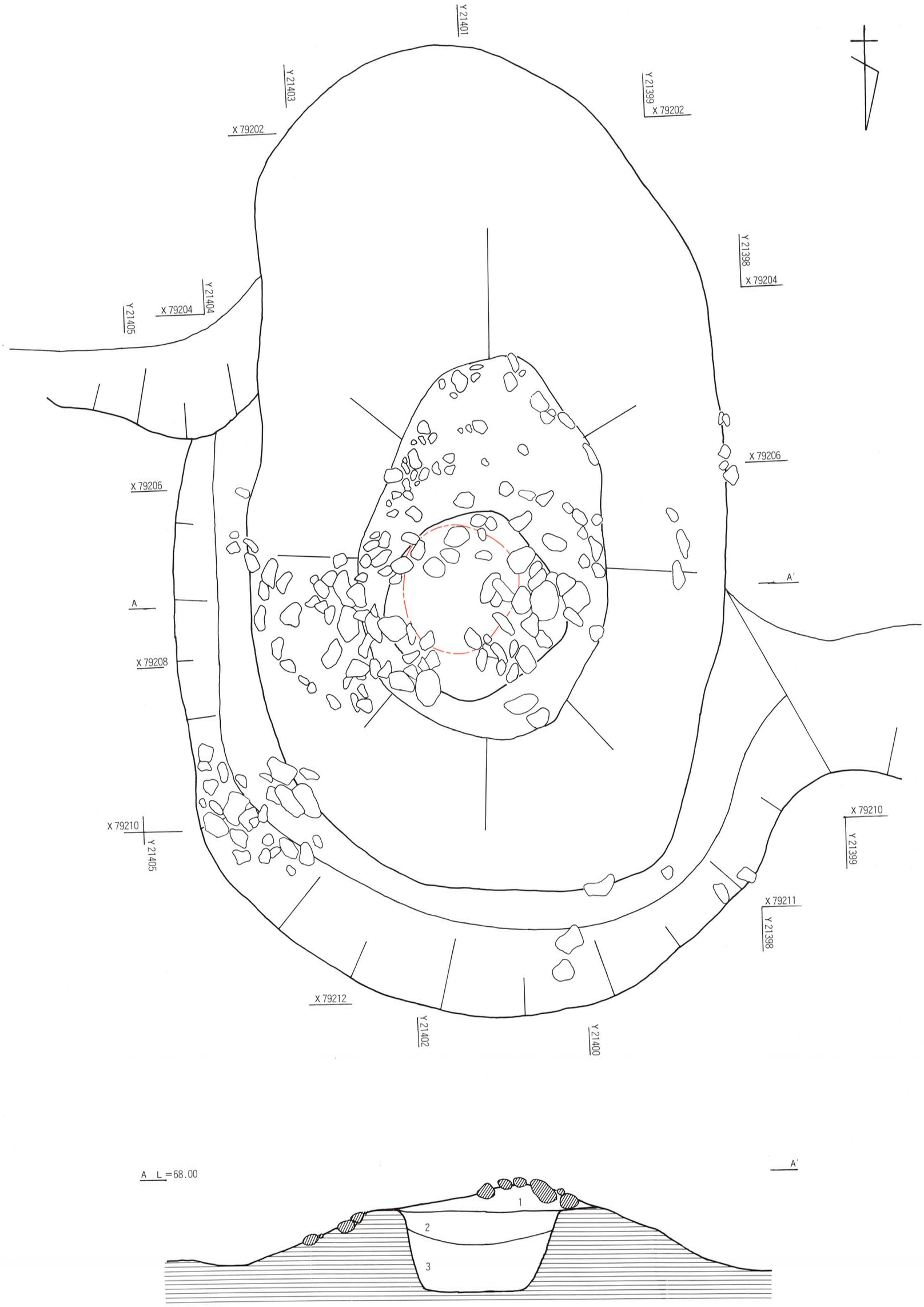
第８図　16号墓実測図 (1/40)

1. 黄褐色土
2. 茶灰色土(砂質)
3. 灰色土(灰)



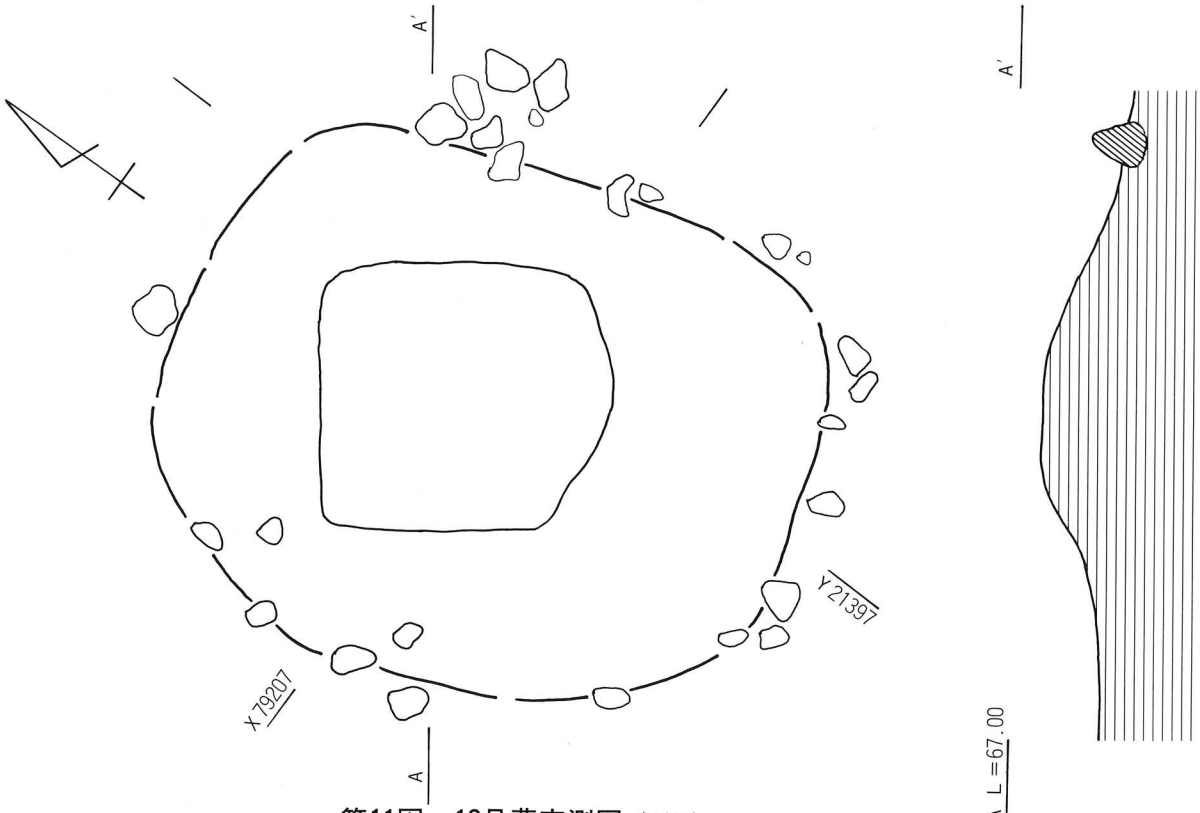
第９図　８号墓実測図 (1/40)

1. 黄灰色土
2. 灰色土(砂質)
3. 茶灰色土(砂質)
4. 黒灰色土
5. 灰色土(灰)

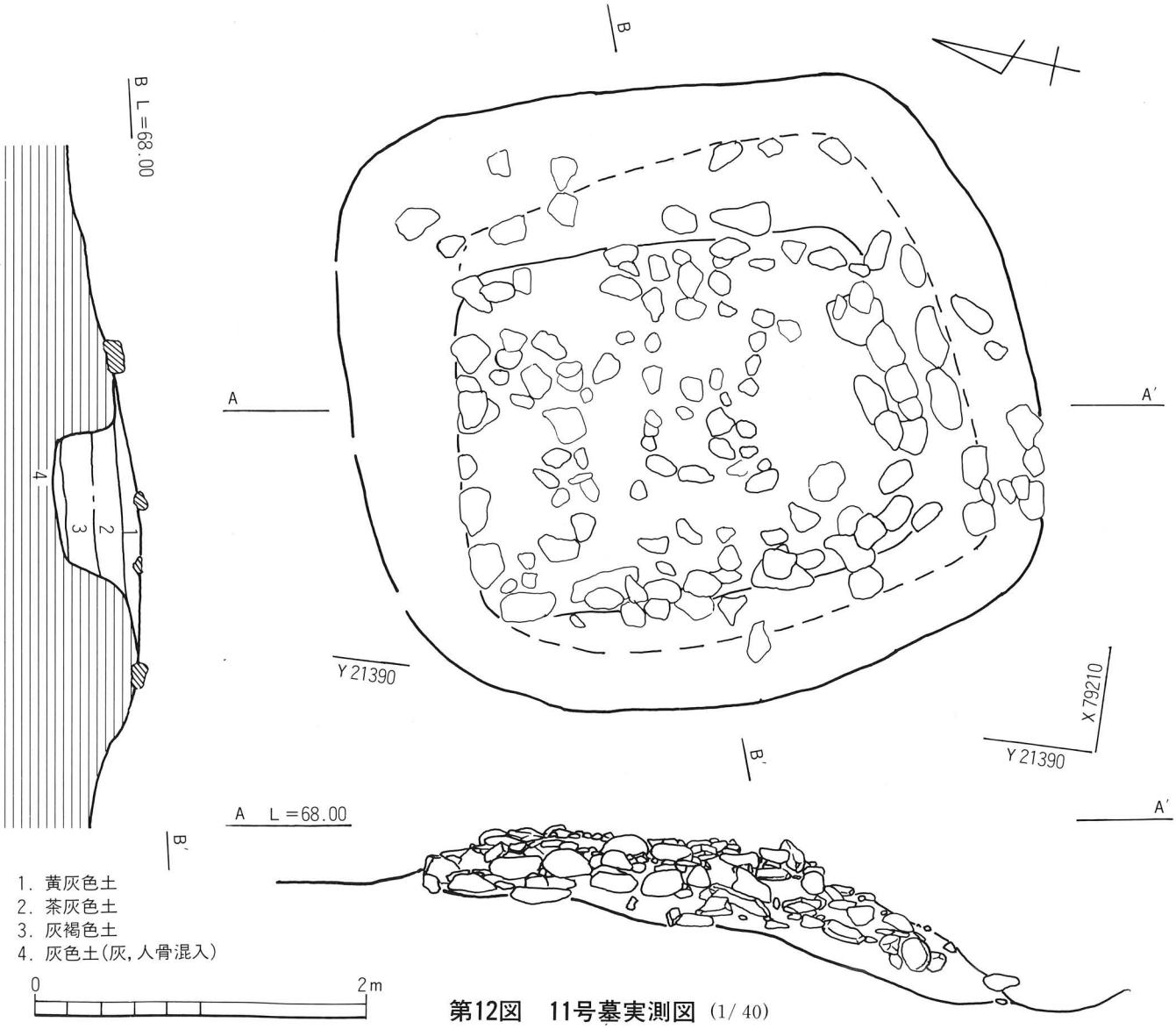


第10図　9号墓実測図 (1/40)

1. 黄灰色土
2. 茶灰色土
3. 黒褐色土(黄色ブロック混入)



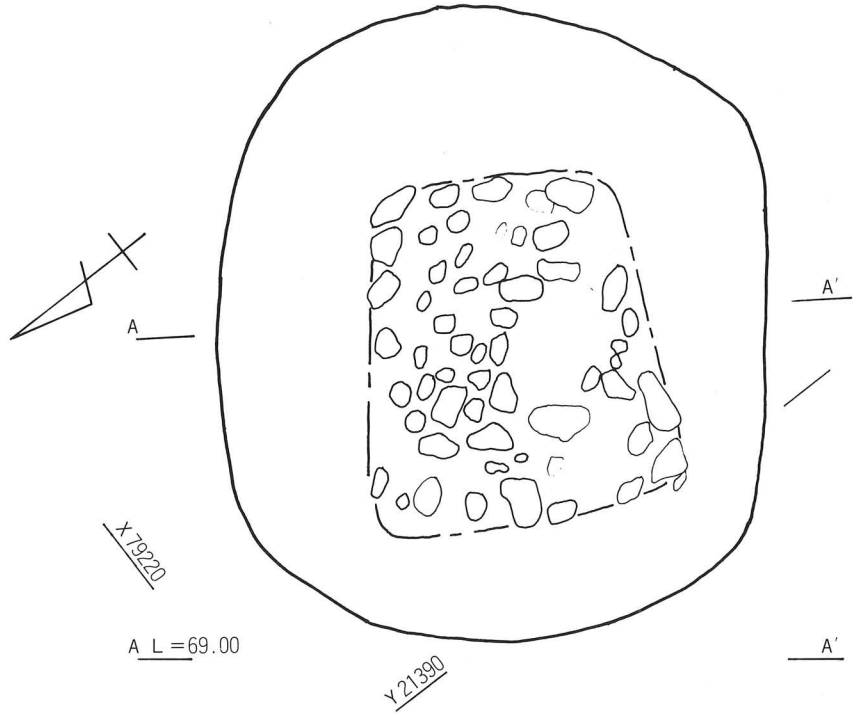
第11図　10号墓実測図 (1/40)

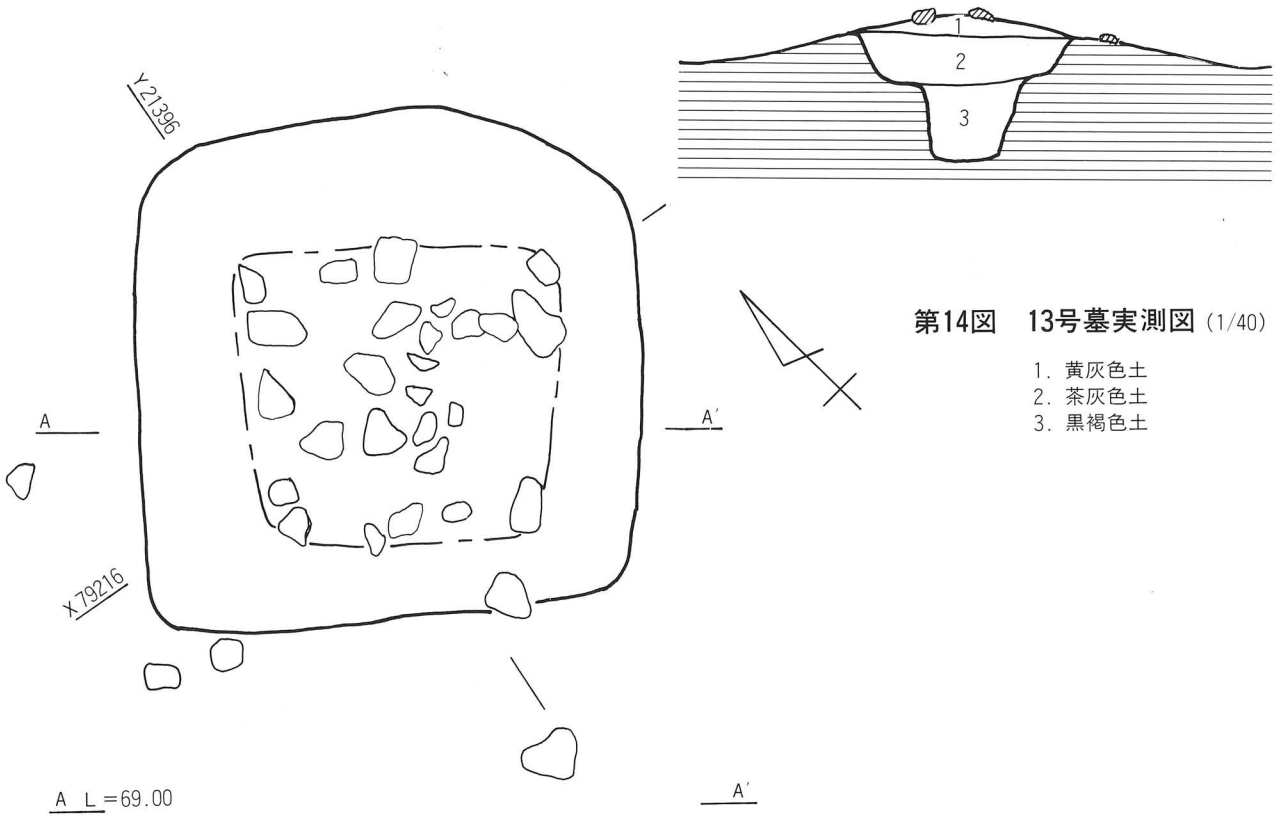


第12図　11号墓実測図 (1/40)

第13図　12号墓実測図 (1/40)

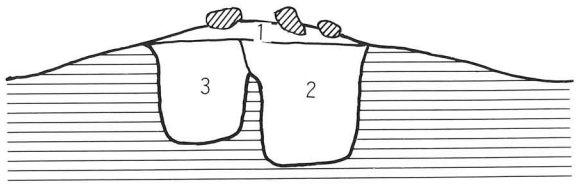
1. 黄灰色土
2. 茶灰色土
3. 黒褐色土

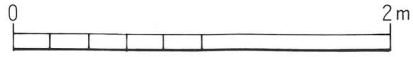


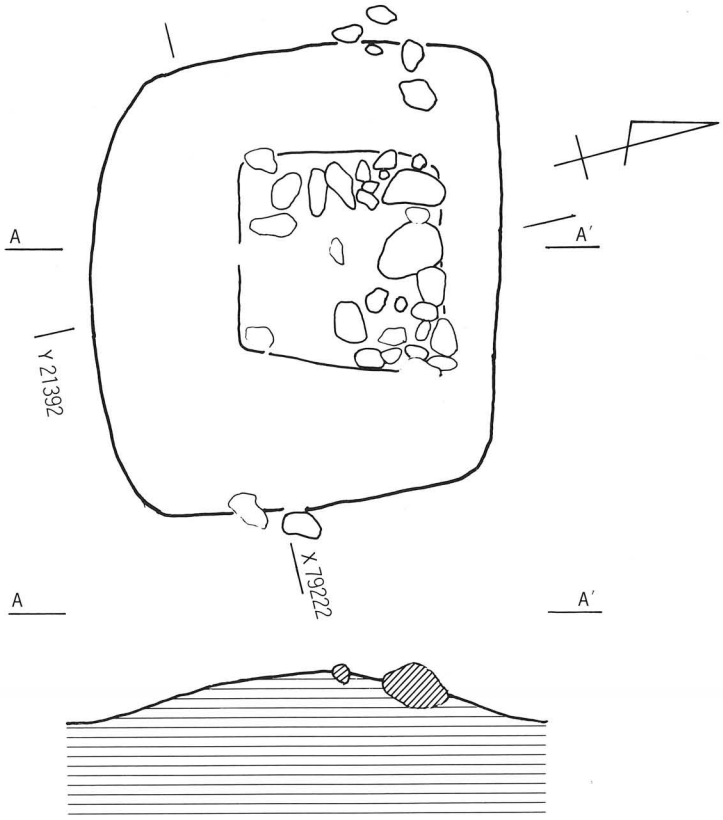


第14図　13号墓実測図 (1/40)

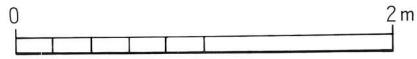
1. 黄灰色土
2. 茶灰色土
3. 黒褐色土

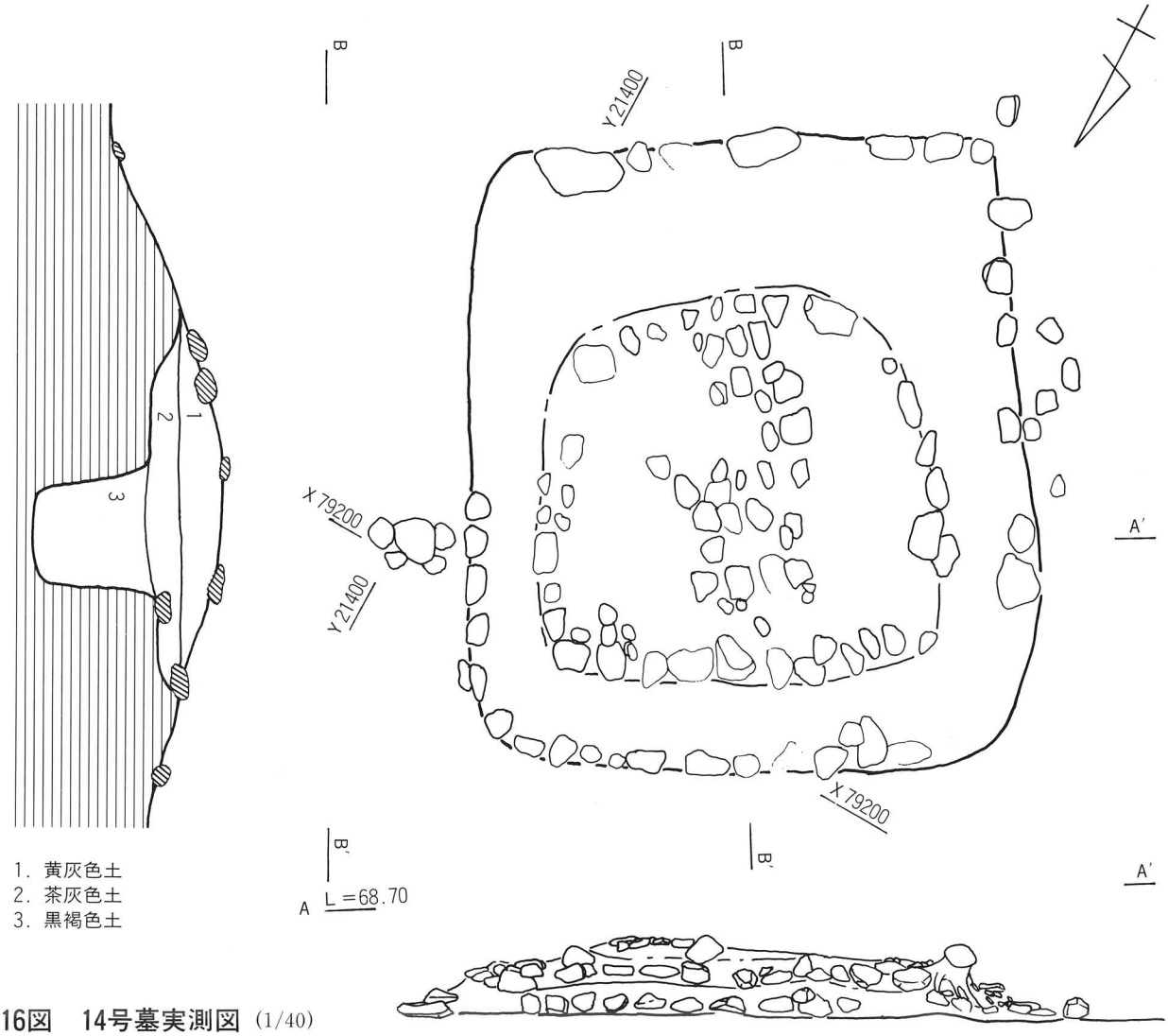




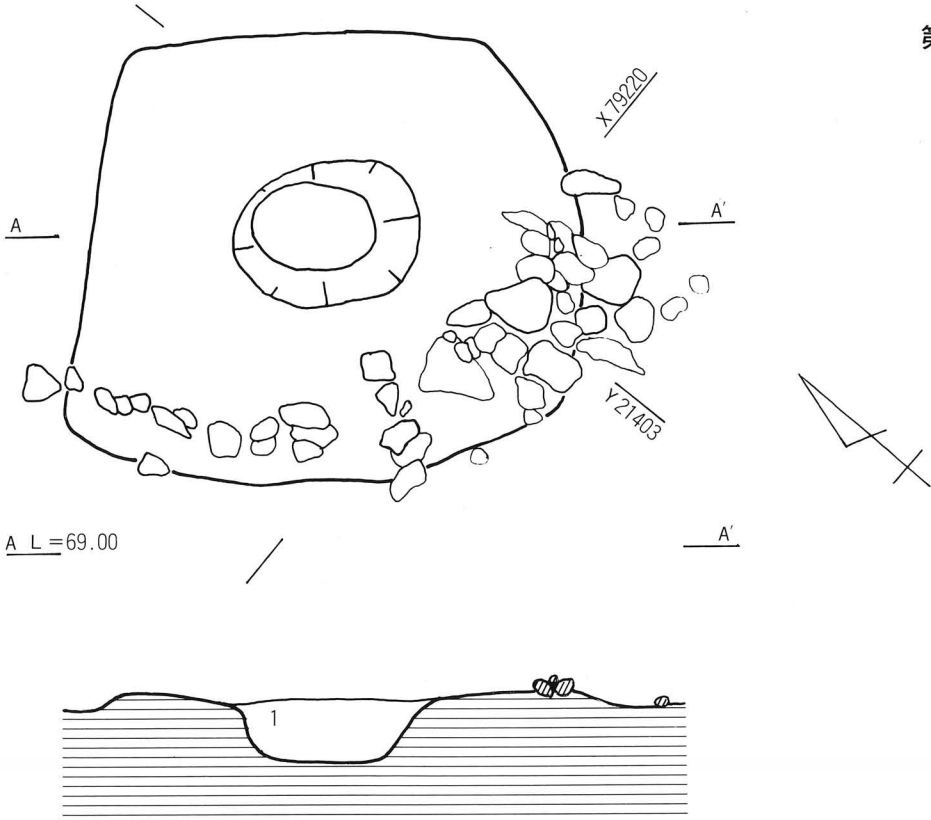


第15図　17号墓実測図 (1/40)



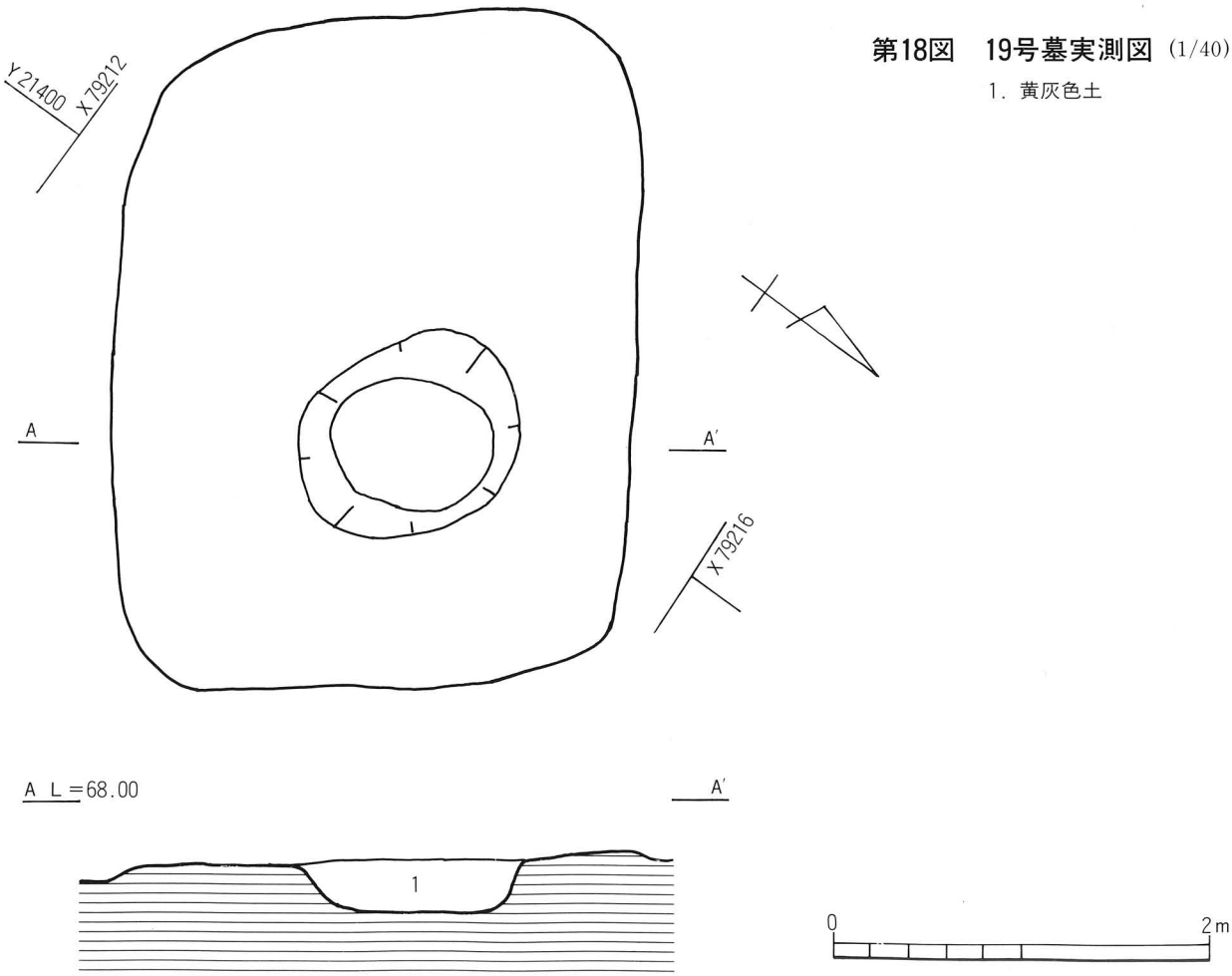


第16図　14号墓実測図 (1/40)



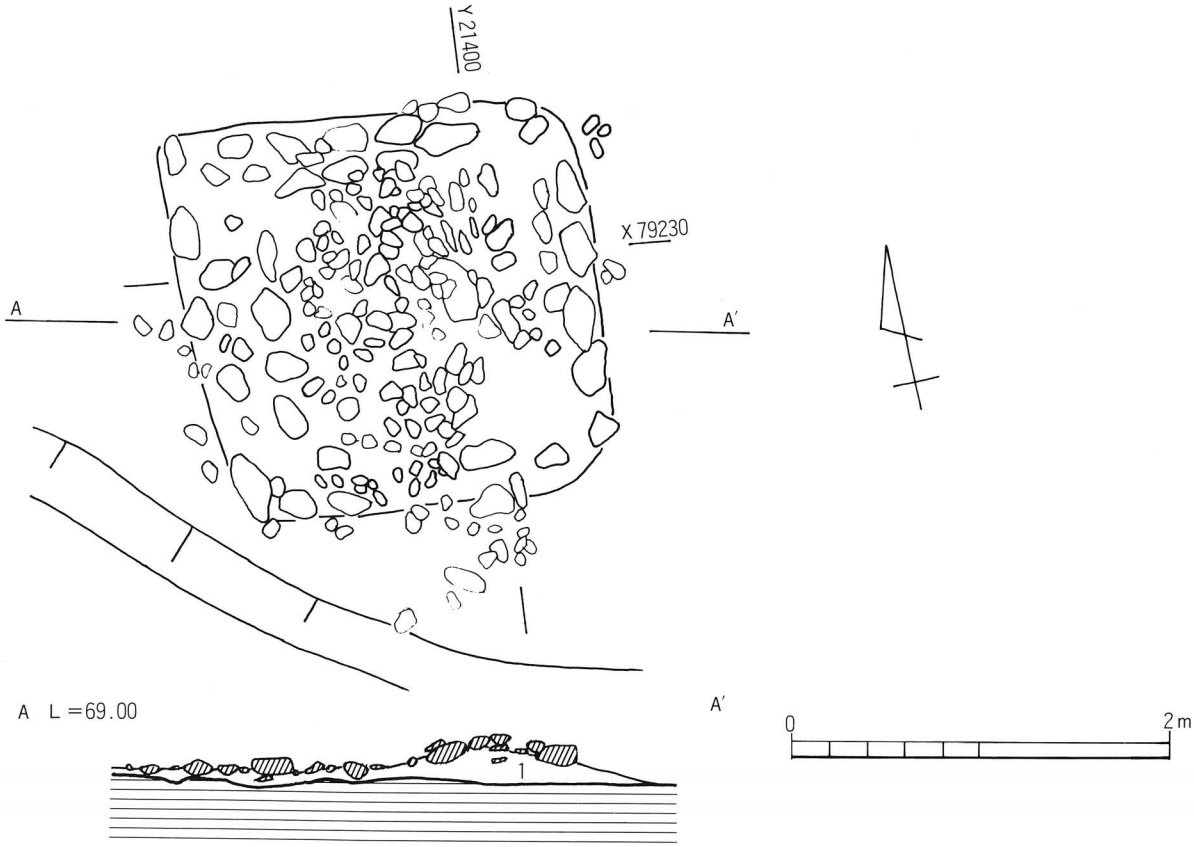
第17図　18号墓実測図 (1/40)

1．黄灰色土



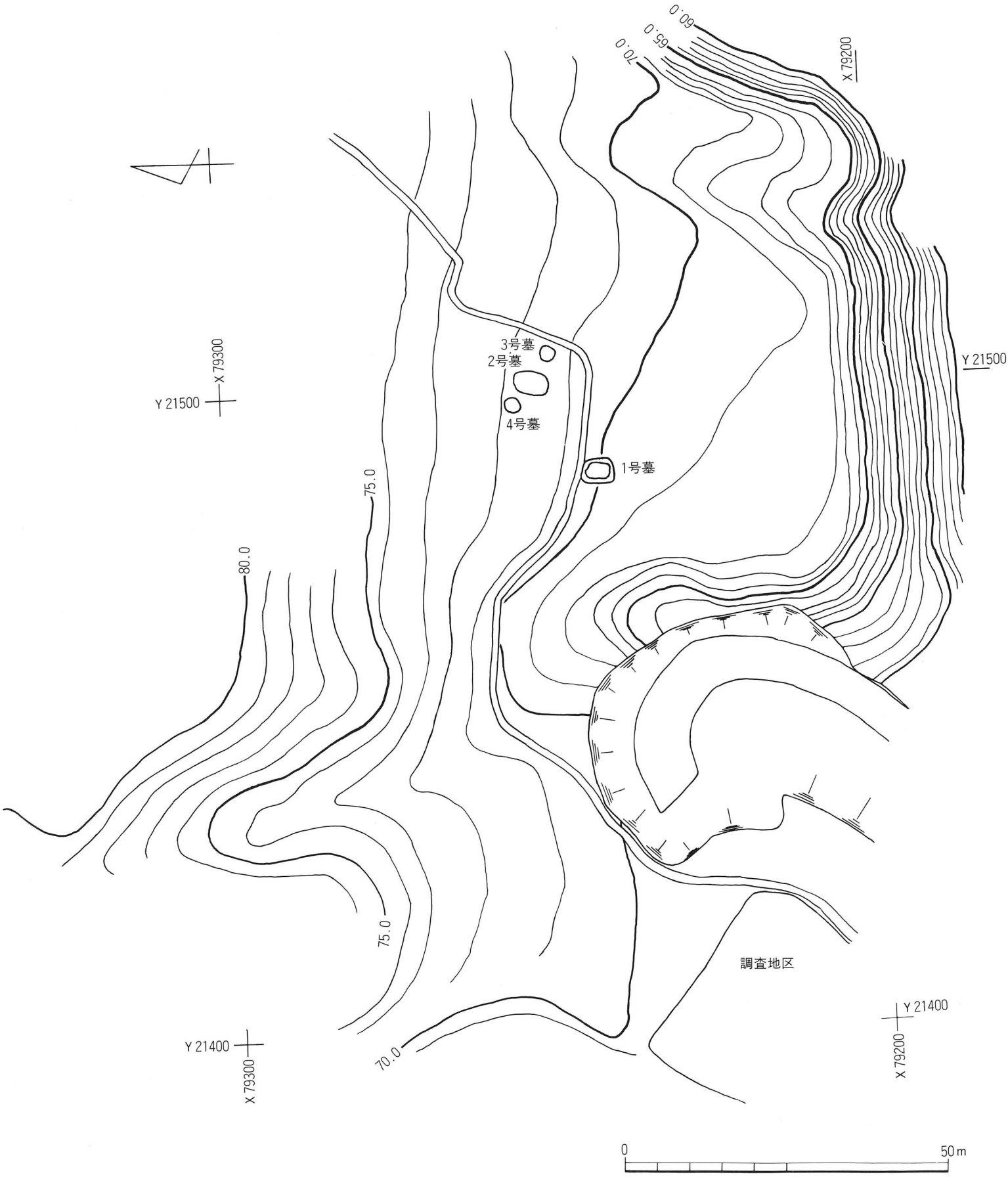
第18図　19号墓実測図 (1/40)

1．黄灰色土

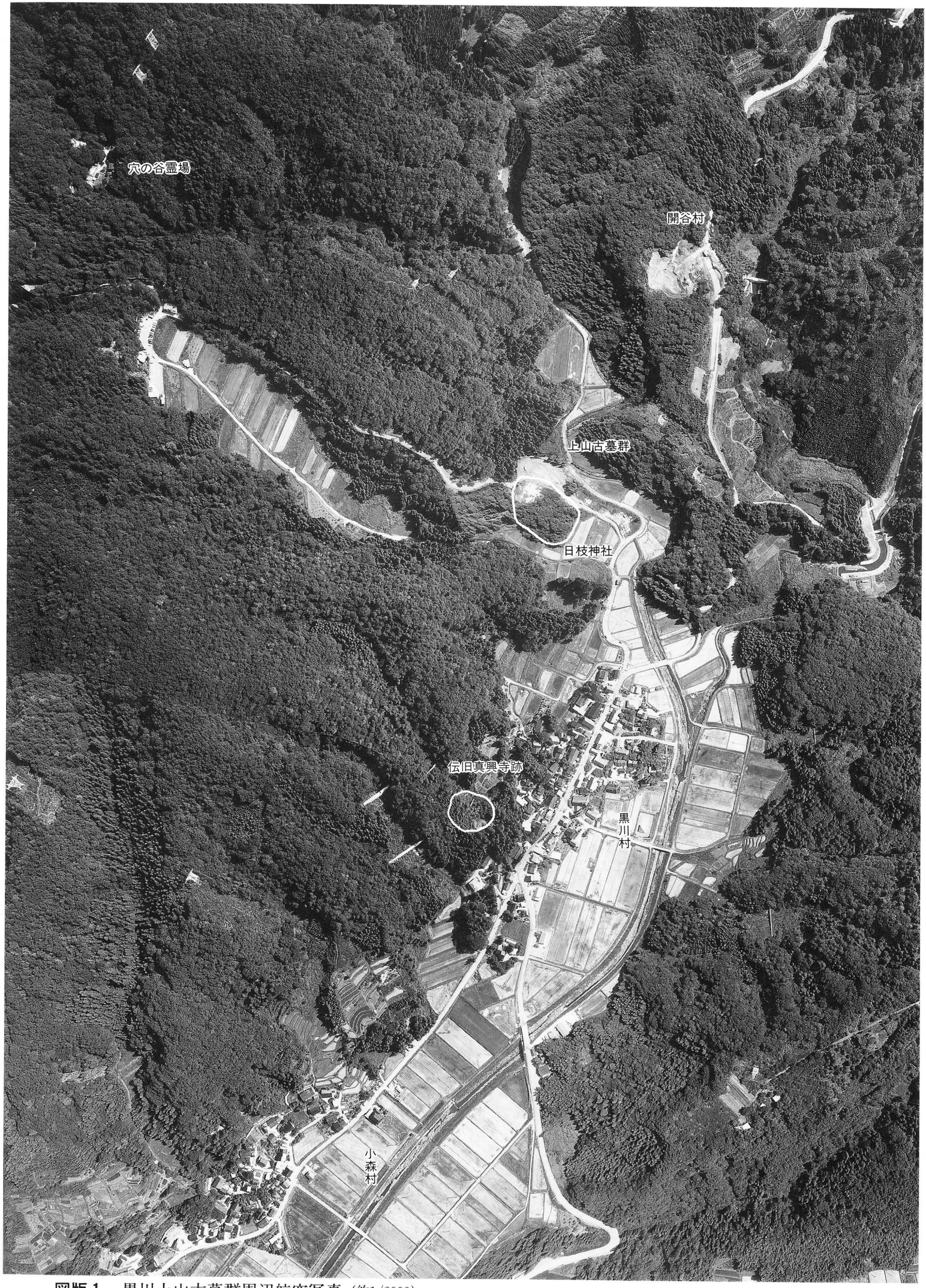


第19図　15号墓（集石）

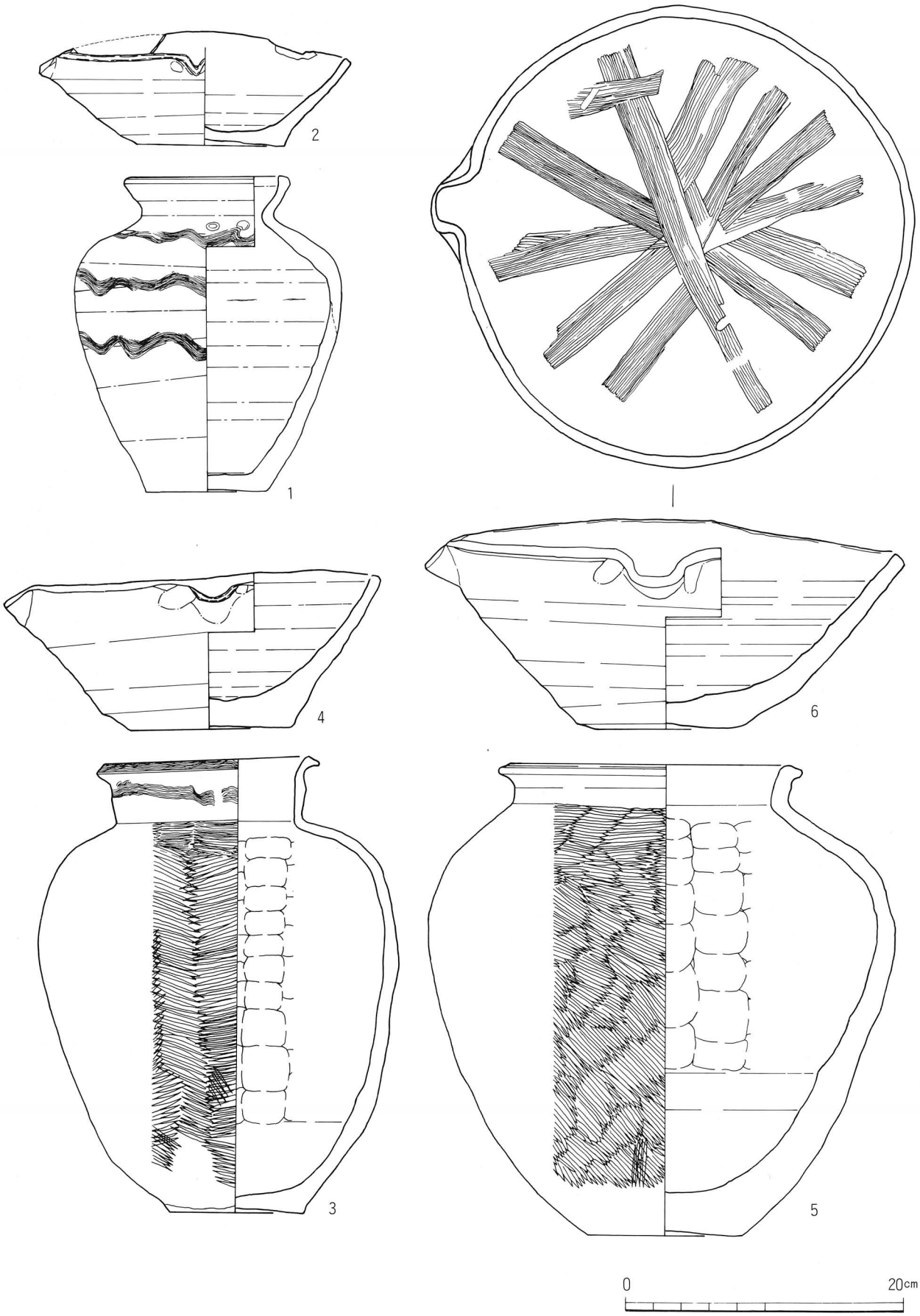
1. 黄灰色土



第20図　試掘調査地区地形図

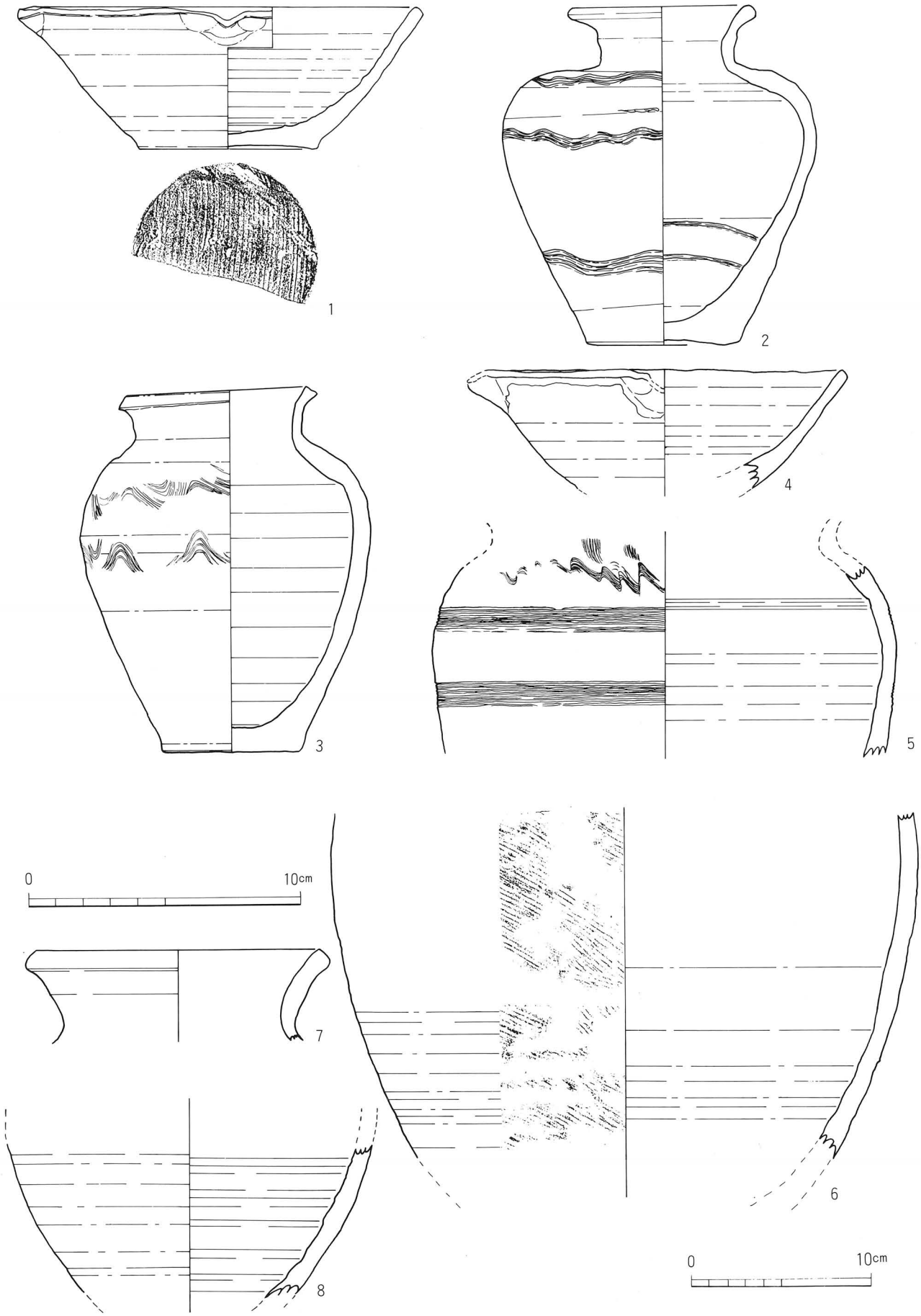


図版 1　黒川上山古墓群周辺航空写真（約1/6000）



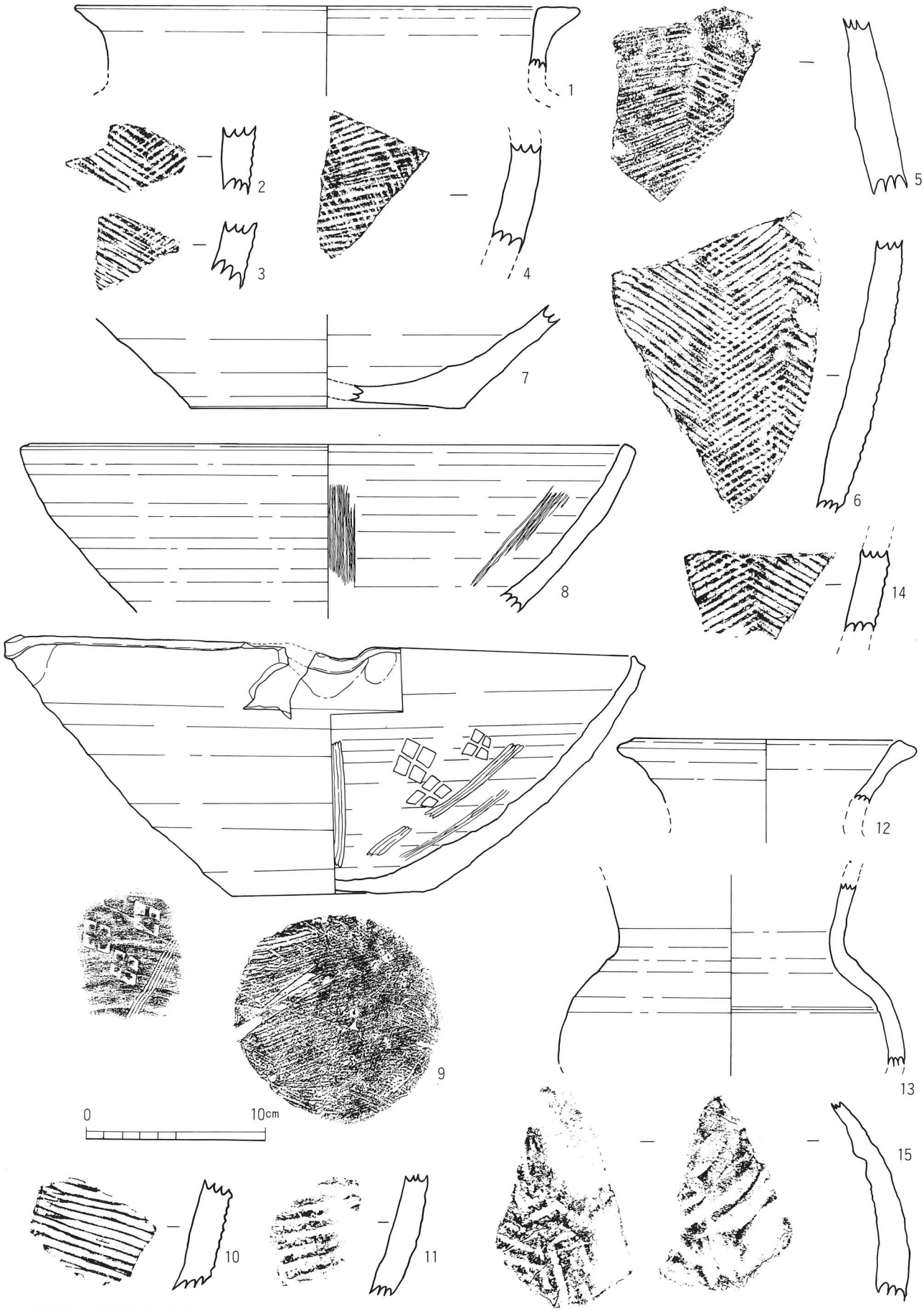
図版２　遺物実測図（縮尺1/4）

珠洲焼：２号墓出土蔵骨器



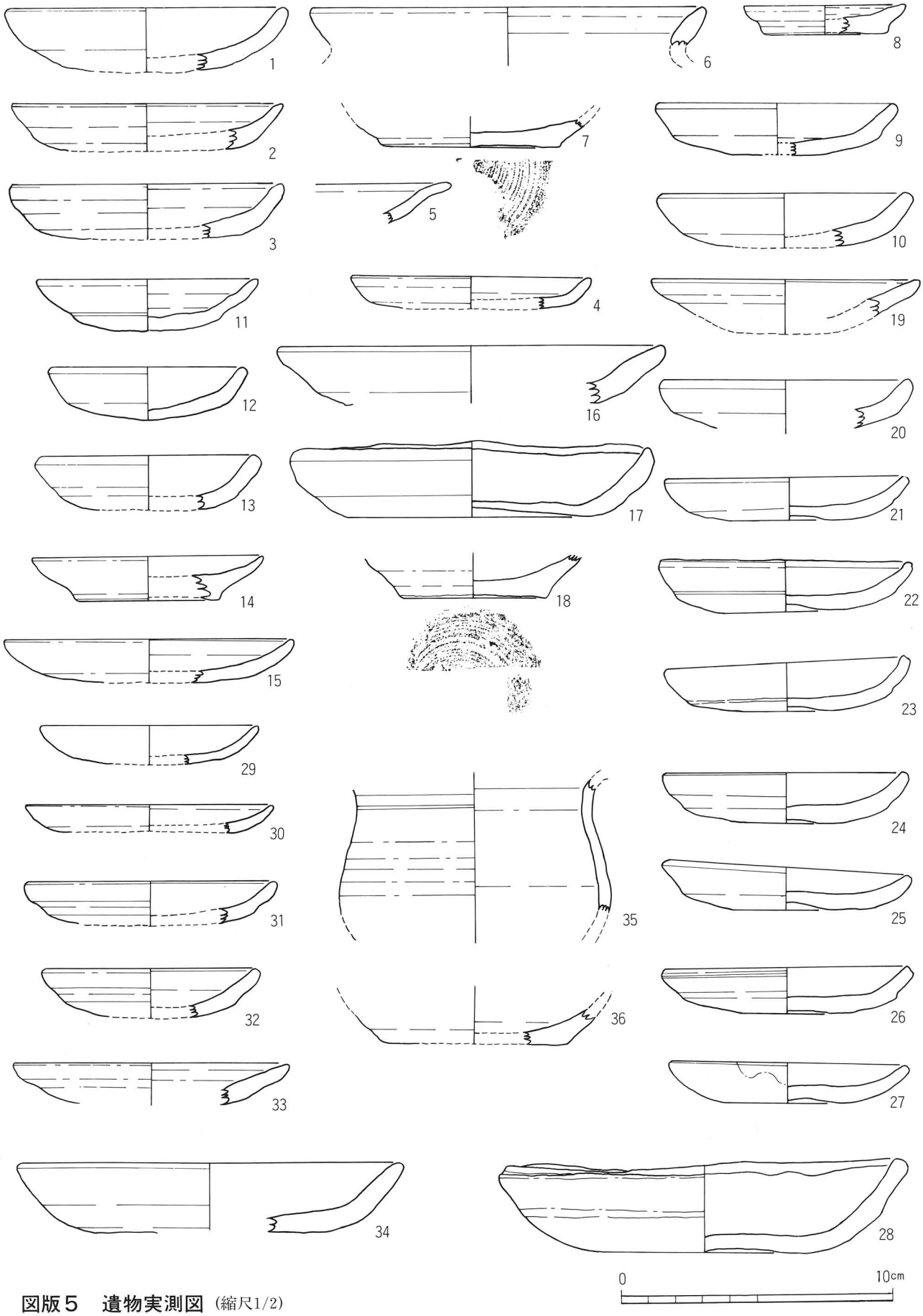
図版３　遺物実測図（縮尺１～６・８：1/3, ７：1/2）

珠洲焼１・２：２－２号墓出土蔵骨器，３：３－１号墓出土蔵骨器，４：６号墓，５：２－１号墓，
６・８：１号墓周溝，７：２－２号墓



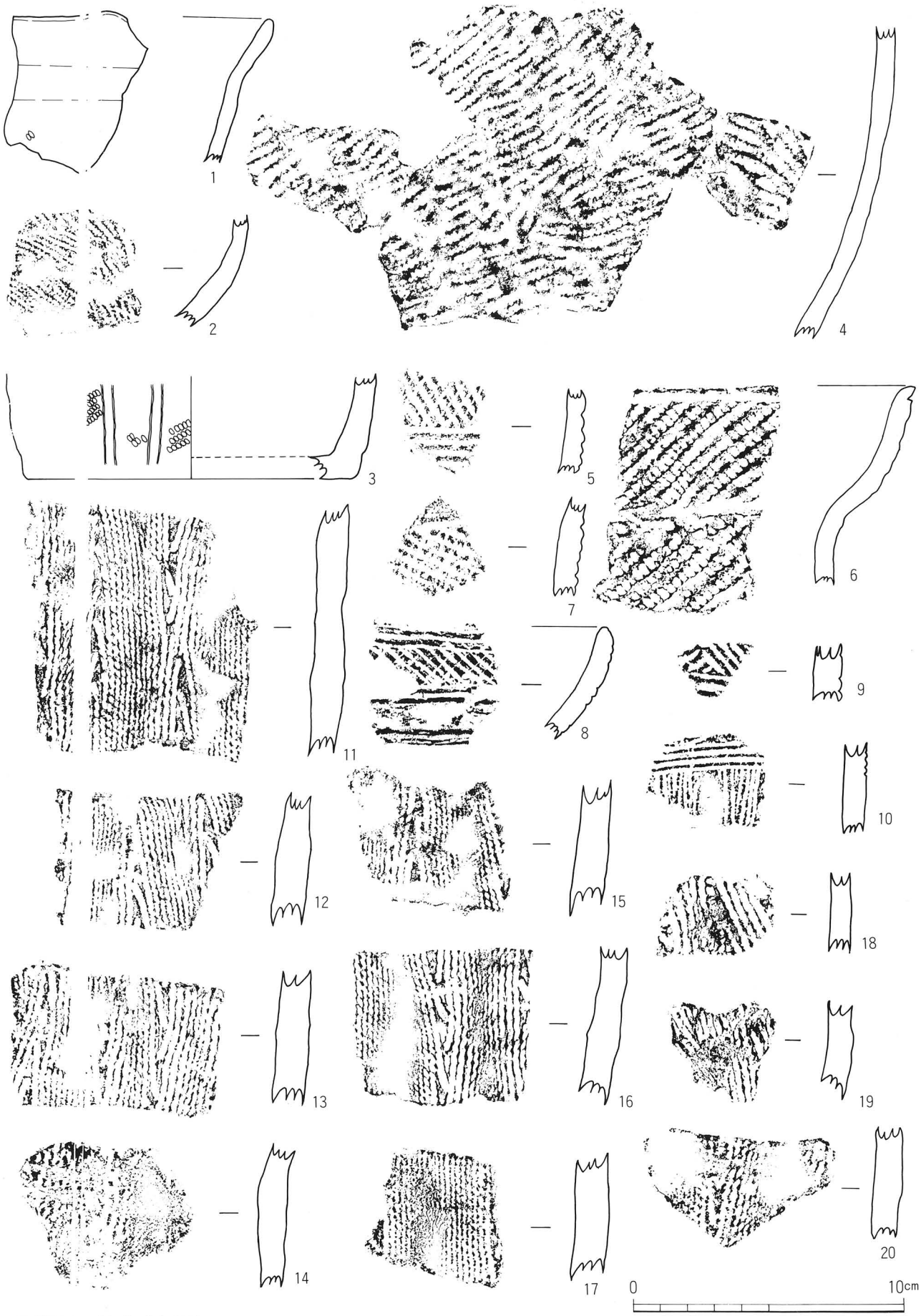
図版４　遺物実測図（縮尺７～９：1/3, 以外1/2）

珠洲焼　１～４・７：３-１号墓，５：２号墓，６・14：９号墓，
８：15号墓，９・10：３号墓，12：６号墓
須恵器　13：７号墓
土師器　11：４号墓，15：１号墓周溝



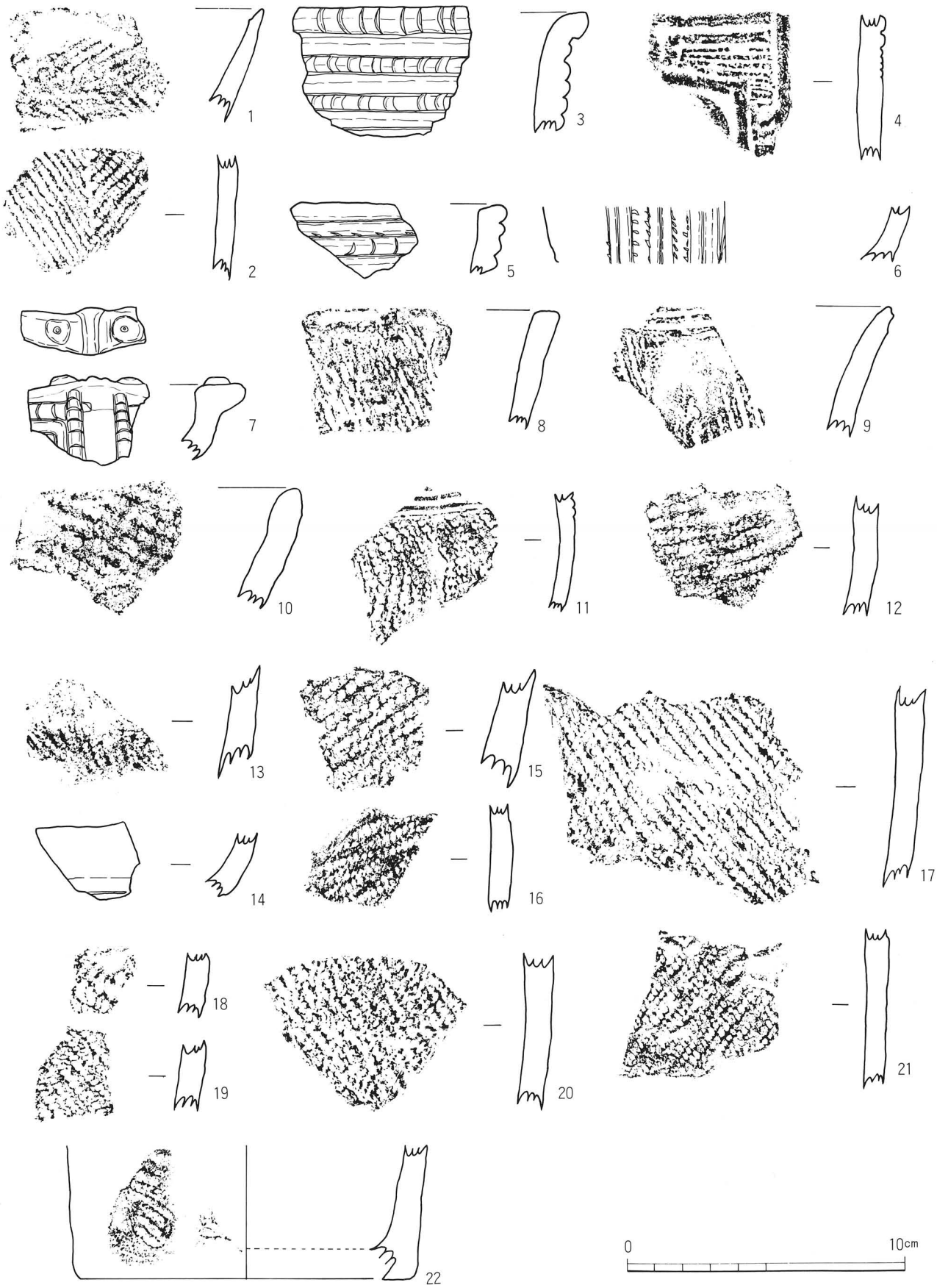
図版５　遺物実測図（縮尺1/2）

土師皿　１～３：１号墓周溝，４：２-２号墓，５：３号墓，
６・７：４号墓，８～10：５号墓，11～18：６号墓，
19・20：７号墓，21～28：８号墓，29：15号墓，30：16号墓，
31～34：17号墓，35・36：18号墓



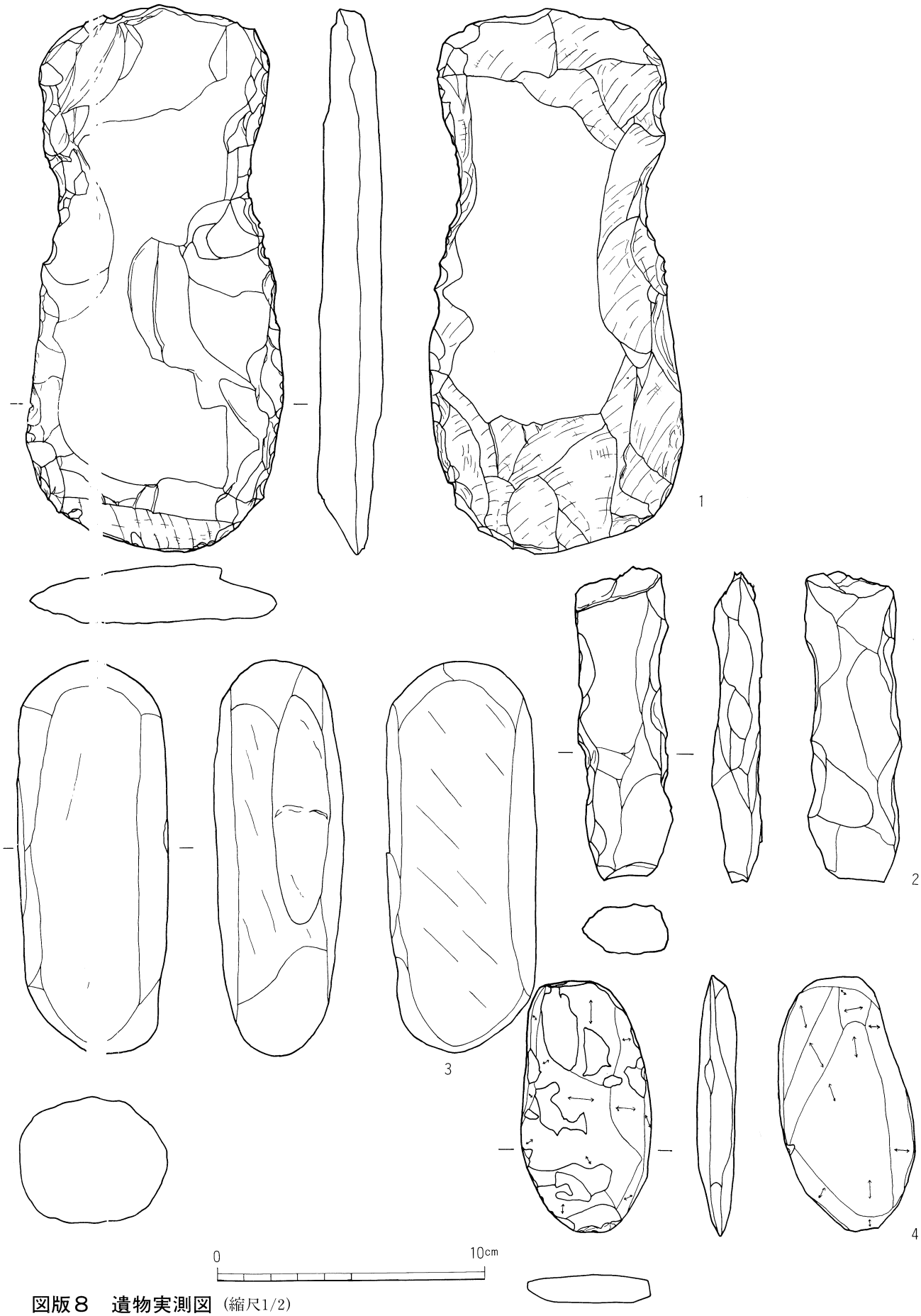
図版６　遺物実測図（縮尺1/2）

縄文土器　１：SD001，２・３：P12，４・５：P８，６：P５，７～20：遺構外



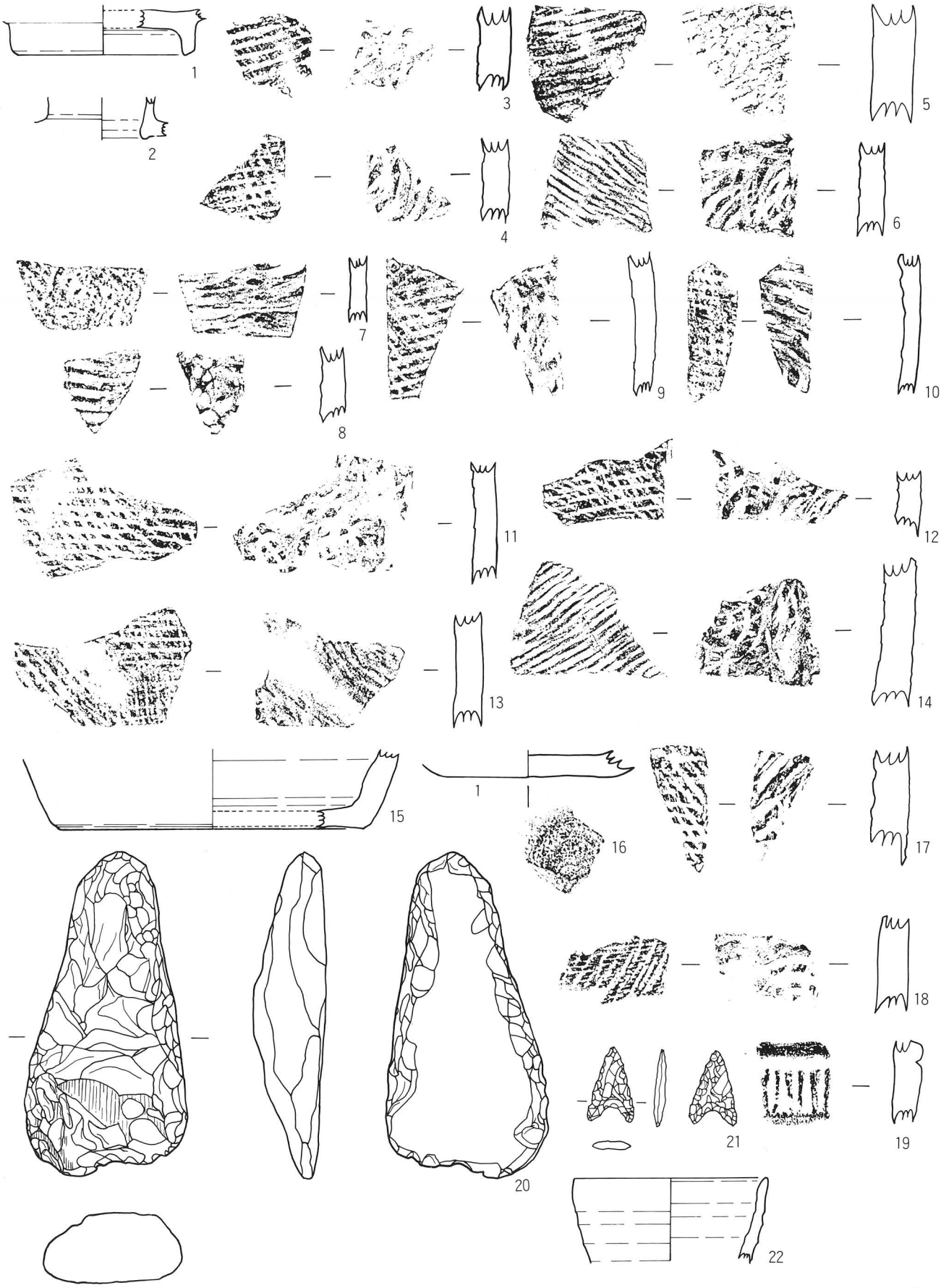
図版７　遺物実測図（縮尺1/2）

縄文土器　１～22：遺構外



図版８　遺物実測図（縮尺1/2）

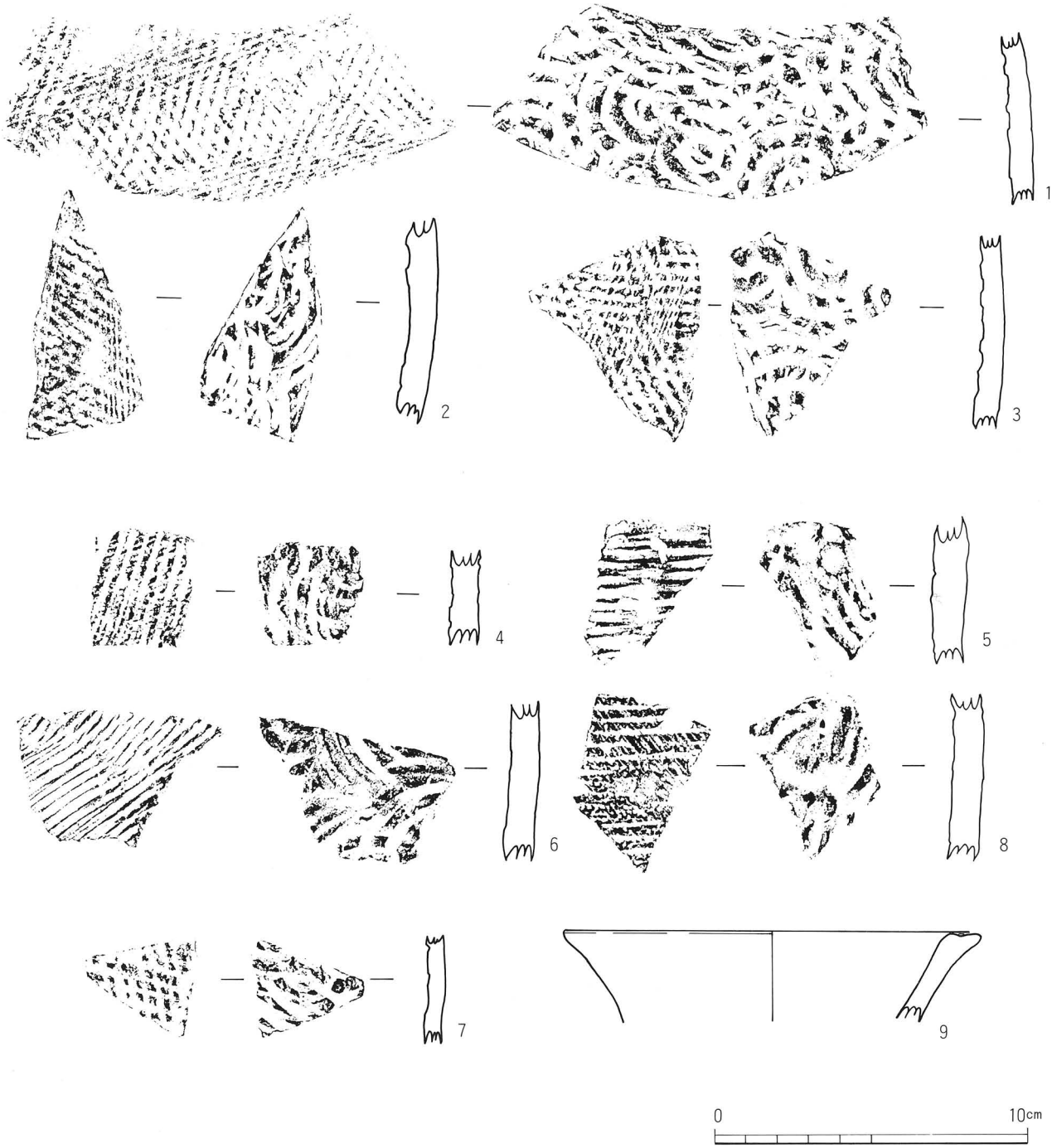
石器　１：遺構外，２：Ｐ13，３：Ｐ５，４：遺構外



図版９　遺物実測図（試掘調査地区，縮尺1/2）

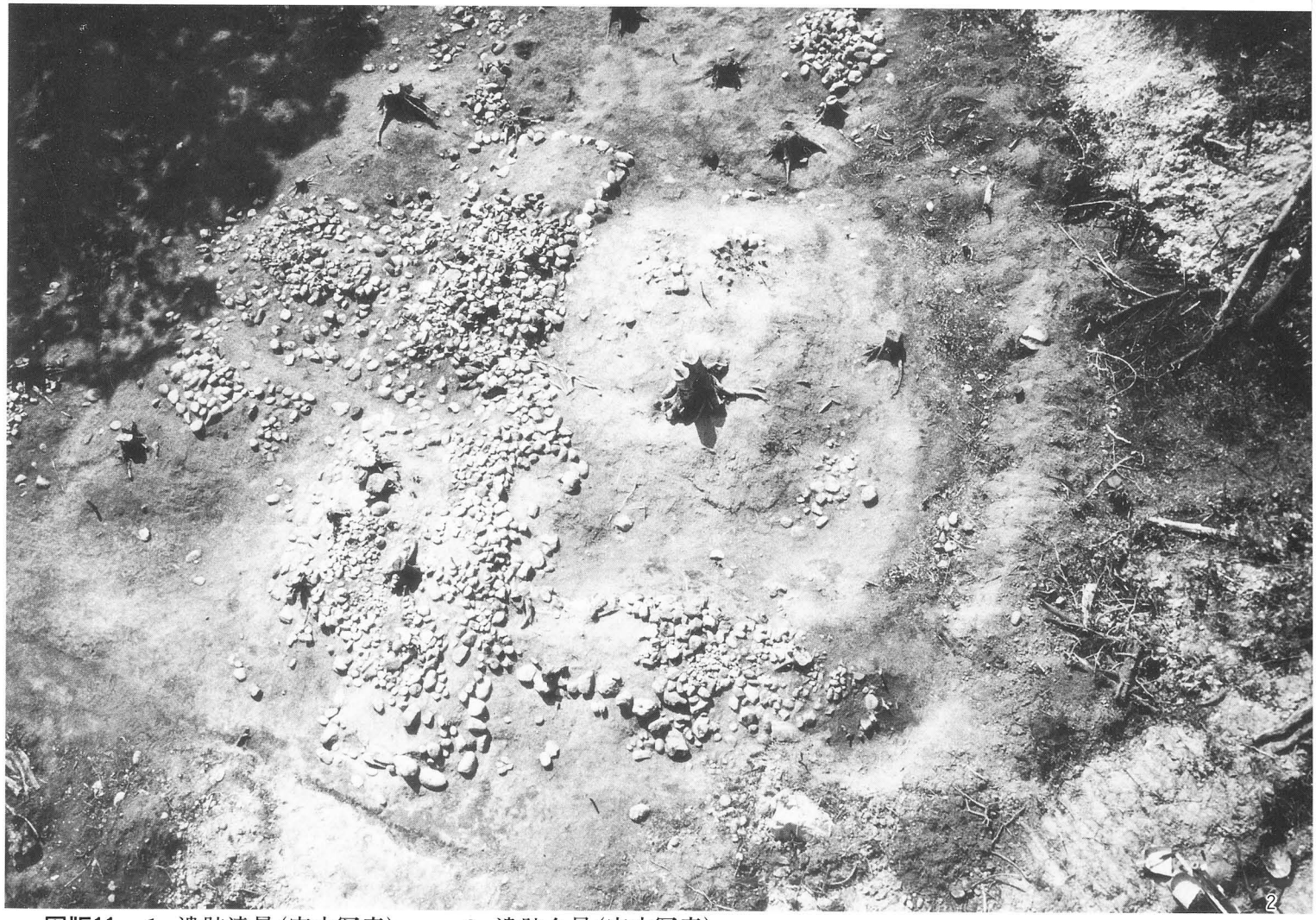
須恵器　1～16：No.1トレンチ，17・18：No.2トレンチ
縄文土器　19：No.3トレンチ
石器　20・21：No.3トレンチ
越中瀬戸　22：No.3トレンチ

0　10cm



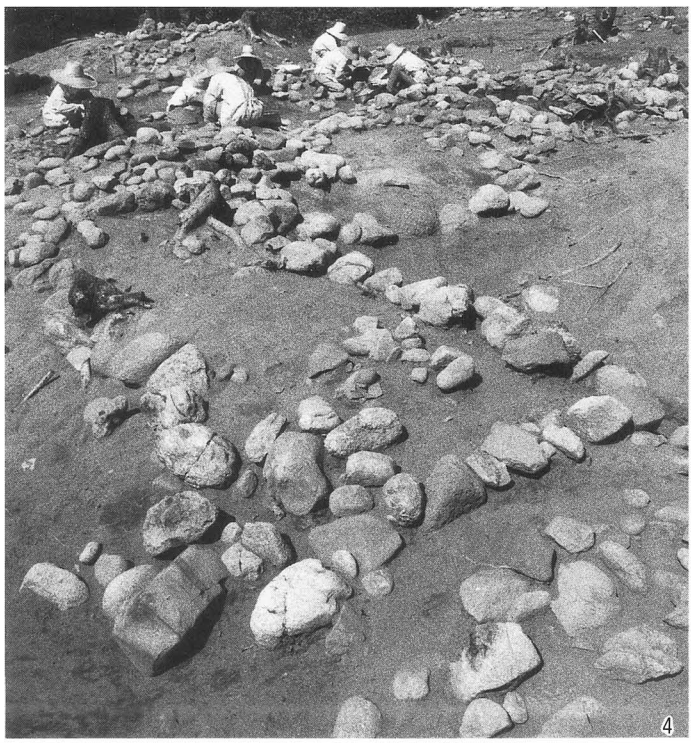
図版10　遺物実測図（試掘調査地区）

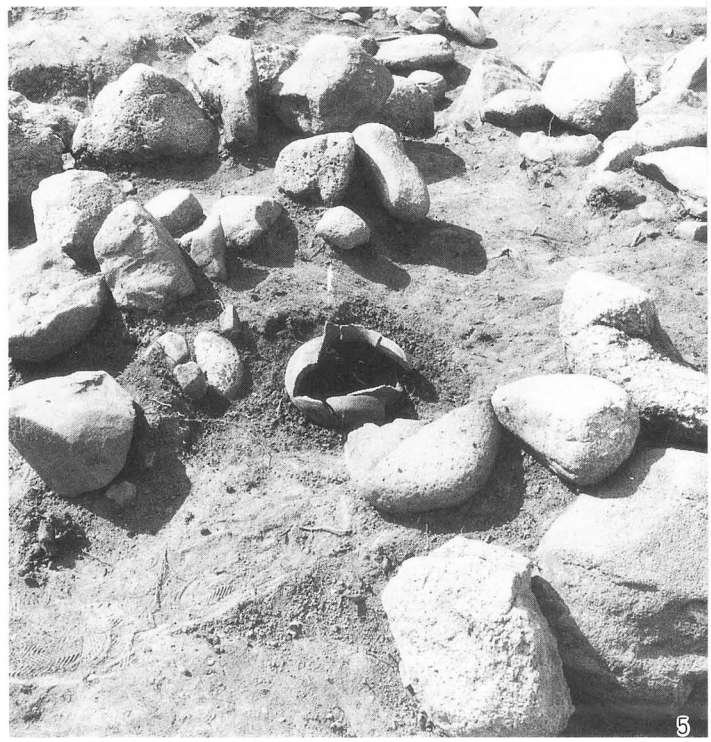
須恵器　1～4：1号墓，5・6：2号墓，7：4号墓，8・9：3号墓



図版11　1.遺跡遠景(空中写真),　　2.遺跡全景(空中写真)

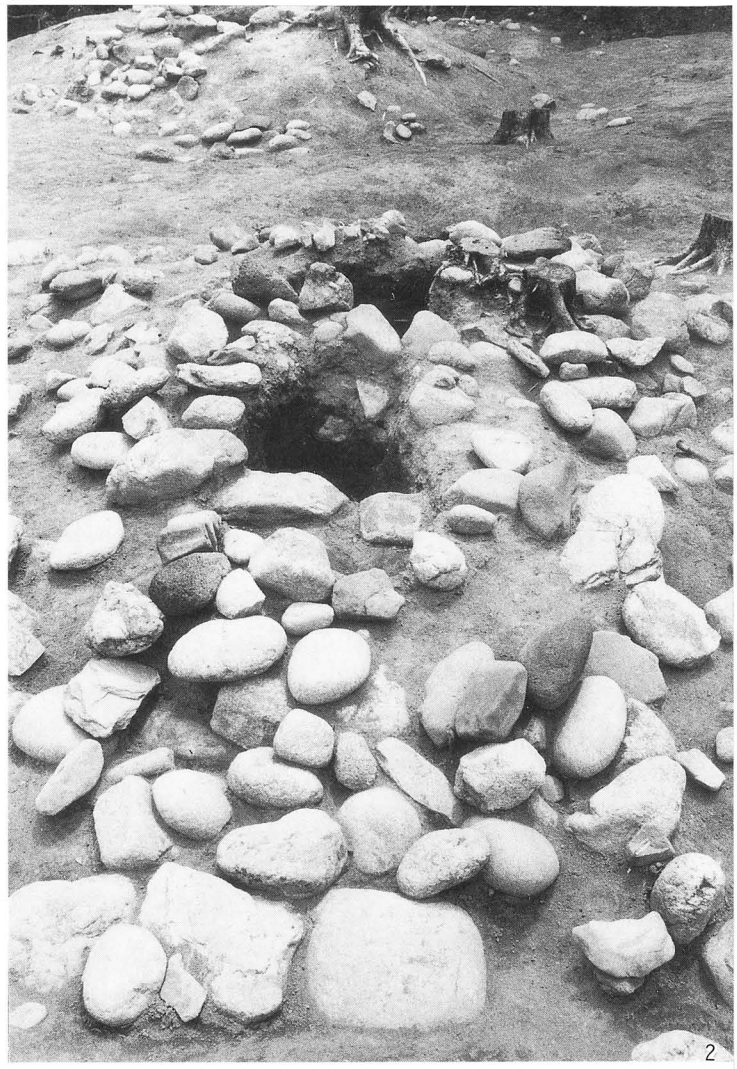
図版12　1.遺跡全景(北東より),　2.遺跡(北西より),　3.1号墓(北西より)

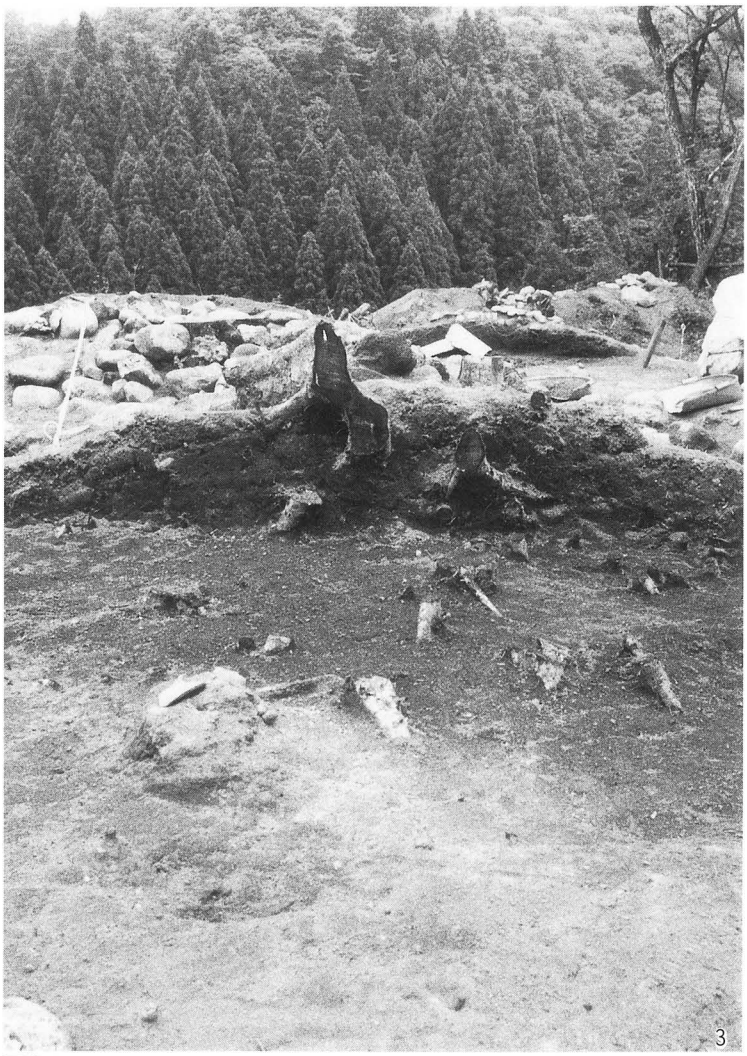




図版13　1．2・2－1・2－2号墓，　2．2号墓蔵骨器・五輪塔検出状況，　3．2号墓蔵骨器出土状況
4．2－2号墓，　5．2－2号墓蔵骨器出土状況

図版14　1．3号墓・4号墓(北西より)，　2．3号墓(北西より)，　3．3号墓擂鉢出土状況
4．3－1号墓蔵骨器出土状況，　5．4号墓





図版15　1．5号墓(南東より)，　2．6号墓(南西より)，　4．7号墓断面(北西より)　3．6号墓主体部，